The Molecular Biology Society of Japan
MBSJ NEWS
日本分子生物学会
2021.2
No.129
会報

目　次

■ 第 22 期理事長挨拶 ―― 1
■ 第 22 期役員・幹事・各委員会名簿 ―― 2
■ 第 21 期理事長からのメッセージ「明日のために、その 4」―― 3
■ 第 44 回（2021 年）日本分子生物学会年会　開催のお知らせ（その 2）― 4
【年会長の挨拶 その 2】　4
【プログラム概要】　6
【フォーラム企画の公募について（4 月 30 日㈮応募締切】　8
【日程表（予定）】　9
■ 第 43 回日本分子生物学会年会　開催報告 ―― 10
■ キャリアパス委員会　年会企画報告 ―― 11
■ キャリアパス委員会　年会における発表者の属性統計調査報告 ―― 24
■ 第 10 回（2022 年）日本分子生物学会 国際会議支援募集のお知らせ ― 26
■ 国際会議支援システム利用について ―― 27
■ 第 22 期新理事会準備会議記録 ―― 28
■ 第 21 期・第 22 期合同理事会記録 ―― 30
■ 令和 3 年度（第 43 回）通常総会記録 ―― 39
■ 令和 2 年度（2020 年度）決算報告 ―― 43
■ 監査報告書 ―― 50
■ 令和 3 年度（2021 年度）活動予算書 ―― 51
■ 学術賞、研究助成の本学会推薦について ―― 53
■ 学術賞、研究助成一覧 ―― 54
■ 賛助会員芳名 ―― 58

MBSJ
特定非営利活動法人
日本分子生物学会
https://www.mbsj.jp/

MBSJ
第44回
日本分子生物学会年会
The 44th Annual Meeting of the Molecular Biology Society of Japan
Many thanks to Yokohama, See you again!
2021年12月1日(水)～3日(金)
パシフィコ横浜
年会長 塩見 美喜子
(東京大学大学院理学系研究科)
https://www2.aeplan.co.jp/mbsj2021/
■演題登録期間 ※予定
2021年7月1日(木)～7月30日(金)
■事前参加登録期間 ※予定
2021年7月1日(木)～10月6日(水)
第44回日本分子生物学会年会事務局(株式会社エー・イー企画 内)
〒101-0006 東京都千代田区一ツ橋2-4-4 一ツ橋別館4階
Tel：03-3230-2744 Fax：03-3230-2479
E-mail：mbsj2021@aeplan.co.jp
ATGCT

第 22 期理事長挨拶

会員の皆様へ

22 期理事長を拝命致しました、白髭と申します。所属は東京大学の定量生命科学研究所です。私も本学会には既に 30 年以上、お世話になっております。

今後、理事長として、学会の本来の役割である研究交流の場、学問の発展の場を最重要視し、特に若手が主役になれる環境づくりに注力していきたいと考えています。運営におきましては、コロナ禍という特殊事情下で、「交流」に欠かせない人と人との接触が困難な時代ではありますが、このような時代背景に相応しい学会運営をまず第一に、学会の国際化、国際展開や、運営のスリム化を含め、新しい学会組織のあり方、大会運営のありかたも理事、大会組織委員、会員の皆様と模索していくつもりです。さらに、キャリアパス問題を含め、何よりも今、様々な形でいろいろなところで問題となってきております政治と科学者、研究、の関わり方についても建設的な議論の機会と発信の場を設けさせていただけたらと考えています。

これからの 2 年間、基礎研究にとっては今まで以上に厳しい風が吹くことも予想されますが、厳しい時代を生き抜くすべを皆様とともに試行錯誤しつつ考え、学問を深める場を共有し、そして、楽しんでいけたらと思います。そのためにもまず、皆様一人一人が決してことなかれ主義に陥ることなく、発信すべき場でご自身の意見を発信していくことが何よりも大切であると思っています。皆様のお世話になりつつ責任を果たしていきたいと思います。どうかよろしくおねがいします。

2021 年 1 月

特定非営利活動法人日本分子生物学会　第 22 期理事長

（東京大学定量生命科学研究所　所長）

白髭　克彦

第 22 期役員・幹事・各委員会名簿

理事長　（任期：2021 年 1 月 1 日～2022 年 12 月 31 日）

白髭　克彦（東大・定量研）

副理事長

水島　昇（東大・医）、杉本亜砂子（東北大・生命）

理　事

深川　竜郎（阪大・生命）
東山　哲也（東大・理）
見學美根子（京大・iCeMS）
近藤　　滋（阪大・生命）
粂　　昭苑（東工大・生命理工）
本橋ほづみ（東北大・加齢研）
中山　潤一（基生研）
丹羽　隆介（筑波大・TARA センター）
斎藤　通紀（京大・医）
佐谷　秀行（慶應大・医）
塩見美喜子（東大・理）
泊　　幸秀（東大・定量研）
吉田　　稔（理研・和光）
吉村　昭彦（慶應大・医）
原　　英二（阪大・微研）
一條　秀憲（東大・薬）
小林　武彦（東大・定量研）
小安　重夫（理研・IMS）
倉永英里奈（東北大・生命）
中川　真一（北大・薬）
仁科　博史（医科歯科大・難治研）
斉藤　典子（がん研）
佐々木裕之（九大・生医研）
塩見　春彦（慶應大・医）
田中　啓二（都医学研）
上村　　匡（京大・生命）
吉森　　保（阪大・医）

（アルファベット順）

監　事　荒木　弘之（遺伝研）、石野　史敏（医科歯科大・難治研）

幹　事

庶務幹事　木村　　宏（東工大・科学技術創成研究院）、岡田　由紀（東大・定量研）
会計幹事　東山　哲也（東大・理）
編集幹事　上村　　匡（京大・生命）
広報幹事　原　　英二（阪大・微研）
国際化担当幹事　林　　茂生（理研・BDR）
集会幹事　塩見美喜子（第 44 回年会）、深川竜郎（第 45 回年会）

第 22 期執行部　白髭理事長、杉本副理事長、水島副理事長、木村庶務幹事、岡田庶務幹事、東山会計幹事、上村編集幹事、原広報幹事、林国際化担当幹事、一條研究助成選考委員長

Genes to Cells 編集長　西田栄介（理研・BDR）

賞推薦委員会　泊　幸秀（委員長）、粂　昭苑、斎藤通紀、本橋ほづみ、吉村昭彦

研究助成選考委員会　一條秀憲（委員長）、見學美根子、佐々木裕之、吉田　稔、吉森　保

国際会議支援・選考委員会　小林武彦（委員長）、小安重夫、近藤　滋、中川真一、丹羽隆介

キャリアパス委員会　斉藤典子（委員長）、木村　宏（副委員長）、石谷　太、井関祥子、岩崎由香、鐘巻将人、來生（道下）江利子、倉永英里奈、島田　緑、鈴木淳史、多田政子、林　克彦、菱田　卓、平谷伊智朗

研究倫理委員会　中山潤一（委員長）、佐谷秀行、仁科博史、深川竜郎、西山朋子（特別委員）

生命科学教育　塩見春彦（担当理事）、岩崎　渉（委員）

第 21 期理事長からのメッセージ「明日のために、その 4」

『サイエンスの刺激が得続けられる分子生物学会を目指して』

2 年前の総会で、学会として成人式を終えた（20 期を終えた）ので、学会活動の内向き議論から外向き議論へと転換を図ろう、と新理事長の就任挨拶で述べました。そして、第 20 期の理事会で決定した将来計画の申し送り事項（年会の開催方針 & 国際化、年会開催ルール細目）を受けて、第 21 期理事会では学会の国際化を推進するための「5 カ年計画」を設定しました。

学会の国際化には、①海外との連携の強化、②そのためには年会の英語によるプレゼンの推進、の 2 本を同時並行的に進める必要があります。しかし、へたに年会の英語化をすると年会の魅力を削る危険性もあり、周到な準備と工夫が必要となります。そこで打ち出したのが「5 カ年計画」でした。それは会員に対して、国際化へ舵を切るが会員の総意を汲みながら国際化をする、というメッセージを込めたものでもありました。

具体的には、EMBO との国際連携を手始めとし、それに向けて年会における EMBO との交流ワークショップや若手交流プログラムの検討を行いました。昨年の 2 月に EU 連合の大使館であるヨーロッパ・ハウスで MBSJ/EMBO の合同シンポを行い、昨年の年会で EMBO とのサテライト・ワークショップが実現されました。また、EMBO フェローシップの日本国内での広報を積極的に行いました。また、韓国の分子細胞生物学会（KSMCB）との連携協定の模索を開始し、2019 福岡年会・KSMCB2020 大会（オンライン開催）・MBSJ2020 Online でお互いの執行部レベルでの交流を開始しました。さらに、アメリカの細胞生物学会（ASCB）との連携企画を来年の年会（深川年会長）から開始することになりました。

それらの動きと連動する形で、2019 福岡年会から佐々木年会長と組織委員会のご協力を得て、T 字型プログラムを組み込むようにしました。海外からの参加者が年会に参加しても、年会期間中は必ずどこかで英語の魅力的なセッションが聞ける（T 字の横棒に相当）ようにし、また年会 2 日目はシンポやワークショップのみならずポスターもできるだけ英語プレゼンのものを集めて（T 字の縦棒に相当）、日本にいながら国際学会に参加しているようにすることを目標としました。昨年末の MBSJ2020 Online（上村年会長）では、シンポジウムとワークショップはすべて英語で開催されました。今年の年会（横浜、塩見年会長）でも T 字型プログラムで行う予定です。年会への海外参加者の絶対数および割合とも確実に増えて、日本人しかいないのに英語で年会をやる陳腐さを払拭するとともに、世界のフロントラインの研究と接する機会が増え、最新情報が得られる分子生物学会の良さをさらなる高みへと導くことを推進しています。

日本の学会で国際化を進めていくことは至難の業ですが、日本分子生物学会のチャレンジはこれからも続いていくものと思っています。至難の業を遂行するために、「5 カ年計画」に当たる各年会長には執行部に入ってもらい一貫性のある体制を構築しました。さらに国際化担当幹事として林茂生会員を指名して執行部に入ってもらい、「5 カ年計画」の 5 年目の年会は林さんに年会長の大役をお願いした次第です。毎年の年会の後のアンケートでこれらのチャレンジへの会員からの意見を集約して、次年の年会へフィードバックをかけ、5 年目に一区切りつけて、学会としての今後の在り方を会員へ諮りますので、すべての会員の総和として国際化へ取り組めればと思います（それくらいの覚悟がないと国際化はできないと思います）。

これから第 22 期の理事会へと引き継いでいくことになりますが、第 21 期で踏み出した国際化へのチャレンジが、会員にとって永続的な魅力を提供できる学会へと進化していくことのきっかけになってくれればと切に願うものであります。

2021 年 1 月

特定非営利活動法人　日本分子生物学会　第 21 期理事長
（基礎生物学研究所）
阿形　清和

第 44 回日本分子生物学会年会　開催のお知らせ（その 2）

会　　期：2021 年 12 月 1 日㈬～3 日㈮（3 日間）
会　　場：パシフィコ横浜
年 会 長：塩見 美喜子（東京大学大学院 理学系研究科）
演題登録期間：2021 年 7 月 1 日㈭～ 7 月 30 日㈮※予定
事前参加登録期間：2021 年 7 月 1 日㈭～10 月 6 日㈬※予定
年会事務局連絡先：第 44 回日本分子生物学会年会事務局（㈱エー・イー企画 内）
〒 101–0003 東京都千代田区一ツ橋 2–4–4 一ツ橋別館 4 階
Tel: 03–3230–2744　Fax: 03–3230–2479　E-mail: mbsj2021@aeplan.co.jp
年会ホームページ：https://www2.aeplan.co.jp/mbsj2021/

【年会長の挨拶 その2】

新型コロナ感染は収まる兆しもなく、それでも例年のごとく新年は明けました。会員の皆様におかれましては、どの様な新年を過ごされたのでしょうか。東京は晴天に恵まれ、空を見上げると綺麗な青色が目に飛び込んできます。都心の新年は大体こんな感じでしょうか。しかし、今年の空の青さは心なしか明るく、透明度が一層高い気がします。新型コロナでテレワークが増え、CO_2 の放出も控えめとなり、その“結果”なのかもしれません。毎日の生活や行動に制約がかかるのは辛いですが、良い面もあるものだと思う今日この頃です。とはいっても医療崩壊も危ぶまれる中、健康には十分留意してお過ごしください。

さて、covid-19 パンデミックをよそ目に「MBSJ 2021 YOKOHAMA」へのカウントダウンも着々と刻まれています。年会ウェブサイトも立ち上がり（https://www2.aeplan.co.jp/mbsj2021/）、シンポジウム・ワークショップの公募もすでに始まっています（フォーラムは 3 月より企画公募を受付予定）。シンポジウム・ワークショップ・フォーラムには、その時々のサイエンスの時流が大きく反映され、各年会に特色をもたせます。皆様からの積極的な、魅力的な企画投稿をお待ち致します。2021 年会は MBSJ 初のオンサイト＋オンライン ハイブリッド形式。企画もその形式に沿って提案していただくことになりますが、如何せん前例がなく戸惑いを感じる会員も多いと思います。公募の締切は準備の都合上、2 月 26 日（フォーラムは 4 月 30 日）に設定致しましたが、企画内容に関しましては今後の状況に応じて柔軟に対応させていただく所存です。

年会特別企画である「横浜ヒストリア」に関しては前回の会報でお知らせ致しました。今回は、「富澤基金メモリアル」に関するお知らせです。富澤純一先生は日本の分子生物学の黎明期において ColE1 plasmid の複製に関する研究を進め、これが非コード RNA（RNA I）によって制御されていることを発見されました（PNAS 1981; Cell 1984）。今、非コード RNA を知らない人は皆無でしょうが、富澤先生による RNA I の発見および機能理解はその最初のものとして知られます。優秀な、しかし独立して間もないといった理由で経済支援を必要とする若手研究者を、使途の制約に縛られることなくサポートする「富澤純一・桂子基金」は 2011 年に発足しましたが、多方に惜しまれつつ 2020 年に幕を閉じました。私は初代審査員の一人として富澤先生ご列席のもと面接などに携わらせていただきましたが、富澤先生の生命科学研究への深い思い、そしてそれを担う若手教育への情熱には敬服するばかりです。

第 44 回日本分子生物学会年会
年会長　塩見 美喜子
（東京大学大学院 理学系研究科）

A new year has begun as usual, although the covid-19 pandemic shows no signs of slowing down. I hope that all MBSJ members had a safe and good start to the new year.
Despite the covid-19 pandemic, the countdown is steadily underway for “MBSJ 2021 YOKOHAMA”. The website of the meeting is now open (https://www2.aeplan.co.jp/mbsj2021/english/index.html), and we already started taking the proposals for symposia and workshops (acceptance of forum proposals will start in March).

The annual meetings reflect the current trends in science of each year, and they are best expressed in the symposia, workshops, and forums. The members of the organizing committee, program committee and secretariat are all looking forward to receiving your active and attractive proposals.

This year's annual meeting will be the first MBSJ meeting to be held in a hybrid format of on-site and online, which means that the proposals for symposia, workshops, and forums should be submitted with this format in mind. As there is no precedent for this format, I am sure that many members are perplexed how to organize a symposium, workshop, or a forum. Due to the timeline of preparations for the meeting, we have set the deadline for proposals to February 26 (April 30 for the forums), but we are willing to be flexible in terms of the content of the proposals depending on the future situation. Please feel free to contact the MBSJ2021 Secretariat for any questions.

As you may recall, I have made an announcement, via the proceeding for MBSJ members, #128, for the special event "Yokohama Historia". Today I have a similar but another announcement for "Tomizawa Fund Memorial". The Tomizawa Fund has begun in 2011 with a fairly generous private donation of Prof. Jun-ichi Tomizawa (1924-2017), who discovered the very first non-coding RNA, RNA I, that regulates DNA replication (PNAS 1981; Cell 1984). The Fund was aimed to support young investigators in life science fields, who are talented but need financial support for, for example, their start-ups. While regretted, though, the Fund was over last year. The Tomizawa Fund Memorial is to commemorate with you not only great achievements that Prof. Tomizawa made but also his sincere passion in supporting life sciences in Japan and also world-wide.

President of MBSJ2021
Mikiko C. Siomi
(Department of Biological Sciences,
Graduate School of Science,
The University of Tokyo)

【プログラム概要】

◆指定シンポジウム（全６テーマ）

テーマ１：時計・睡眠

睡眠・冬眠研究の最前線

Frontiers in Sleep and Hibernation Research

オーガナイザー：柳沢 正史（筑波大学）

睡眠や冬眠・休眠は、動物が能動的に制御された形で活動性を低下させる興味深い行動である。この分野では「なぜ神経系を持つ全ての動物種に睡眠が必要なのか」「なぜ長く覚醒していると眠気が蓄積するのか」「冬眠・休眠はどのように制御されているのか」「冬眠をしない動物種を冬眠様の状態に導くことは可能か」「睡眠と冬眠はどのように相互作用するのか」といった根源的な疑問が現在も謎として残されている。このシンポジウムでは、このような魅惑的な謎への最先端の取組みを紹介する。

テーマ２：発生・生殖

合成発生学：発生研究のボトムアップアプローチ

Synthetic Embryology - Bottom-up approaches to study human & animal development

オーガナイザー：斎藤 通紀（京都大学）、Cantas Alev（京都大学）

合成発生学は、多能性幹細胞や先進的な工学技術を用いて、発生過程を試験管内再構成し、基盤となるメカニズムを構成論的に理解することを目指す研究領域である。合成生物学は、着床前後胚の試験管内再構成や器官・組織形成を包含する幅広い研究領域を対象とし、これまで研究が困難であったヒトや様々な哺乳類の発生機構の解明を可能としつつある。本シンポジウムでは、本領域の第一線で活躍する国内外の研究者を招聘し、合成発生学の最前線と今後の展望を議論したい。

テーマ３：生物情報・技術・システム

Technology, genomics, computational biology approach towards ncRNA functions

オーガナイザー：Piero Carninci（RIKEN Center for Integrative Medical Sciences）

Non-coding RNAs (ncRNAs) play essential role in biological phenomena by folding into complex structures and functioning by interacting with other RNAs, DNA and proteins. However, their functional mechanisms are not broadly studied. In this session, we will discuss the functional mechanisms of ncRNAs with new technologies that allow us to analyze their modification, structures, spatial positioning and interactions.

テーマ４：老化

生命の連続性と老化

Continuity of the Life and Aging

オーガナイザー：小林 武彦（東京大学）、高橋 暁子（がん研究所）

生き物の生涯は、発生、継承、老化の３つステージで記述される。発生は体の構築、継承は生命の連続性を支える繁殖の時期、そして老化はそれを減衰させ終了へと導く。本シンポジウムでは継承から老化への遷移メカニズムを、幹細胞の維持と老化の分子機構の最新の研究から考える。

テーマ５：多様性

生物多様性による生物学の展開
Biodiversity for Exciting Discoveries
オーガナイザー：東山 哲也（東京大学 / 名古屋大学）

地球上には多種多様な生物種が存在する。その一方で、分子生物学を進める上では限られた種類のモデル生物に頼らざるを得ない。しかし近年のオーム解析やゲノム編集などに関する技術開発は、その壁を壊しつつある。生物多様性そのものから新たな仕組みを発見したり、ユニークな非モデル生物を活用したり、研究者の自由度は大きく増している。本シンポジウムでは、生物多様性を活かした研究を進める演者達の、ユニークな研究を楽しみたい。

テーマ６：クロマチン・エピジェネティクス

RNA による核内構造体とクロマチンの制御
RNA in Nuclear Architecture and Chromatin Organization
オーガナイザー：胡桃坂 仁志（東京大学）、岩崎 由香（慶應義塾大学）

近年の研究成果から、LLPS（液 - 液相分離）やゲノムの空間的配置によって形成される核内高次構造体が、DNA 複製や修復に加えて、遺伝子転写・発現にも重要な役割を果たすことが明らかになりつつある。そして、そうした構造体の形成や機能に、タンパク質やクロマチンに加えて、RNA が重要な役割を果たすケースも多数報告されている。本シンポジウムでは、最新の知見をもとに核内高次構造体と遺伝子転写・発現のリンクをひもといて行きたい。

◆公募シンポジウム（最大 18 テーマ）、公募ワークショップ（最大 101 テーマ）

募集要項等の詳細は年会ホームページをご覧ください（2 月 26 日㈮受付締切予定）。採否結果は 3 月下旬に応募者へご連絡いたします。

◆一般演題（ワークショップ・ポスター）

公募ワークショップでは演題の 1/3 程度を一般演題から採択いただきます。また、ポスターセッションにはディスカッサー制を導入します。演題投稿期間は 7 月 1 日㈭から 7 月 30 日㈮となります（COVID-19 の状況による変更の可能性あり）。投稿手順などの詳細は 6 月発行の次回会報、および年会ホームページにてご案内いたします。多数の演題投稿をお待ちしております。

◆フォーラム

3 月より、会員の皆様より企画の公募を受け付ける予定です。後述の募集要項を参照の上、奮ってご応募ください。
※例年と募集期間が異なりますので、ご注意ください。

◆高校生発表

年会最終日の午後に高校生による口頭・ポスター発表を予定しています。

◆市民公開講座

年会最終日の夕方に市民公開講座の開催を予定しています。
演者：小林　武彦（東京大学）
　　胡桃坂仁志（東京大学）

◆横浜ヒストリア企画

過去の横浜年会の年会長にインタビューした内容をまとめた小冊子の無料配布を予定しています。また、過去に横浜で開催した年会のポスターや要旨集の展示コーナーを設置予定です。

◆富澤基金メモリアル企画

富澤基金若手研究助成事業の振り返りとして、メモリアルワークショップなどを予定しています。

◆バイオテクノロジーセミナー

企業との共催によるランチョンセミナーを開催いたします。

◆その他の企画

その他の企画は詳細が決まり次第、年会ホームページにてご案内いたします。

【フォーラム企画の公募について（応募締切：2021 年 4 月 30 日㈮）】

生命科学と関連するが、シンポジウムやワークショップ形式にとらわれない、比較的自由度の高い企画や、技術開発あるいは社会との関連が深い企画を「フォーラム」と位置づけ、1 テーマ 90 分の時間枠（19：15〜20：45）で、会員の皆様より企画を公募します。年会ホームページ内にリンク予定の応募サイトより奮ってご応募ください。

新学術領域等の「冠」企画の実施も可能とします。ただし、班会議と同様の企画にならないよう、領域外の講演者を必ず含めてください。ホームページやプログラム集への冠表記には、10 万円の協賛金の負担をお願いいたします。

冠表記を希望する場合は、応募サイトの該当欄へ詳細をご登録ください。

◆応募要領

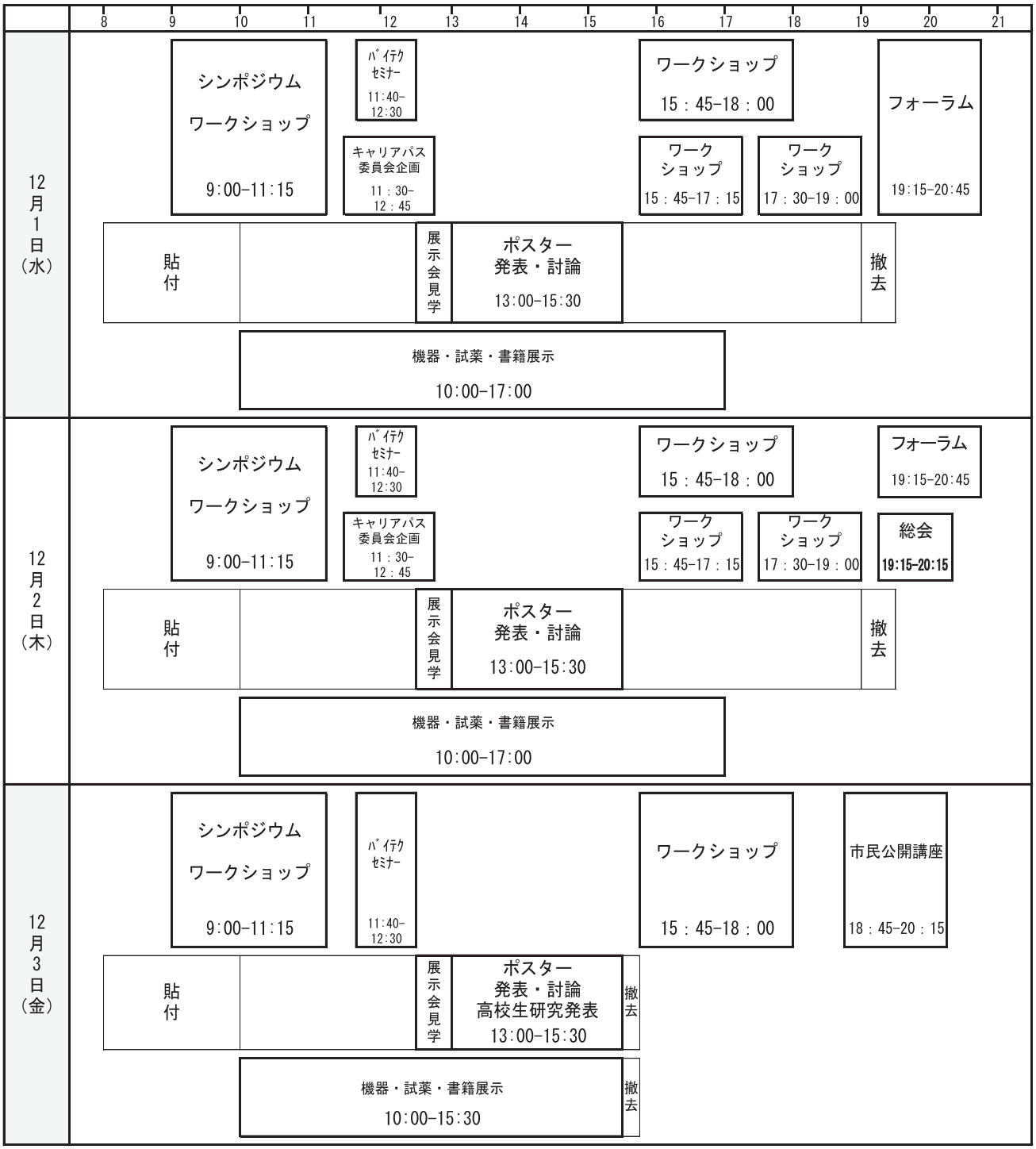
年会ホームページより専用の応募サイトにアクセスし、4 月 30 日㈮までに下記の必要情報をご登録ください。

1）テーマタイトル（和文・英文）
2）オーガナイザーの氏名（和文・英文）・所属（和文・英文）
※オーガナイザーは 1 名でも 2 名でも構いませんが、少なくとも 1 名は分子生物学会の会員であることが必須です。
3）概要（言語）：使用言語に応じて日本語あるいは英語のいずれか
4）概要（文字数）：日本語の場合全角 400 文字程度、英語の場合半角 800 字程度
5）予定演者の氏名（和文・英文）・所属（和文・英文）
6）連絡窓口となるオーガナイザーの氏名、連絡先
7）予想される聴衆数
8）冠表記希望の有無、希望する場合の団体名

◆お問合せ先

第 44 回日本分子生物学会年会事務局（㈱エー・イー企画 内）
〒 101−0003 東京都千代田区一ツ橋 2−4−4 一ツ橋別館 4 階
Tel: 03−3230−2744　Fax: 03−3230−2479　E-mail: mbsj2021@aeplan.co.jp

【日程表（予定）】



※あくまで2021年2月時点での予定であり、今後変更される可能性があります

第 43 回日本分子生物学会年会　開催報告

昨年 12 月 2 日㈬から 12 月 4 日㈮までの 3 日間開催しました、第 43 回日本分子生物学会年会 MBSJ 2020 Online は、4,662 名（のべアクセス数 11,783）のご参加と、合計 2,240 演題にのぼるご発表をいただき、盛会のうちに終了いたしました。

第 43 回年会では、基礎研究へ新しい活力をもたらすための実りある議論を最重要課題と位置づけました。“New Faces, New Questions, and Revitalized Worlds”とのテーマの下、萩原正敏組織委員長をはじめとする組織委員、井垣達吏プログラム委員長をはじめとするプログラム委員と約 2 年間にわたって議論を重ね、企画・構成に取り組んできました。開催年になって、新型コロナウイルス感染症の流行が拡大しはじめました。感染により健康を害された皆様、感染拡大の影響を受けられた皆様には、一日も早いご快復を心からお祈りいたしますとともに、世界レベルでの早期収束を願っております。

第 43 回年会のプログラムの特徴としては、言うまでもなく全編オンライン開催となったことに加え、シンポジウム 19 セッションとワークショップ 91 セッションの計 705 演題全てを英語による発表としたことがあります。また、セッション終了後には、発表者と参加者の議論の場としてSpatialChat を利用したトークルーム“Meet the Speakers”をもうけました。ポスターセッションでは、日本分子生物学会始まって以来初のオンライン開催となったにもかかわらず 1,535 題の発表をいただき、若手研究者を含めた多数の皆様にディスカッサーとして議論を盛り上げていただきました。また、年会初の試みとして、国内の投資家（ベンチャーキャピタリスト）や年会協賛企業等に、会員の皆様が研究開発中の先端的な医薬品シーズ等を紹介するマッチングイベント「ショーケース」を取り入れました。さらに、夕方から開催されたフォーラム 30 セッションでは、会場からの帰路にかかる時間を考慮する必要がなくなったため、終了時刻を 20 時、あるいはさらに遅くまで延長しました。最終日に *Developmental Cell* 誌のエディターでいらっしゃる Spyros Goulas 氏をお招きして開催した年会長企画にも多くの皆様にご参加いただき、ありがとうございました。Goulas さんから、日本の基礎研究コミュニティーの revitalization に向けた具体策、そしてジャーナルエディターの立場から論文投稿者への力強いエールを頂き、胸が熱くなりました。

昨年夏の時点で、私は「Zoom にとって代わる次世代のオンラインプラットフォームが、彗星のように登場してくれないか」と心ひそかに期待していました。結果的にその姿は見えず、Zoom をメインに利用することになりましたが、それでもオンライン開催のメリットを実感された方は多いのではないでしょうか。個人的には、オンライン開催を捨て去る選択はもはやないと思います。研究集会をオンライン開催にするのか、オンサイト開催にするのか、あるいはハイブリッド形式とするのかは、今後も主催者が解答を模索し続けなければならない学術界全体の難問です。MBSJ 2020 Online に参加いただいた皆様の経験と、それを踏まえたテクノロジーの一層の進展が、この問いの解答を照らす光明となることを願っています。

本年会の開催にあたりまして、未曾有の厳しい経済情勢のなかで寄付、展示、バイオテクノロジーセミナーや広告へのご出捐をいただきました企業・団体の皆様に、心から感謝申し上げます。また、お忙しいなかシンポジウム企画やプログラム編成、オンライン開催用のマニュアルを検討してくださった皆様、ポスターディスカッサーとしてお時間を割いてくださった皆様、そして、事前準備から開催当日まで一丸となって年会の企画運営に尽力いただいたエー・イー企画の皆様ならびに学会事務局の皆様と、年会に貢献していただいたすべての方々、および参加者の皆様に厚くお礼申し上げます。

2021 年 2 月
第 43 回日本分子生物学会年会
年会長　上村　　匡
（京都大学大学院生命科学研究科）

キャリアパス委員会　年会企画報告

キャリアパス委員としての役目を終えて

胡桃坂　仁志

2020年末日をもって、キャリアパス委員会の委員長の役目を終えました。2015年の元日から委員として参加して以来、6年の間、キャリアパス委員会での活動に参加できたことは、とてもありがたい経験となりました。委員会メンバーとの議論やランチョンセミナーで参加者から寄せられたご意見の数々は、私自身のラボ運営や研究スタイルにおいても考えさせられる点が多く、実際に私のラボ運営スタイルは2015年当時からは考えられないほど大きく変化しました。改良になっていると良いのですが。

2020年は、未曾有のコロナ禍で、世界中が異常な状況に陥りました。人々は何気ない日々の暮らしにまで大きなストレスを抱え、先行きが見通しづらい中での生活を余儀なくされてしまいました。それは容易に解消されそうなものではなく、2021年も引き続き世界はコロナと対峙していかざるを得ないでしょう。そのような状況下で、分子生物学会では初となるオンラインでの年会が開催されました。年会長であった京都大学の上村匡先生の素晴らしいリーダーシップのおかげで、例年に引けを取らない盛況な年会であったことはとても嬉しいことでありました。年会を運営いただいた組織委員の方々にも深く御礼を申し上げます。

私が大学院生だったおよそ30年前は、世界のトップで活躍する日本人研究者はそれほど多くはありませんでした。そのため年会では、欧米から著名な研究者を招聘することが多く、彼らから“教えを請う”というスタイルが主流でした。言い換えれば、それに違和感を感じないくらい、日本の研究は発展の途上にあったと言うことだと思います。もちろんその当時においても、世界のトップランカーとして国内外から評価されている研究者もいらっしゃいましたが、現在では、その頃からは考えられないほど、日本人研究者のレベルは向上したと思います。それぞれの分野で行われる国際学会でも、日本人のスピーカーがいないということは少なくなってきましたし、欧米からの留学生を受け入れている研究室は多数存在しています。分子生物学会の年会でも、シンポジウムやワークショップに海外からいわゆる“大御所”を呼ぶのみではなく、新進気鋭の若手研究者を招聘して議論や共同研究を発展させるという企画が多くなってきています。これはまさに、日本の研究が発展途上の段階を経て、次のステージに到達していることを示しています。

資源の乏しい我が国が国際的に存在感を示すためには、研究力の向上こそが重要です。しかし一方で、その担い手である若者たちの研究者離れは著しく、優秀な若い人材が博士課程に進学せず、研究以外の分野で職に就くことが多くなっています。研究者を目指していた若者が、修士課程の段階で嫌になってしまうのはなぜなのでしょうか？ 小林武彦前委員長から引き継いでからの2年間、キャリアパス委員会において私が最も重要に考えていたことは、若者のサイエンティスト離れをいかに防ぐか、ということでした。

このような背景のもと、キャリアパス委員会では若者に研究者としての魅力を伝え、現状の問題を抽出し、改善策を考えるための企画を行ってまいりました。コロナ禍での異常な状況下ではありましたが、2020年の年会においても委員会主催のランチタイムセミナーを2つ企画し、実施することができました。オンライン開催の良かった点として、部屋の収容人数に縛られることなく、参加人数の制限が不要になったことがありました。九州大学の林克彦委員に座長をお願いした、『あなたのその研究テーマ、続けますか？　変えますか？』ではのべ752人、第一三共の來生（道下）江利子委員に座長をお願いした『海外へGO!?』ではのべ466人と、オンサイトでは収容しきれないほどの参加者をお迎えすることができたことは、怪我の功名でした。加えて、アメリカ合衆国、英国、ドイツ、フランス、スイス、香港、台湾、シンガポール、大韓民国からの参加もあり、オンラインならではのグローバルなディスカッションができたのではないかと思います。詳しくは、林委員、來生（道下）委員のまとめの文章と記録動画（学会HP）をご覧ください。

若者のサイエンティスト離れの1つの大きな要因として、研究者の雇用が不十分であることがあげられます。若手研究者が大学の助教や研究機関の研究員のポストを得たとしても、任期付きポストであることがほとんどで、落ち着いて研究することが大変難しい状況となっています。研究者の流動性は重要ではありますが、自然発生的に起こる流動性に意味があるのであって、任期によって強制的に動かすことのプラス効果は期待できるのでしょうか。このような先輩たちの状況を見た大学院生が、研究者を続けることに魅力を失ってしまうことは容易に想像できます。また、せっかく博士課程へ進学を希望したとしても、経済的な理由であきらめる場合も少なくありません。博士課程学生への経済的な支援も重要な課題です。これらを解決するためには、どうしても国からのサポートが必要になります。キャリアパス委員在任中に、

分子生物学会員からのアンケート結果を携えて文科省を訪問し、現状の説明と改善のお願いを行ってきました。このような活動は地道ではありますが、是非、今後も継続してお願いしたいと思っています。

私自身が博士課程に進学した一番の理由は、「アメリカに行ってみたい！」ということでした。海外でポスドクをしていた先輩が帰国して、そのセミナーで見たアメリカの大学の写真が強烈なインパクトでした。先輩の研究そのものも分かりやすくて、「アメリカで研究してみたい！」という思いに突き動かされたのを覚えています。それが学部4年生か修士1年生の時でした。アメリカで研究者として雇用されるためには博士の学位が必要でしたので、博士課程に進学しました。研究者になるためというよりは、むしろアメリカに行くために進学した博士課程ではありましたが、私の師である柴田武彦先生（当時、理化学研究所）との出会いは、研究生活をこの上なくエキサイティングなものに変えてくれました。学位を取得後、アメリカの国立研究所 National Institutes of Health（通称 NIH）にてポスドクとして雇用してもらいました。当時も日本での研究者のポストは十分とは言えない状況でしたので、アメリカでのポスドク後のことなどほとんど考えていませんでした。また、1年ごとの雇用形態でしたので、当然、将来の不安を感じながらの日々ではありました。しかしそれ以上に、小さいながらも新しい発見の喜びや、仲間とのディスカッションや馬鹿話といった日々の研究者としての生活に充実感を覚え、生きている実感を得ることができていました。

このように振り返ってみると、私が研究者としていまだに頑張っていられるのは、先輩、先生、仲間たちとの出会いのおかげであることがはっきりわかります。その後も、研究仲間の存在は、いかなる状況の時でも人生の支えになってくれています。分子生物学会では、数え切れないほどの研究仲間と知り合うことができました。こんなことを、キャリアパス委員の活動を通して若い世代の人たちに伝えたかったのです。

最後になりましたが、年会でのランチョンセミナー・ランチタイムセミナーや文科省への訪問など、常にキャリアパス委員会の活動をさせてくださった分子生物学会の並木さん、山口さん、福田さんには、心から感謝しております。彼らのサポートなしでは、キャリアパス委員会の活動は何一つなし得なかったと思います。ありがとうございました。新たな研究仲間を獲得するためにも、オンサイトでの年会の開催が復活する日を楽しみにしています。

【あなたのその研究テーマ、続けますか？　変えますか？】

●日　時：2020 年 12 月 2 日㈬ 11：45〜13：00
●会　場：オンライン開催（MBSJ2020 Online）
　　チャネル：Ch 01
●参加者数：752 名（のべ人数）

研究テーマの設定は、研究の進捗のみならず研究者のQOLやキャリアパスまでも左右するとても重要なものである。一人の研究者がその研究者人生を賭けて取り組めるテーマはそれほど多くなく、ましてや様々なデータの提出を求められて論文発表のために多くの時間・労力・資金が費やされる昨今においては、研究テーマの設定の重要性は益々強くなっているのではないだろうか。

研究者としてはキャリアを通して様々な場面で研究テーマと向き合うことになる。研究者としてのスタートを切る学生は、ほとんどすべての場合において、PI から与えられた研究テーマと向き合う。そこには運・不運があるが、それだけが学生時代の研究の成否を決めるわけでもなく、様々な工夫や鍛錬をもって研究テーマの遂行に腐心する。ポスドクや若手スタッフは、PI の研究テーマに自身のアイデアを重ねる機会が多くなると同時に、自身の研究テーマについて考えることも多くなるだろう。一方 PI は、自他の研究の進展や新しい技術開発の波にもまれながら、新しい研究テーマの考案を強いられる。この時、学生時代からは想像もつかなかった苦難や恐怖を味わう PI も少なくないだろう。すなわち研究者人生の多くは研究テーマの設定に費やされると言っても過言ではなく、それに向き合う立場の違いから様々な軋轢も生じる。

2020 年の分子生物学会のキャリアパス委員会ランチタイムセミナーでは、研究者であれば誰もが悩みのひとつとなる「研究テーマ」を取り上げ、特にキャリアを形成する若い研究者が他の研究室の状況を理解するとともに、現在の研究テーマの遂行や展開のためのヒントを得られるような企画を目指した。「あなたのその研究テーマ、続けますか？ 変えますか？」と銘打ったこの企画では、事前アンケートに 548 名、またオンラインで行われたセミナーにのべ 752 名の参加があり、様々な意見を共有することができた。

セミナーでは、まず事前アンケートの結果が紹介された。予想どおりであったが、研究テーマが順調に進捗している学生・ポスドク・non-PI は、研究テーマが順調ではない人と比べて、研究テーマや研究室に興味をもち、他の研究者ともよく議論する傾向にあった。これらの因果関係についての議論の余地はあるが、研究テーマの進捗が順調であれば研究者の QOL が上がることを再認識させられた。また順調に推移している研究テーマの多くは、当初のものから修正を加えていることも判明し、研

究の進捗に応じた修正の重要性もクローズアップされた。興味深かったのは、研究テーマが順調にいかない理由について、学生・ポスドク・non-PIは「自身の努力不足」を一番に挙げたのに対し、PIは「テーマが悪い」ことをほぼ同率一番に挙げた点であった。どちらかというと若い研究者はテーマが絶対と思いやすく、PIは比較的冷静に（または恐々として）テーマの良し悪しを評価していることがわかる。事前アンケートでは、PIに内緒で行う「隠れテーマ」についても意見を求めたが、学生・ポスドク・non-PIは職位が上がるにつれ隠れテーマをもつ傾向にあり、PIはそれを許容する傾向があった。一方で、研究費の不足や研究テーマの集約という理由から隠れテーマを許容しないPIも一定数（約30%）いた。興味深かったのは、多くのポスドクやnon-PIが自身の独立のために隠れテーマをもっていると回答した一方で、現在PIの一定数（約30%）は自身のキャリアで隠れテーマを「ほとんどしなかった」または「まったくしなかった」点であった。これは必ずしも隠れテーマが独立と直結しないことを意味しており、後述するようにセミナーでも議論された。

次にセミナーはQ&A方式の議論に移った。パネリストとして、胡桃坂仁志（東京大学）、倉永英里奈（東北大学）、鈴木淳史（九州大学）、花嶋かりな（早稲田大学）、山本卓（広島大学）にご参加頂いた。様々な議論がされたが、本稿では「研究テーマ」に関するQ&Aの中で見えてきた「研究者としての資質とは」「研究テーマの修正とは」「独立するための隠れテーマとは」という3点に論点を絞ってセミナーの内容を要約したい。なお本文中に引用した意見には要約・意訳があることをご了承頂きたい。

セミナーで研究テーマについて議論する中で「研究者としての資質とは」という言及が多かったように思う。すなわち若い研究者が自身の研究テーマがうまく進まない、または面白くない場面でどのように行動するかにより、研究者としての資質が問われるといった内容だ。パネリストからは自身の経験談も含めて「一見、面白い研究でなくとも自分なりにアレンジして面白い方向に持っていける（花嶋）」「テーマの良し悪しばかりでなく、自分なりに研究を楽しもうとする姿勢や工夫が大事（山本）」「研究テーマが面白くない場合、PIの興味に即した形で自分なりのテーマをアレンジするのが大事（胡桃坂）」などの意見が聞かれた。共通するのは与えられた研究テーマを無条件に丸呑みするのではなく、そのテーマを始めるにあたり、または得られる結果に応じて、自分なりの考えや工夫をもって研究に臨むことが重要であるという意見である。実際に研究テーマがPIの言う通りに展開することはまずないし、時にはPIすら解釈に困る結果が出ることもある。若い研究者は与えられたテーマを自分の研究として捉え、様々な考えを巡らすうちに、新しい可能性や展開が目の前に広がり、引いてはその研究テーマに愛情が芽生えるのではないだろうか。言い換えれば、愛情が芽生えるまで研究テーマに対して真摯に向かい合えるのが研究者として必要な資質ということになる。「ポスドク時代に明らかに面白くない研究テーマを与えられた（胡桃坂）」場合でも、それを言下に否定するのではなく、自分なりに温めて、時にはアレンジを加えて、発展させることが、PIという一人間との研究の営みの中で良い成果を出していくコツのようである。

上記の内容に合わせて、セミナーでは研究テーマの修正の必要性について活発に議論された。まずは前提として、PIは研究テーマの修正に寛容であるという点と、これまで順調に進捗した研究テーマの多くは修正という過程を経ているという点が確認された。その上で「研究テーマの修正とは」どのようにされるべきであろうかという議論になった。セミナー中に頂いたコメントおよびパネリストたちの意見は、研究テーマの修正にはPIと実験者（学生・ポスドク・non-PI）のコミュニケーションが極めて重要であるということに終始した。「最近は学生も大人しく、なかなか研究テーマの修正を議論する機会がない（コメント欄）」「なかなかPIを怖がって研究の修正を言い出さない場合がある（山本）」などの意見があったが、「サイエンスを語る上ではボスではなく人（胡桃坂、鈴木）」という共通意識がある限り、若い研究者は積極的にPIと研究テーマの修正について議論するべきだと感じた。もちろん議論なので理論構築と伝達力が必要であるが、PIとの真剣な議論を繰り返すうちにそれらのスキルも向上するだろう。テーマの修正と合わせて研究者としての必要なスキルが向上するのだから一石二鳥である。PIと実験者双方の意見は研究テーマの修正を有意義なものにするための両輪である。「ブレークスルーの元を作るのは最前線にいる学生（コメント欄）」であるし「最前線で戦っている実験者は目の前のことに集中しているのに対し、PIは一歩引いた立場で判断できる（胡桃坂）」ためである。繰り返しであるが、実験者が思っている以上にPIは研究テーマの修正に寛容であるため、積極的に議論を交わすのが良いであろう。ただし「PIを論破するような勢いはあっても良いが仲間割れはダメ（コメント欄）」「議論においては常に相手に対するリスペクトは大事（鈴木）」ということが前提になっていることを付け加える。

最後に隠れテーマについて議論された。事前のアンケートではポスドク・non-PIが自身の独立のために隠れテーマをもつという意見が多かったために、キャリアデベロップメントにおける「隠れテーマとは」について議論された。現在PIとなっている研究者の意見として

は「隠れテーマを持たず研究室のテーマをしっかりやったか、隠れテーマを早々にオープンにして研究室の発展に貢献したことが独立への道（胡桃坂）」「隠れ続けてやれるのはほんの一部で、オープンに議論していくことが大事（倉永）」というものが大半であった。隠れテーマの定義については議論の余地はあるが、成果発表のプロセスや研究費の適正な運用、また研究における議論の重要性という観点から、隠れテーマをオープンにせずに継続および成就させることは難しく、早々にオープンにして発展させる方が建設的であると思われる。隠れテーマを持つ背景として、昨今のアカデミックポジション獲得の困難さがある。しかしながら、隠れテーマをオープンにして研究室の成果に組み込まれたとしても「アカデミックポジションへの採否を審査する側は候補者の研究室における立場や背景をちゃんと評価する（倉永）」ので、現状のポジションでしっかりとした研究成果をあげることが重要であると思われる。

以上がセミナーで議論されたことの要約である。若い研究者、とりわけ学生やポスドクはPIから与えられる研究テーマと向き合うことになるだろう。しかしながらPIもサイエンスの前では、少し知識を持った一人間であり、（一生懸命考えてはいるものの）研究テーマに関して完結までの隅々を見通せているわけではない。この点が実験者に申し訳ないと思う理由でもある。若い研究者は、その見通せない最前線に繰り出して誰よりも早くそこにある風景を見出し（それが実験者の醍醐味でもあるが）、それをPIの描写と照らし合わせる。その作業の中で、自分の考えを持つための知的体力を身につけ、最前線の攻略法について、果てはテーマの修正についてPIと議論できるようになれば、研究者としてのトレーニングの大部分は終了しているように思う。研究テーマについては、学生もPIも関わらず翻弄され、悩まされているのである。本企画によりその意識が共有され、立場を超えて研究テーマについてオープンに議論するきっかけとなることを祈って、本企画の総括とする。

（文責：座長・林　克彦）

【セッション中の参加者コメント】

No	コ　メ　ン　ト
1	・希望していない分野に配属され、今後自分でやりたいと思えるテーマを持てないため。
2	・ベンチがアホやから野球ができんといって有名になった野球選手がいました。その人は舌禍で引退しました。同じ事を吠えていた大学院生もいましたが彼はいまでは大教授です。
3	・誉めない先生が多すぎて、順調だと思っている学生の意識との解離は、いつの時代もありますよね
4	・隣の芝生は青く見えていても、隣に入ったらそうでもないってことありますよね。
5	・お金がないので研究できないということもありました
6	・テーマを変えるべき根拠が説明できなければ変えるべきではないでしょう。
7	・どんなテーマでもやるとある程度は面白いものです。
8	・それまでの職場で任期を延長できず，やむを得ず全く異なる研究テーマで研究を開始せざるを得ない場合，これまでの研究内容の有無に関わらずテーマは変わってしまうというどうしようもない問題は発生するかと存じます．特に実験生物や分野が変わってしまう場合は顕著かと思われます．これは特殊な例とは存じますが.
9	・最前線にいると退却の判断と決断をする事は難しい事が多いと思います。後に控えているPIが全体の戦況を見極めて陣形を整える判断が大事になると思います。
10	・ボスと議論してサイエンティフィックな意味で説得したうえでテーマを変えるのは問題ないと思います。戦うんです。是非学生にはそうして欲しいですね。
11	・しかしいつの時代でもブレークスルーを生むのは最前線で戦う人です
12	・仲間割れは避けたいですが。
13	・テーマを面白くするのは､やってる本人の力が大きいと思います､もちろんPIはその手助けはするけれど､面白さの「尻尾」をつかむのは、やっている本人の努力と力かな、と…
14	・どのテーマでも、ある程度の結果 (positive であれ negative であれ) が出てから変えないと、新しいテーマも面白くならないかも。ただつまらないから変えるというのは、あまりよろしくないと思う。
15	・競争の激しい分野の研究は常に軌道修正する必要があるのではないでしょうか。独創的な研究であっても関連研究の新しい成果、概念等を常に意識していく姿勢は大事だと思います。

No	コ　メ　ン　ト
16	・どういう状況なら撤退するのか、撤退すべきなのか、を事前に学生に説明していないボスが多いように感じる。学生からすると最初のテーマは唯一無二のテーマであって、ボスも面白いと思っているからやらせているはず、と信じているので撤退・転進は失敗なのだと受け取られやすい。コミュニケーションが大事。
17	・ボスと実験者がコミュニケーションが取れているうちはアレンジ、そうでなくなれば暴走なのかな、と思っています。
18	・研究者は結果を公開する義務があると思います。特許が関わる場合などもあるでしょうが、基本的には得られた成果をオープンにすべきです。それが科学の発展に貢献するはずです。失敗もまた進歩するために良い情報となります。隠れテーマは私はあり得ないと思っています。
19	・留学先のラボで入れかわりに出て行った初代のポスドクが隠れテーマを 7 割方すすめていて独立後まもなく発表。テニュア審査には元ボスの名前が入らない論文が必要なのでそうしたらしいがアメリカ人すごい（怖っ）と思いました。
20	・ラボの内容とあまりに異なる隠れテーマは研究費の目的外使用になるとまずい。運営交付金が減っている中で、自由度のある研究費を持っていないと研究倫理の問題になるのでは？それなりの説明は必須。
21	・胡桃さんのいう通りで、独立後どう発展させるかです。元ボスと同じことをやってもダメですね。
22	・日頃議論を繰り返して研究を進めている中で、隠れテーマを実施する時間的余裕があるんですか？？本人の経験値や実験系のスケールによっては、ありえないと思います。「隠れテーマ」を不用意に煽るように受け取られないようにした方がよいのでは。
23	・隠れテーマというより、新しいテーマの予備実験という位置づけも多いのでは？上手くいかなければそのままお蔵入りにして、うまくいきそうなプロジェクトのときは、隠れてプロジェクトを進めるより、ボスや同僚と議論しながら進める方が建設的。
24	・基礎生物学研究所の江口研の助手から姫工大に独立するときに､江口研でやっていたレンズ再生はもっていってはダメ､江口研で隠れテーマ的に始めたニワトリへの遺伝子導入も研究費をとれるようになったところで、持っていくことはならんとなり、うっ、となり、結局プラナリアの再生を一から始めたが、結果的には自分の看板ができたので江口さんに感謝ですね。ただ、一から始めると 6 年間地下活動となり、今時の運営交付金ではちょっと難しいでしょうね。
25	・今日はいろいろ学ぶことが多く、ためになりました。楽しかったです。また次回も参加させてください。
26	・新しい研究の種を見つけたなら、隠れない方がいろんなアドバイスやサポートを受けられると思います。「隠れ」るのはコミュニケーションがうまくいかない場合の最終手段でしょうか。
27	・アメリカでは独立した時にポスドク先のテーマを持っていくことがボスから禁止されるケースが多々あります。ですので隠れテーマ・半隠れテーマは重要です。

【セッション中の投票アンケート結果】

〈アンケート〉 集計結果（四捨五入しています）

練習設問：皆さんの属性について教えてください。

1.	学部学生 ……	14	4.8%
2.	大学院生（修士）……	43	14.8%
3.	大学院生（博士）……	44	15.2%
4.	ポスドク、助教、講師、准教授、研究員等の非 PI 職……	94	32.4%
5.	独立助教・講師・准教授、主任研究員等の junior PI 職（非テニュア・テニュアトラック）……	31	10.7%
6.	教授等の PI 職（テニュア）……	54	18.6%
7.	企業 ……	10	3.4%
	計	290	100.0%

設問 1：ずばり、あなたの研究テーマの進捗は順調ですか？

1.	順調なので、このまま続けたい。 ……	116	43.0%
2.	順調ではないが、このまま続けたい。 ……	77	28.5%
3.	順調ではないので、少し方向性を修正したい。 ……	46	17.0%
4.	順調ではないので、テーマを変えたい。 ……	7	2.6%

5. 順調だが、テーマを変えたい。
（できれば理由を Q&A で教えてください）……13　4.8%
6. その他 ……11　4.1%
計　270　100.0%

設問 2：研究テーマの修正をしたいなぁ、と思う瞬間は？（複数回答可 / 回答者数 267 名における回答数と割合）

1. 在学（在任）期間に終わらなさそう。 ……56　21.0%
2. 当初の予想と結果が違っている。 ……79　29.6%
3. やっているテーマが面白くない。 ……93　34.8%
4. テクニカルに難しすぎる。 ……86　32.2%
5. その他 ……26　9.7%

設問 3：研究テーマの変更に抵抗があるとすれば？（複数回答可 / 回答者数 267 名における回答数と割合）

1. ボスに怒られそう。 ……34　12.7%
2. まだ自分でできることがありそう。 …… 118　44.2%
3. これまでの成果を無駄にするのがいやだ。 …… 149　55.8%
4. 修正や変更に関する自分のアイデアがない。 ……87　32.6%
5. 変えても大差なさそう。 ……19　7.1%
6. その他 ……16　6.0%

設問 4：研究テーマの修正・変更が必要だと思う瞬間は？（複数回答可 / 回答者数 281 名における回答数と割合）

1. 学生・ポスドクの任期期間内に終わらなさそう。 ……91　32.4%
2. 学生・ポスドクの興味がなさそう。 ……73　26.0%
3. 当初の予想がはずれていそう。 ……85　30.2%
4. 得られる成果が小さそう。 …… 131　46.6%
5. 同じような研究が報告されそう。 …… 115　40.9%
6. その他 ……14　5.0%

設問 5：研究テーマにアレンジを加えてよかったことは？

1. 実験の細かい条件程度などが決まった。 ……45　16.9%
2. より多くのデータをあつめることができた。 ……54　20.3%
3. 予想より面白い結果が出た。 ……80　30.1%
4. 研究が思わぬ方向に発展した。 ……74　27.8%
5. ない。 …… 8　3.0%
6. その他 …… 5　1.9%
計　266　100.0%

設問 6：隠れテーマがキャリアの中でどのように役に立ちましたか？

1. 独立前に Disclosure して研究を発展させることができた。 …34　29.3%
2. 独立前に Disclosure したが研究を発展させることができなかった。
…… 8　6.9%
3. 独立した後に Disclosure して隠れテーマを発展させることができた。
……10　8.6%
4. 独立した後に隠れテーマを発展させることはなかった（できなかった）。
……10　8.6%
5. そもそも隠れテーマを持っていなかった。 ……44　37.9%
6. その他 ……10　8.6%
計　116　100.0%

設問７：テーマの切り分けはどのように行なっていくつもりですか？

1. 独立したら、すぐに新しい研究テーマをしたい（した）。	49	23.3%
2. 独立後は、1-4 年かけて徐々に新しいテーマに移行したい（した）。	125	59.5%
3. 独立後は、5 年以上かけて徐々に新しいテーマに移行したい（した）。	13	6.2%
4. 独立後も、ずっと出身ラボと共同研究したい（した）。	17	8.1%
5. 独立後も同じテーマで出身ラボと競合したい（した）。	1	0.5%
6. その他	5	2.4%
計	210	100.0%

【セッション終了後のアンケート結果】

〈アンケート〉 集計結果（四捨五入しています）

【問１】あなたの年齢は？

① 24 歳以下	31	19.5%
② 25～29 歳	29	18.2%
③ 30～34 歳	17	10.7%
④ 35～39 歳	17	10.7%
⑤ 40～49 歳	37	23.3%
⑥ 50～59 歳	23	14.5%
⑦ 60 歳以上	5	3.1%
計	159	100.0%

【問２】あなたの身分・職階は？

① 学部学生	12	7.5%
② 大学院生（修士）	19	11.9%
③ 大学院生（博士）	29	18.2%
④ ポスドク	14	8.8%
⑤ 大学教員（助教・講師・准教授）	38	23.9%
⑥ 大学教員（教授）	19	11.9%
⑦ 研究員	9	5.7%
⑧ 主任研究員・チームリーダー・室長以上	8	5.0%
⑨ 企業	6	3.8%
⑩ その他（技術員・テクニカルスタッフ）	4	2.5%
⑩ その他（フリーランス）	1	0.6%
計	159	100.0%

【問３】このセッションはいかがでしたか？

① とても面白かった	74	46.5%
② まあまあ面白かった	63	39.6%
③ 普通	20	12.6%
④ あまり面白くなかった	2	1.3%
⑤ つまらなかった	0	0.0%
計	159	100.0%

【問４】その他、来年以降のセッションで取り上げて欲しいテーマ、本年会での属性調査など、ご意見があればご入力ください（自由記述〔全角 500 字以内〕）。

・新しいテーマの見つけ方

・テーマ決定の瞬間なんかも聞ければと思いました
・留学時にテーマを変えたか
・研究室の選び方
・学生に対する研究以外（大学院生の一般教養と語学等）の指導について
・研究者が PI 以外の安定な専門職に就けるような社会的システムの構築について
・ポスドク問題・PI を目指す以外のキャリアパス
・PI になるために
・社会人ドクターの支援
・企業で活躍する分子生物学者
・コロナ下での就職活動について
・女性研究者の婚活のタイミング
・研究に対するモチベーション維持方法。
・日本の研究の行方
・研究費の獲得について。キャリアパス（特に学位取得後）について。
・コラボレーションの広げ方。現在所属している研究室は共同研究が盛んで、所属しているだけでコラボレーションの恩恵を受けられる。研究が行き詰っても、思わぬ分野から助けてもらえることもある。一方、以前の研究室ではコラボレーションが皆無で、研究のテクニカルな壁にぶつかったときに、ラボ内で解決できない場合、他の研究者の助言などを得ることがとても難しかった。どのようにしたら、コラボレーションやラボ外とのコミュニケーションの盛んなラボを維持できるのか PI の方々に教えて頂きたい。
・今回は主に学生さんの立場からのお話しでしたが、PI の立場の先生方から同様のお題で悩み、その解決法等のセッションがあると大変興味深いと思いました
・PI とコミュニケーションを撮ることが大事だということはわかったが、学生の立場からすると、日常からどのような関係性を築いておき、その上でどのような機会にどのようなコミュニケーションをとったら良いのかという具体的な方法論を実際にあった事例も交えつつ紹介してほしい。
・研究生活を送るうえで研究者のこころの健康をケアしてくれるような温かなセッションが見たいです。今回のセッションもそのような感じでとてもよかったです。
・いつも思いますが、分生のキャリアパスの話の前提として教授が PI で、メジャーな大学に所属する教員・学生・院生・ポストドクのお話ですね。地方大学で助教から教授まで一人 PI で、学生が 4 年生が数名、修士が 1~2 名。学生はほとんど実験せず、時間があれば教員が予算申請から論文作成はいうにおよばず、洗い物からベンチワークまでこなす環境になれると、ここでの話題は別世界の話に聞こえます。ただ、こちらの方が費用対効果は良いようです。今度から一人くらいは地方国立大学の教員を入れて見てはどうでしょうか？
・学会会場であると、若い方が意見をどんどん出してい頂けていたので、匿名性が高いとコメントを入れやすいのかもしれません。
・修士 1 年の学生です。初めてこのようなセミナーに参加しましたが、とても面白かったです。PI の先生方は頭脳明晰な完璧超人と、とても怖いイメージがあったので、笑っているところを見るだけで「同じ人間なのだなあ」と僭越ながら親近感を覚えました。セミナー中におっしゃっていたとおり、匿名でコメントできると良いなと思いました。自分の研究室のボスやポスドクの目が怖かったので、コメントできませんでした。また、Q&A で発言する方が PI やポスドクの先生方が多かったので、怖気づいてしまいコメントできませんでした。今回パネリストをされた先生方のファンになったので、また機会があれば第 2 回も開催していただきたいです。
・セミナーお疲れさまでした。このセミナーだけでなく、他のシンポや WS もそうですが、参加者人数がリアルタイムに表示されるとおもしろいですね。
・来年もこうしたテーマのがあればうれしいです。とても面白かったです！

【海外へＧＯ！？】

●共　催：国立研究開発法人日本医療研究開発機構
●日　時：2020 年 12 月 3 日㈭ 11：45〜13：00
●会　場：オンライン開催（MBSJ2020 Online）
　　チャネル：Ch 01
●参加者：466 名（のべ人数）
●講　演：塩﨑一裕（奈良先端科学技術大学院大学）
　　塩見美喜子（東京大学大学院理学系研究科 / EMBO member）
　　Iris Wieczorek（株式会社 IRIS 科学・技術経営研究所 / EMBO consultant in Japan）

昨今、日本の国際競争力低下の一因として、海外へ行く研究者の減少があげられています。そこで今回のキャリアパス委員会主催ランチタイムセミナー・キャリアパス企画では、研究者の海外留学について取り上げることにしました。新型コロナウイルス（COVID-19）の影響により Zoom Webinar での開催となりましたが、大変盛況に終わり、延べ 466 名の方にご参加・ご閲覧いただきました。

本セミナーは、国立研究開発法人・日本医療研究開発機構（AMED）との共催での開催となりました。塩﨑一裕先生からは Human Frontier Science Program のフェローシップ獲得の体験談、塩見美喜子先生と Iris Wieczorek 先生からは EMBO の取組みなどをご講演いただきました。またキャリアパス委員のパネルディスカッションでは、Zoom Webinar の機能を用いて参加者と双方向のコミュニケーションを取りながら現状の課題や解決方法について議論を行いました。

研究留学に関して参加者のアンケートを実施しましたが、研究者にとって留学は、キャリアパスの構築をはじめとして、海外生活の経験や研究業績など多くのメリットがあると捉えられていることがわかりました。一方で、留学に興味があるものの迷っている人が多いこともわかりました。留学の阻害要因として最も多くあげられたのは「お金」でした。本アンケートは分子生物学会の年会参加者が対象のため、研究意欲のある学生・研究者が母集団になります。経済的サポートにより、こうした若者の海外留学促進に一定の効果が期待されましたが、それだけでは不十分であることもわかりました。例えば、海外留学助成金である日本学術振興会海外特別研究員の「生物学 / 生物系科学」の採択率は 10 年ほど前と比べると 10% 近く上昇しており、現在約 4 人に 1 人が採択されている計算になります。しかし内訳を詳しくみると、採択率の上昇は申請者数の減少によるものであることがわかります。海外留学の阻害要因として「お金」の次に多かったのは、「家族のこと（子育てや介護など）」と「語学力」でしたが、これと同じく多くの票を集めたのは「帰国後の就職」でした。最近では大学教員や企業の採用でも海外留学経験者が優遇されることも増えてきてはいるようですが、まだ十分ではなく、金銭面や生活面で苦労をして海外留学をしても帰国後の就職に不安があるため留学を躊躇してしまう様子が伺えました。

今回、限られた時間の中ではありましたが、留学助成金の獲得にはじまり留学先の選定や就職に関する情報をカバーしつつ、学生や研究者の方々が考える課題を共有し解決策について議論しました。一昔前と比べて留学に関する情報は増えていますが、同じ分野で活躍している方々の生の声を聞くことは、現在留学を検討している方々にとって貴重な機会になったことと思います。また、研究留学者の減少の理由として日本の若者は「内向き志向」という表現がよく使われていますが、少なくとも本セミナーの参加者アンケートの結果からは、留学に多くのメリットを感じているものの、行動に移すのに十分なインセンティブを感じていないことが課題であると思われました。国際競争力の向上のための政策として若手研究者の海外留学の促進があげられていますが、これを達成するためには、経済的サポートという入口だけではなく、その後のキャリアパスまでを見据えた出口戦略のサポートも示すことが重要と考えます。

（文責：座長・來生（道下）江利子）

【セッション中の参加者コメント】

No	コ　メ　ン　ト
1	・留学で一番困ったことは、何でしょうか？
2	・貴重なお話ありがとうございます。勝ち残れる人とキックアウトされてしまう人の違いは何でしょうか？ （→塩﨑先生より）ポスドクに行った先のボスに認められる存在になることが大事だと思いました。Hard work はもちろん、協調性のある lab citizen として、他の lab member のお手伝いも厭わない。ポスドク先のボスから重用され、愛される存在になれるようなら、次の道も自然と拓けるのだと思います。 （→塩﨑先生へ）結局、その辺りは日本も外国も変わりありませんね。私も同感です。

No	コ　メ　ン　ト
3	・さきほど塩崎先生が日本語が大事とのことをおっしゃられて興味深かったのですが、留学時は日本語は不要のように思いますが、どのような意図だったのでしょうか。また日本語は話さない方がよい、日本人がいないラボに行くことが必要でしょうか。 →（塩崎先生より）私が早口でわかりにくかったですよね。外国語、例えば英語を習得しようとしたとき、自分の母国語である日本語以上には上達しません、ということを言いたかったのです。
4	・事前にボスとの相性を確認しておくべきでしょうか。その場合どのようにマッチングを行いましたか？
5	・（セッション中のアンケート設問１で「その他」を選んだ方より）留学して、そのまま残ってます。
6	・興味のない方はそもそも参加してないと思います
7	・大学院生の頃は、海外に行くと自然に論文が出ると思ったが、そうではなかった。そのような現実を知ることができる。
8	・学部卒業後からの留学を検討された方はいらっしゃいますか？その場合の研究室選びや分野選びについて伺いたいです。 →（質問者の方より）斉藤先生、胡桃坂先生、ありがとうございます！
9	・研究に対する多様なアプローチの仕方、考え方があることを知ることができる。また、私にとっては、人間の多様性を知ることができたことがもっとも重要であった。
10	・Ph.D 取得を目指して、5 年前にアメリカ・EU 大学院を受験しました。インタビューで落選し、結局企業の研究開発の就職を選びました。現在仕事と家族を抱えながら、もう一度海外へ挑戦するには、国内 Ph.D 取得→ポスドク留学がベストでしょうか？アドバイス宜しくお願いします。 （→塩崎先生より）博士号は、どの国でとっても通用する研究者の運転免許証みたいなものです。国内で博士号を取る方が手近でやりやすいとお感じのようでしたら、それで全く問題ないと思います。
11	・日本にいる時に比べて、研究でも研究以外でも自分の考えを持つことの重要性を学び、自分の「個の自立」が促進されたと思う。なぜか、日本にいるとなかなか精神面の自立が促されない気がします。
12	・語学向上や情報収集は個人の努力次第のところもありますが、お金を持つのは限界があると思います。サポートがもっとあれば良いと思いますが、ただ、塩見様のアプライが少ないとのお話もあるのでしたら、お金もある程度努力次第なのでしょうか。。
13	・コメントです。長い人生で異文化の中で数年間生活することは人生を豊かにすると思います。研究者は海外での生活できる（できれば家族と一緒に）職種ですので、可能であれば、海外で研究されることを勧めます。海外に行って無事に帰国できれば（帰国しなくても構いません）、50 点です。あと研究で少し学ぶことができれば 10 点プラスで、合計 60 点で合格です。
14	・企業に行きたがる博士院生がかなり多くなっていますが、企業の考え方はどうでしょうか。若い PhD 学生か 30 代の留学経験者か？
15	・海外に GO したかったのにボスに許可してもらえずドメスティカになってしまった理事長の阿形です。自然科学研究機構の教員研究評議会があり参加が遅れました。昨年の本学会の総会で近藤寿人会員から、若手の留学をプロモーションするために、教員の公募文に男女共同参画と同様に海外留学した方をダイバシティの観点から優先します、みたいな文を載せることを提案されました。
16	・留学先で出会った一番個性的な人の一人が胡桃坂さんでした。
17	・アメリカの地方はいいよ。ポスドクの初任給は年間 52000 ドルです。
18	・僕らサッカー野郎には、海外に行くことがキャリアアップなので、最近は久保くんみたいに子供の時から留学して語学もペロペロになるのがトレンデイですね。高校生でもサッカー部員がスペイン語やドイツ語してリーガエスパニョーラやブルデスリーグを目指しているのに、日本の研究野郎でそういう話は聞かないね、、

【セッション中の投票アンケート結果】

〈アンケート〉　集計結果（四捨五入しています）

練習設問：皆さんの属性について教えてください。

1. 学部学生 ……16　6.8%
2. 大学院生（修士）……25　10.5%
3. 大学院生（博士）……49　20.7%
4. ポスドク、助教、講師、准教授、研究員等の非 PI 職……72　30.4%

5. 独立助教・講師・准教授、主任研究員等の junior PI 職
（非テニュア・テニュアトラック）……25　10.5%
6. 教授等の PI 職（テニュア）……38　16.0%
7. 企業 ……12　5.1%
計　237　100.0%

設問１：ずばり、海外留学は？

1. する予定、したことがある …… 111　49.8%
2. 興味はあるが迷っている、わからない ……72　32.3%
3. 興味はあるがしない予定、しなかった ……37　16.6%
4. 興味がない、しなかった …… 2　0.9%
5. その他 …… 1　0.4%
計　223　100.0%

設問２：研究者にとって海外留学のメリットは？

1. 研究業績の蓄積 ……29　14.4%
2. キャリアパスの構築 ……74　36.6%
3. 語学力の向上 ……21　10.4%
4. 海外生活での経験 ……60　29.7%
5. その他のメリット ……15　7.4%
6. メリットよりもデメリットの方が大きい …… 3　1.5%
計　202　100.0%

設問３：海外留学のハードルは？（複数回答可 / 回答者数 213 名における回答数と割合）

1. お金 …… 105　49.3%
2. 語学力 ……86　40.4%
3. 情報不足 ……50　23.5%
4. 帰国後の就職 ……86　40.4%
5. 渡航先への不安（治安や食事など）……61　28.6%
6. 家族のこと（子育てや介護など）……90　42.3%
7. その他 …… 8　3.8%

【セッション終了後のアンケート結果】

〈アンケート〉　集計結果（四捨五入しています）

【問１】あなたの年齢は？

① 24 歳以下 ……18　19.6%
② 25〜29 歳 ……22　23.9%
③ 30〜34 歳 ……14　15.2%
④ 35〜39 歳 …… 4　4.3%
⑤ 40〜49 歳 ……17　18.5%
⑥ 50〜59 歳 ……15　16.3%
⑦ 60 歳以上 …… 2　2.2%
計　92　100.0%

【問２】あなたの身分・職階は？

① 学部学生 …… 6　6.5%
② 大学院生（修士）……15　16.3%
③ 大学院生（博士）……18　19.6%

④ ポスドク	10	10.9%
⑤ 大学教員（助教・講師・准教授）	16	17.4%
⑥ 大学教員（教授）	14	15.2%
⑦ 研究員	5	5.4%
⑧ 主任研究員・チームリーダー・室長以上	3	3.3%
⑨ 企業	2	2.2%
⑩ その他（技術員・テクニカルスタッフ）	2	2.2%
⑩ その他（内科医院の院長）	1	1.1%
計	92	100.0%

【問３】このセッションはいかがでしたか？

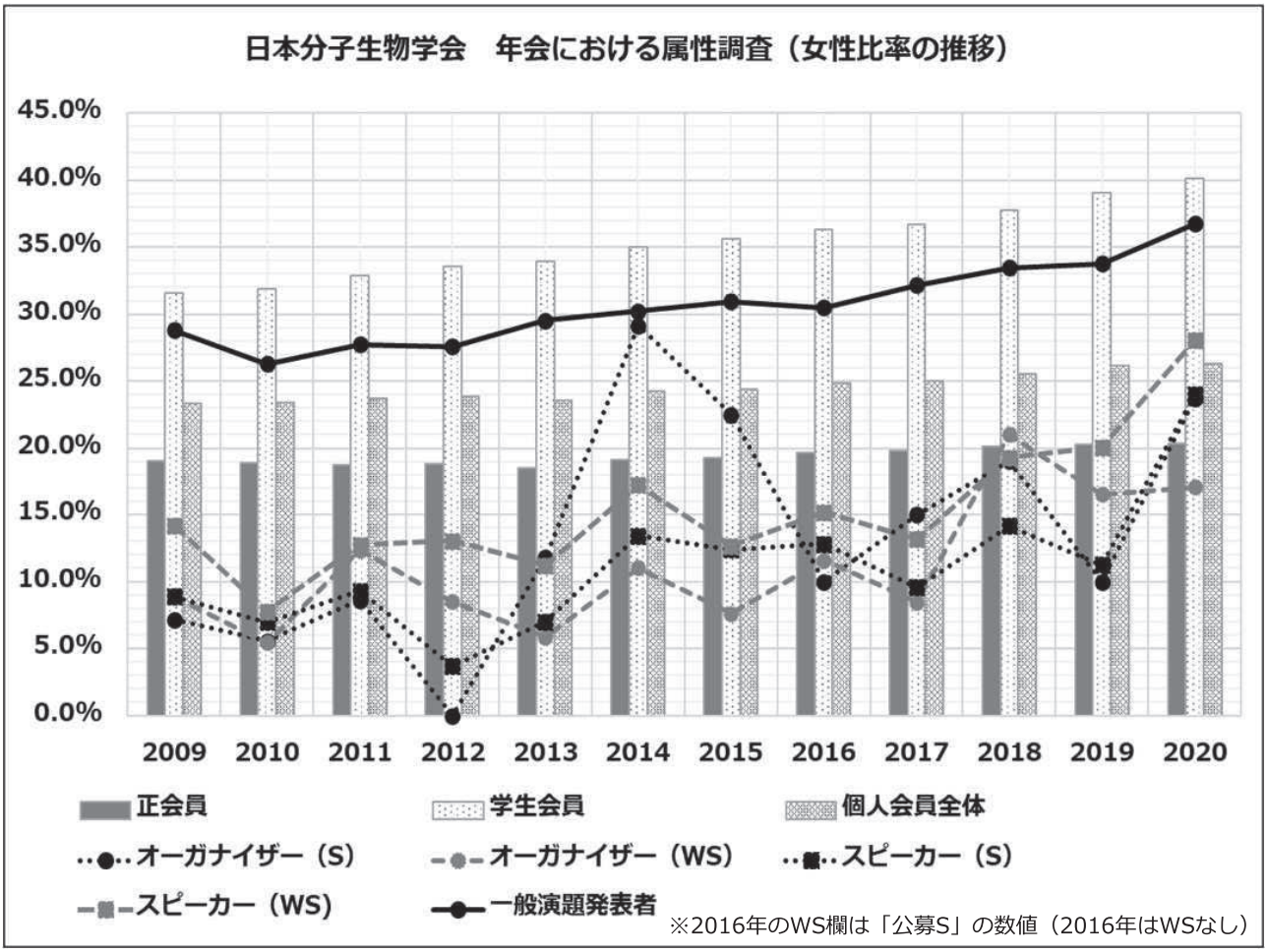
① とても面白かった	52	56.5%
② まあまあ面白かった	34	37.0%
③ 普通	4	4.3%
④ あまり面白くなかった	1	1.1%
⑤ つまらなかった	1	1.1%
計	92	100.0%

【問４】その他、来年以降のセッションで取り上げて欲しいテーマ、本年会での属性調査など、ご意見があればご入力ください（自由記述〔全角 500 字以内〕）。

・海外の研究者、企業との共同研究について
・頼もしい共同研究者を探す方法
・所属変更をする際に研究内容を大きく変えるメリットとデメリット
・外国人留学生のキャリアパス
・留学経験もあるが正規教員職に就けない 40 代ポスドクのキャリアパス
・企業の博士採用について（目的、評価点、割合など）
・取り上げて欲しいテーマ「女性研究者のキャリア形成」
・定年退官された先生方のセカンドライフ（研究・非研究も含めて）
・今でなく、10 年後に花開くテーマは何か
・社会人ドクターや、一度修士で就職してから博士課程に戻った方のリアルな研究生活についてお話を伺いたいです。
・博士号取得後数年のタイミングではライフイベントのために留学機会を逃した場合など、海外留学に向けてどういうチャンスがあるか情報があると嬉しいです。
・今回の海外留学についてのセッションはすごく参考になったので、もっと長い時間で設けてほしいと思いました。バックグラウンドが様々な先生方のお話をより深く聞いてみたいと思いました。特に、研究室をどういった方法で調べ、資金繰りをし、飛び立っていったのか、そういった具体的な留学までのお話を色濃く聞けたらより勉強になったかなと思いました。また、今回参加された先生方は留学後帰国した方がほとんどのようでした。若手の留学中の方のお話なども聞く機会がうかがえたら最新の情報が知れてよかったなと思います。
・日本の先生方が海外経験のある人に対する雇用に問題があるということや、海外留学に対するコストとその支援に問題があるという認識があってとても安心しました。私の学校では古典的な考えを持つ先生も多く、日本の先生は本日取り上げたようなトピックに対して興味がないのかと思っていました。留学に限らず、博士課程進学も日本はハードルが高いと思います（学費がかかるなど）。まとまりなくなってしまいましたが、本日のセミナー非常に参考になりました。ありがとうございました。
・パネリストに現在海外留学している方がいると、留学のリアルがより詳しくわかると思う。
・研究留学といっても様々なタイミングがあると思うので、今度はもう少し焦点を絞った話を聞きたいです。
・セッション中にご質問するべき内容で申し訳ありません。昨年度海外学振に採択されフランスの国立研究機関に行く予定が、フランス側から新しい法律が施行されて海外学振のような個人の口座に入るフェローシップは使用できないと断られてしまいました。方々に問い合わせたのですがどうにもならず泣く泣く学振を辞退しました。このような事例をご存知でしょうか？

・政策に対する提言・アクションなど、暴政に流されるままで良いのか。激しく政治的なアクションではなく、分子生物学会として、あるいは科学者の一人として傍観できないレベルのことが現実になりつつある。
・海外留学には非常に興味があり、せっかくの機会でご質問をいくつかしたいなとおもっていたのですが、留学反対派の自分の PI もこのセミナーに参加しているのかと思うと中々コメントがしづらかったので、次回は匿名でのコメント機能で設定して頂けると幸いです。本日はありがとうございました。

バランスの取れた研究環境を築くために
ー属性調査の10年ー



※2016年のWS欄は「公募S」の数値（2016年はWSなし）

属性調査とは？

研究発表の場においては、性差にかかわらず研究者としてのビジビリティ（可視性）を高めることでその後の研究機会・キャリア獲得などに結び付けることが期待される。シンポジウム・ワークショップのオーガナイザーやスピーカーの多くは正会員であることから、その男女比率が学会会員における男女比率との近似値になることが望ましい。**「シンポジウム・ワークショップなどのオーガナイザー・口頭発表者における女性比率は、学会員全体における女性比率と比べて低いのではないだろうか」**という疑問をもとに、年会発表者が属する性（属性）について、2009年度から継続調査を行っている。

発表者が決まるプロセスの違い

●シンポジウム（S）

オーガナイザー：年会側が検討・依頼（他薦）

スピーカー：オーガナイザーが検討・依頼（他薦）

●ワークショップ（WS）

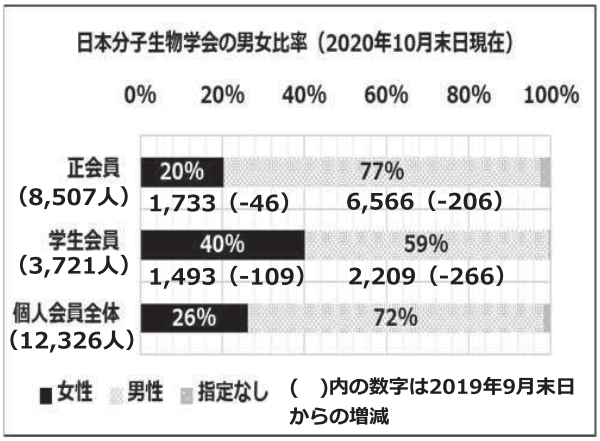
オーガナイザー：応募者（自薦）の中から選抜される

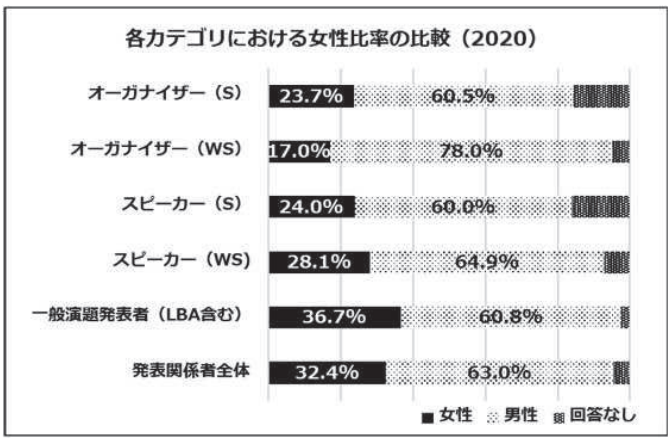
スピーカー：オーガナイザーが検討・依頼（他薦）

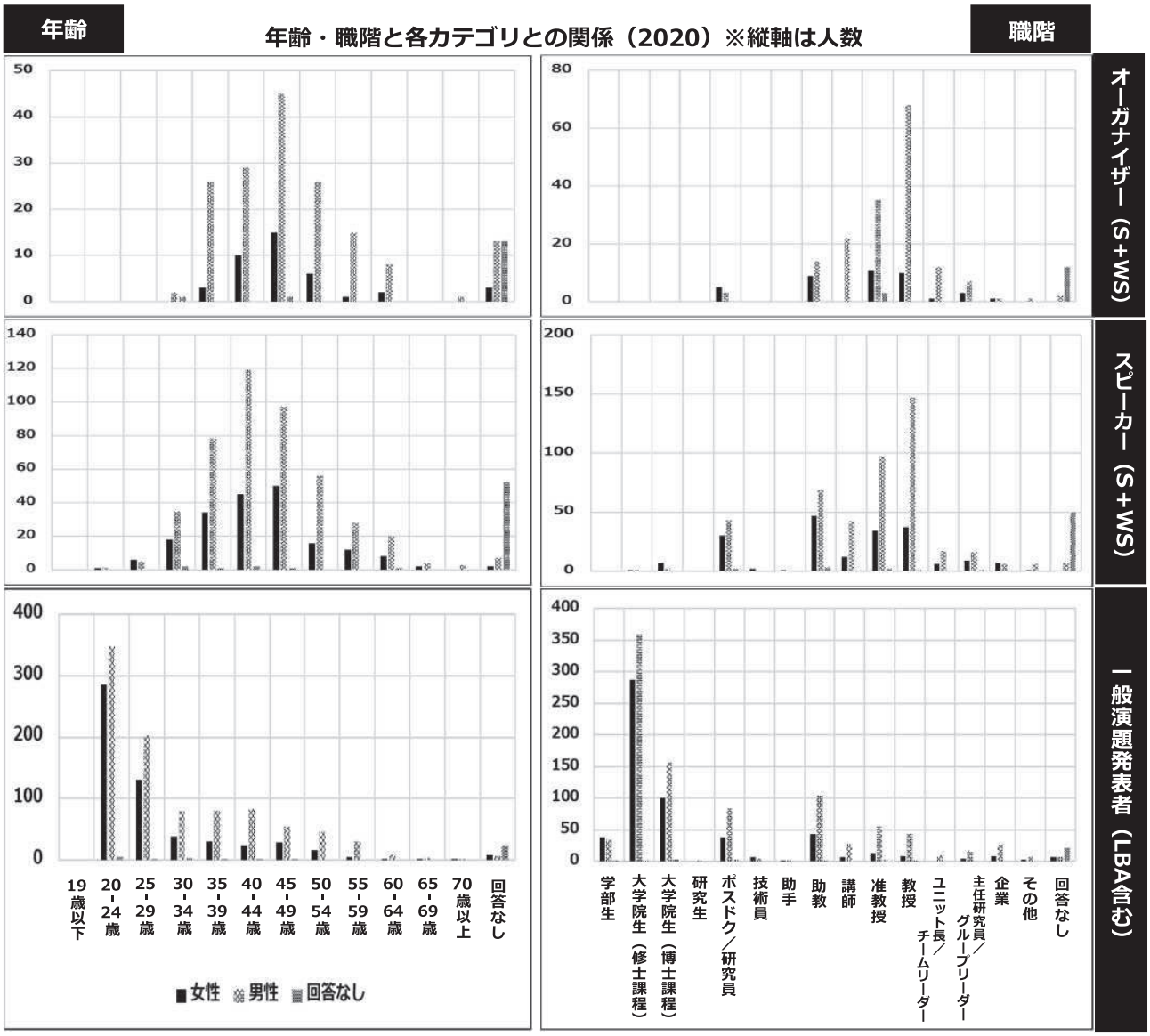
●一般演題発表者

自発的な申し込み（自薦）

年会発表者の皆様、演題要旨投稿時の属性調査にご協力いただき、ありがとうございました。
これまでの属性調査結果まとめは学会HPでご覧いただけます。







第43回年会（MBSJ2020 Online）属性調査においては2,472名が調査対象となった（のべ人数）。年会の演題登録システム（日本語版・英語版）にアンケート設問を設置（回答は任意）。性別、年齢、所属、職階（身分）について、発表者には投稿時に協力して頂いた（2,252名。Late-Breaking Abstracts投稿分を含む）。一部のオーガナイザー等に関する調査では公開情報や本学会会員データ（学会個人情報保護方針に依拠）なども併用した。

本年会ではワークショップ企画公募の際、オーガナイザーやスピーカーに女性研究者が複数含まれている企画を特に優先して採択する旨が募集要項に明示された。ワークショップスピーカーの女性比率は調査開始以来最高となっている。またシンポジウムオーガナイザー及びスピーカーの女性比率も、正会員の比率を上回る結果となっている。他方、2020年は一般演題の全体の投稿数が例年の約半数となり、主な一般演題発表者である学生会員の数も男女共に減少している状況である。一般演題の女性比率としては微増を続ける結果となったが、COVID-19が学生・若手研究者の研究活動に及ぼす影響には今後も引き続き注視する必要がある。

第 10 回（2022 年）日本分子生物学会 国際会議支援 募集のお知らせ

日本分子生物学会では、昨年に続き、2022 年（2022 年 1 月～12 月）に開催計画のある国際会議に対しまして支援事業（開催補助金の助成）を行いますので、ここにお知らせいたします。

分子生物学の黎明期には先鋭的な少人数の若手研究者による会議から革新的な発見と数多くの新分野が誕生しました。科学研究におけるグローバル化とインターネットにおける情報共有が急速に進む現代においても、国際会議において研究者が率直に意見交換を行い相互の理解と信頼関係を深めることはますます重要になっています。質の高い国際会議を日本において開催することは日本発のオリジナルな研究を国際的にアピールし、国際的なリーダーシップを担うために重要です。また、若い時から最新の研究と真摯な議論に接することは研究者育成の要の 1 つと考えられます。本支援は、日本とアジア発の国際会議を育て、我が国の研究を世界に向けて発信する場を設けることを目的として立ち上げられました。

なお、第 10 回（2022 年）助成は新型コロナ感染症（COVID-19）の状況を考慮し、募集要件が一部変更となっていますのでご留意ください。

本国際会議支援（開催補助金の助成）を希望される方は、下記の要項に従って、奮ってご応募ください。

2021 年 2 月
特定非営利活動法人 日本分子生物学会
理事長　白髭　克彦
国際会議支援・選考委員会委員長　小林　武彦

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

■募集要件

1. テーマ：分子生物学に関連した分野において活力の高い議論が期待できるもの。新分野を探索する独自性の高い、萌芽的なテーマも考慮する。
2. 開催規模：参加人数は 50 名以上 400 名程度までとし、そのうち外国からの参加者が少なくとも 20％程度いること、さらに口頭発表者の中で外国人が 3 割以上を占めることが望ましい。
3. 開催の形式：
   1）主催者あるいは共同主催者が分子生物学会会員を 3 年以上つとめていること。教育・研究機関の主催、研究費主催のものは除きます。（組織委員（国内）については、できるだけ本学会への入会を推奨します）
   2）共催：他の団体との共催は可とするが、その場合、参加費に関して分子生物学会会員価格（特に学生会員を考慮されたい）が設定されていることが望ましい。
   3）今回よりオンライン開催形式も助成対象とします。
4. 留意事項：
   1）できる限り、国内の若手研究者の口頭発表の機会を作ることが望ましい。
   2）会議開催に際しては、分子生物学会が用意している支援システム（JTB 西日本 MICE 事業部による国際会議トータル支援システム）を利用することができる。本システムは、①基本システム代金：23 万円（事前参加登録受付・演題投稿受付・カード決済等の基本システム設定）、②オプション / メイン HP 代金：25 万円（全体デザイン・ページレイアウト・サーバ管理 12 ヶ月・更新メンテナンス 12 ヶ月）、③オプション / オンライン査読システム：8 万円、④オプションその他、などからなります。
   3）支援が決定した後は、主催者は各種の報告書・広報ポスター・国際会議 HP 等に本学会からの支援を受けて開催されることを、表示する義務を負うものとします。
   4）採択された場合には、会議終了後、開催責任者にミーティングレポートを執筆いただきます。学会誌「Genes to Cells」に掲載しますことをご了解ください。
   5）残金が出た場合、補助金の返還を求めることがあります。

■開催補助金と件数

援助する金額は、一件あたり 50 万円～100 万円。年間 2～4 件程度。開催形式（オンサイト or オンライン）、開催期間・参加予定人数によって金額の変動あり。学術振興会の国際会議等の大型支援を助成された場合は多少の減額あり。

（補助金の使用用途は限定せず自由度を持つものとします。他経費で補えないものが望ましい。ただし国際会議終了後、本学会への会計報告（収支決算書概要）提出の義務を有します。また、分子生物学会から支援を受けたことを、HP、要旨集などに明記いただきます。）

■応募方法

申請書は、分子生物学会ホームページからダウンロードして使用してください。

所定の申請書に、国際会議の目的、形態、予定講演者、おおよその予算規模と使用用途等を記載し、電子データで学会へ提出してください。

■申請書送付先

〒 102−0072 千代田区飯田橋 2−11−5
人材開発ビル 4 階
日本分子生物学会 国際会議支援・選考委員会　御中
TEL：03−3556−9600
E-mail：info@mbsj.jp

■締切期日　2021 年 3 月 31 日㈬（必着）

■スケジュール（開催補助金の交付）

○ 2021 年 3 月 31 日：応募締切
○ 2021 年 4 月〜5 月：選考
○ 2021 年 6 月：補助金の交付（予定）

■選　考

国際会議支援・選考委員会が選考に当たり、理事長承認のもとに決定します。

第 22 期 国際会議支援・選考委員会

小林武彦（委員長）、小安重夫、近藤　滋、中川真一、丹羽隆介

分子生物学会による、国際会議支援システム（参加登録〜演題受付〜カード決済／ Web 運用）利用のご案内

分子生物学会では、日本発の国際会議を学会が支援するために経済的支援を行うことに加え、国際会議を開催する研究者の事務的な負担を減らすため、支援システム（JTB 西日本 MICE 事業部による国際会議トータル支援システム /Web 運用）をご用意しております。国際会議支援の詳細は同公募要項の中に書かれているとおりですが、同支援事業の応募とは別に、システムのみを使用されたいとの希望者につきましては、分子生物学会の会員であれば同額での利用が可能です。

システムのみを使用されたい場合は、学会事務局（分子生物学会 国際会議支援システム・システム利用係り E-mail：info@mbsj.jp）まで E-mail にて、開催概要と連絡先を明記のうえ、お申込みください。（一旦、学会を経由してから、JTB の担当者をご紹介します）

《支援システムの概要》

本学会が JTB 西日本 MICE 事業部と長期契約を交わしたことにより、JTB 西日本 MICE 事業部による国際会議トータル支援システムを通常より割安価格で利用できます。

①基本システム代金：23 万円（事前参加登録受付・演題投稿受付・クレジットカード決済等の基本システム設定）
②オプション / メイン HP 代金:25 万円（全体デザイン・ページレイアウト・サーバ管理 12 ケ月・更新メンテナンス 12 ケ月）
③オプション / オンライン査読システム：8 万円
④オプションその他、が利用できます。（メニュー詳細については、一旦、学会を経由した後、JTB の担当者が説明いたします）

なお、この支援のみを受ける場合も、分子生物学会の支援（システム利用）を受けたことを当該会議の HP、要旨集などに明記いただきます。

特定非営利活動法人　日本分子生物学会　第 22 期新理事会準備会議記録

日　時：2020 年 10 月 30 日㈮ 17：00～19：00
場　所：オンライン開催（Zoom）
出席者：第 21 期
阿形清和（第 21 期理事長）、木村　宏（庶務幹事 / 第 21 期理事）
第 22 期
一條秀憲、上村　匡、粂　昭苑、倉永英里奈、見學美根子、小林武彦、小安重夫、近藤　滋、斉藤典子、斎藤通紀、佐々木裕之、佐谷秀行、塩見春彦、塩見美喜子、白髭克彦、杉本亜砂子、田中啓二、泊　幸秀、中川真一、中山潤一、仁科博史、丹羽隆介、原　英二、東山哲也、深川竜郎、水島　昇、本橋ほづみ、吉村昭彦　以上 28 名
欠席者：吉田　稔、吉森　保（委任状）　以上 2 名
事務局：福田　博、並木孝憲、金子香奈里、山口恵子（記録）

本会議成立について：
阿形清和 21 期理事長より挨拶があり、次いで木村宏 21 期庶務幹事より本会議開催の位置付け・成立につき説明が行われた。本会議は第 22 期理事会任期に入る前の準備会議ではあるが、その取り扱いは理事会に準ずることが確認された。議事進行については慣例に従い、阿形理事長と木村庶務幹事が担当することとなった。
22 期理事 28 名が出席し、委任状 1 名を受理しており、本会議は細則第 4 章第 8 条により成立する。
議事録署名人の選任について：
阿形理事長より、議事録署名人として斉藤典子 22 期理事と泊幸秀 22 期理事が指名され、承認された。

議　事：
1．第 22 期理事長（任期：2021 年 1 月より 2 年間）の選出
木村庶務幹事より、フランクな意見交換をするために本学会に関係する一言、例えば学会事業のどのような業務に関わってきたか、分子生物学会への思いなどを副えて自己紹介をしてはどうかとの提案がなされ、出席者全員より自己紹介がなされた。
次いで、阿形理事長より第 21 期理事会で課題となり取り組んでいる主な案件 3 点について報告があった。
（1）年会の開催形式について
コロナ禍の影響を受けたこともあり第 43 回年会は完全オンライン開催（MBSJ2020 Online/ 上村匡年会長）となった。来年以降の年会の開催形式については、今年の年会開催後に実施予定の年会アンケートで得られる会員の感想や意見を参考にしながら、各年会長および年会組織委員会にて検討、対応に当たっていただくことになる。パンデミックのなか、22 期理事会のご協力をお願いしたい。
（2）年会国際化 5 カ年計画
第 20 期では“step-by-step”の緩やかな国際化を目指し活動してきた。阿形理事長の発案である「年会国際化 5 カ年計画」として、初年度であった 2019 年の福岡年会では佐々木裕之年会長の尽力により「T 字型」プログラム編成を行った（会期中常に英語のセッションが走るようにし、また会期 2 日目は一日中英語セッションを集めた日とした）。2 年目の現在は、2019 福岡年会へ視察に訪れた KSMCB（The Korean Society for Molecular and Cellular Biology）からの招待を受けてオンライン学術集会に本学会執行部から阿形理事長を含む 3 名が参加し相互理解を深めたほか、MBSJ2020 Online では EMBO（The European Molecular Biology Organization）とのコラボレーション企画が実施される予定である。3 年目の 2021 横浜年会（塩見美喜子年会長）では「T 字型」プログラム編成を踏襲する予定とし、4 年目の 2022 幕張年会（深川竜郎年会長）では ASCB（The American Society for Cell Biology）との連携企画が進みつつある（5 年目はこれらの取り組みを国際化担当幹事として情報共有する林茂生年会長により 2023 神戸年会が開催される）。5 年後に、改めて学会として年会の国際化のあり方について検討を行ってほしいと考えている。
（3）学術コミュニティのあり方
このたびの日本学術会議の会員任命問題を受けて、本学会は生物科学学会連合（生科連）の声明に加盟学会として賛同した（なお声明が発表された前後、世間では「政府が理由を付さずに学術会議会員による決定に介入し、一部会員の任命を拒否した」という問題と「日本学術会議の在り方そのものに関する問題」の 2 点が混同したままに議論されていたが、生科連の声明はあくまで前者を意識したものとして受け止め賛同するに至った）。今後、研究者の意見を吸い上げるボトムアップのシステムをどのようにしていくのか、学術コミュニティのあり方についての議論を、22 期理事会に引き継ぐこととなる。

阿形理事長からの報告を受けて自由討論に入り、学会のあり方、年会のあり方等々活発な意見交換がなさ

れた。続いて、他薦により候補としてあがった方々からの意見表明がなされた。

事務局より理事長選出に関する細則（第 2 章第 3 条）の説明が行われ、Zoom の投票機能を用いて 22 期理事により投票が行われた。投票の結果、第 22 期理事長として白髭克彦氏が選出された。

2．第 22 期副理事長の件

事務局より細則第 4 条（副理事長の設置）の説明がなされた。本件については、白髭次期理事長の要望に従い、次回の定例理事会（11/30 開催予定、21 期 22 期合同理事会）で選出することとなった。

3．その他

白髭次期理事長より挨拶があり、阿形理事長による第 21 期理事会の活動方針の路線を引き継ぎつつ、情報発信に努めると同時に、政治・社会と科学のあり方について振り返って考える必要があるとの見解が述べられた。

上記、第 22 期新理事会準備会議の議決および確認事項を明確にするため、この議事録を作成し、議事録署名人はここに記名押印する。

2020 年 10 月 30 日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
第 22 期新理事会準備会議
議　　長　阿 形 清 和　㊞
議事録署名人　斉 藤 典 子　㊞
議事録署名人　泊　　幸 秀　㊞

特定非営利活動法人　日本分子生物学会　第 21 期・第 22 期 合同理事会記録

日　時：2020 年 11 月 30 日㈪ 13：30～18：00
場　所：オンライン開催（Zoom）
出席者：第 21 期
阿形清和（21 期理事長）、佐々木裕之○（21 期副理事長）、塩見美喜子○（21 期副理事長、44 回年会長）、荒木弘之、一條秀憲○、稲田利文（庶務幹事兼）、上村　匡○（43 回年会長、編集幹事兼）、大隅典子、菊池　章、木村　宏（庶務幹事兼）、倉永英里奈○、胡桃坂仁志、後藤由季子、小原雄治、佐谷秀行○、中島欽一、中山敬一、鍋島陽一、原　英二○、正井久雄、三浦正幸（会計幹事兼）、本橋ほづみ○、山本　卓、吉森　保○、小安重夫（監事 /22 期理事）、深川竜郎（45 回年会長、広報幹事兼 /22 期理事）、林　茂生（46 回年会長、国際化担当幹事兼）
（○印は 22 期継続理事）
第 22 期
白髭克彦（22 期理事長）粂　昭苑、見學美根子、小林武彦、塩見春彦、杉本亜砂子、田中啓二、泊　幸秀、中川真一、中山潤一、仁科博史、丹羽隆介、東山哲也、水島　昇、吉田　稔、吉村昭彦、以上 43 名
欠席者：第 21 期
五十嵐和彦、石川冬木、上田泰己、近藤　滋○、斎藤通紀○、西田栄介、町田泰則（監事）
（○印は 22 期継続理事）
第 22 期
斉藤典子、以上 8 名
事務局：福田　博（記録）、金子香奈里、並木孝憲、山口恵子

本理事会成立について：
木村宏庶務幹事より、理事 40 名、監事 1 名、年会長 1 名、幹事 1 名が出席し、本理事会は細則第 4 章第 8 条により成立する旨報告された。

議事録署名人の選任について：
阿形清和理事長より、議事録署名人として、塩見美喜子理事(21 期 22 期継続理事)と深川竜郎理事(22 期)が指名され、承認された。

議　事：
1．報告事項
1）21 期執行部報告（理事長、庶務幹事、広報幹事、国際化担当幹事）
①理事長報告
阿形理事長より 21 期の活動全般につき報告が行われた。

（ⅰ）国際化関連《年会の国際化について》
先ず 20 期からの将来計画申し送り（年会の開催方針、年会開催ルール細目）についての報告がなされ、それを受けての 21 期理事会による「5 カ年計画」について詳細説明が行われた。1 年目（2019 福岡年会）は T 字型プログラムの実施（会期中、常にどこかの会場で英語のシンポジウムを行い、さらに会期 2 日目は全会場で 1 日中英語セッションが行われる「英語デー」とした）、2 年目（2020 Online）の今年はワークショップ完全英語化、EMBO とのコラボレーション企画を試みた。3 年目（2021 横浜年会）も緩やかな T 字型を継承してもらい、4 年目（2022 幕張年会）は ASCB とのコラボレーション企画が進められている。2019 年から 2022 年までの各年会の経験・フィードバックの蓄積を総括してもらい、5 年目（2023 神戸年会）は林茂生国際化担当幹事に年会を運営いただきたい。2024 年第 47 回年会においても、国際化の流れを考慮しての年会運営となることを期待している。
21 期のまとめとなるが、第 21 期理事会が推進する「年会国際化」には「年会の国際化」と「分子生物学会のグローバル化」という 2 つの意味合いがあり、「分子生物学会年会の国際化」という大目標に向けて、「まず世界に日本の研究や研究環境の良さについて知ってもらう」という目的で「分子生物学会のグローバル化」を課題とするという見方もできる。2 年目の現在は、海外のコミュニティとの相互理解と連携を一歩一歩進めていく段階にあるという位置付けと認識している。

（ⅱ）国際化関連《海外との連携状況》
《EMBO 関連》
・2020 年 2 月、Expert Meeting（駐日 EU 代表部ならびに EMBO と共同で開催）を行った。EMBO、日本の政府機関（Funding Agency）である文科省、JST、AMED、JSPS とのコネクションが拓かれる契機の 1 つとなった。
・2020 年 4 月、日本が新たに申請可能となった、Short-Term Fellowships と Core Facility Fellowships について広報協力を行った。
・2020 年会においては以下を開催する。次年度以降も協力関係を進めてほしい。
MBSJ2020 Online/ サテライトシンポジウム

（日本分子生物学会共催）
International Symposium for Female Researchers in Chromatin Biology (ISFRCB) 2020
2020年12月5日㈯14：30〜21：00（オンライン）
第一部：キャリアセミナー1「女性研究者が人事で生き残るにはどうしたらいい？」
第二部：「エピジェネティクス分野の若手女性研究者による scientific talk」
第三部：キャリアセミナー2「女性研究者の育成・登用に関する意見交換」
関連して以下フォーラムを開催
12月3日㈭PM　フォーラム 2F−06
Hands-on training by EMBO:“Manuscript Writing & Publishing Course”

《KSMCB関連》
・2019年夏にKSMCB（韓国分子細胞生物学会）よりコンタクトがあり、福岡年会会期中の2019年12月5日にKSMCB代表が年会会場を視察、理事会執行部と会合を持った。
・2020年3月、KSMCBからのMOU締結の申し入れがあり、林茂生国際化担当幹事がJa-Hyun Baik国際担当委員長へ回答した。当初、MOUについてはJeju大会への訪問後に検討することとしていたが、COVID-19の状況もあり取扱い保留となっている。10月5日−7日のKSMCB2020大会は韓国・済州島（Jeju）開催予定であったがオンライン開催に変更され、阿形理事長、稲田利文庶務幹事、林国際化担当幹事の3氏が招待参加となった。対し、MBSJ2020 OnlineにKSMCBメンバーを招待していることが報告された。

《ASCB関連》
2020年3月、深川竜郎2022年会長がIain Cheeseman氏より、当初はASCB（The American Society for Cell Biology）のCell Bio 2021（2021/12/11-15 @ San Diego）前日のDoor Step Meeting共同企画提案を受けていたが、その後、前年のDoor Step Meetingの開催延期の影響で、別の形での連携を検討することとなった。本件については、第21期第3回（臨時）理事会（2020年8月7日）にて、本企画に関して学会としてはASCBとのコラボレーションに向けて上限300万円程度までの経済的サポートすることを承認している（学会の会計年度としては2023年度会計にて対応予定）。

（iii）年会のあり方− COVID-19対応
新型コロナウイルス感染症（COVID-19）への学会対応として、執行部においても検討を重ねた。今年の年会は、上村匡年会長、43回年会組織委員による多大な尽力のおかげでMBSJ2020 Online開催に至った。会員を代表して御礼を申し上げたい。
来年以降の年会であるが、執行部会議では、以下のような意見が出ていることが阿形理事長より説明された。
・分子生物学会の場合、ハイブリッドというより「基本オンサイト（＋オンラインでも参加可）」といった、オンサイトに比重を置く配分を目指し、未発表データを含めて議論することを大切にするカルチャーを浸透していくことが重要ではないか。
・MBSJ2020 Onlineの終了後にアンケートを実施し、年会の開催形式（オンサイト／オンライン／ハイブリッド、オンサイトとオンラインを併用する場合の両者の配分など）やオンデマンド配信の是非（未発表データを出して議論できると思える環境）などについて会員の意向を調査する予定である（集計結果が出るのはスケジュール的に来年となるため、22期に引き継ぎたい）。
続いて、林国際化担当幹事より、開催形式（オンサイト／オンライン／ハイブリッド）をどうするかが、これからの重要な課題になることが説明された。リスク管理の一環として「いかに感染防止対策をしっかり行うか・行ったか」を示せることも重要なポイントとなるであろう。

（iv）日本学術会議の会員任命問題に関係して
本年10月、標記の生物科学学会連合関係の声明に賛同したことに対し、すべての会員が賛同したようにとらえられることへの異議が複数寄せられたことが、阿形理事長より報告された。経緯について以下、説明がなされた。
・10/4㈰に生物科学学会連合（生科連）の小林武彦代表から分子生物学会に対して、今回の学術会議の任命拒否問題に関する声明について、生科連の参画学会の一つとして声明を発出することの賛否を10/5㈪の昼までに欲しいとのメールを受理した。週末に受信したメールであり、事務局を通して理事会へ諮る余裕はないと判断し、理事長名で直接、生科

連からのメールを添付して理事会に賛否を諮った。

・月曜朝までにほとんどの理事から返信があり、賛成多数の結果となり、生科連へ賛同という形で付帯意見とともに回答した。

・一部の理事には日本学術会議そのものへの不信感もたまっており（理事長自身も同様）、政治の介入に対しての声明には賛同するが、日本学術会議の存在を肯定したものではないことの付帯意見がつけられた。

・10/5㈪の段階では、世間では、

(1) 政府が理由を付さずに学術会議会員による決定に介入し、一部会員の任命を拒否したという問題

(2) 日本学術会議の在り方そのものに関する問題

の2点が混同したままに議論されていたが、分子生物学会を含めた生科連の声明は、あくまで（1）を意識したものとして受け止め賛同した次第である。

賛同したこと自体が現在の日本学術会議の在り方を肯定し、擁護しているように思われるのは不本意であり、理事長としては生科連からの賛否の問い合わせに対して理事会に諮り、賛成多数として生科連に回答した次第である。そして、本学会からの付帯意見やほかの学会からの議論もあって、声明文が少しでも誤解のないように改訂されてから行われたものと認識している。

しかしながら、多くの会員に不信感を与えたことはお詫び申し上げるとともに、日本学術会議のような科学アカデミーの在り方については、今後とも議論をしていきたいと思っている旨の説明がなされた。本内容は、会期2日目夜の総会でも理事長報告として説明したい。

②会員現況

木村庶務幹事より、2020年11月5日現在の会員数につき以下のとおりに報告がなされた。

名誉会員	0名
正会員	8,444名（海外在住195含む）
シニア会員	83名
次世代教育会員	16名
学生会員	3,677名（海外在住71含む）
賛助会員	21社
合　計	12,241名（前年総会対比、－739）

（*上記以外に所定の手続きによる休会者63名あり）

③ホームページについて

深川竜郎広報幹事より学会ホームページの運用状況について説明が行われた。本学会の事業以外に2020年度中に373件の記事を掲載した。COVID-19の影響で関連シンポジウム等の周知依頼は減ったが研究助成等の案内が増加した。学会フェイスブックのフォロワー数は1,962（前年対比+187）であった。

④生物科学学会連合について

木村庶務幹事より、12月12日に開催予定の生科連公開シンポジウム「生物多様性が人類にとって必須である理由」が紹介された。11月13日に開催された生科連定例会議において本学会からも推薦状を提出していた小林武彦会員が次期（2021年1月より2年）の代表に再選されたことが報告された。

続いて、小林武彦理事より、生科連の現在の活動状況について報告が行われた。

2）第43回（2020年）年会について

上村匡第43回年会長より、PPT資料に基づきMBSJ2020 Onlineの準備状況の報告がなされた。

（ⅰ）事前参加登録状況：配付資料では3,208名（招待を除く）、本日（11/30）現在約3,600名となっている。《最終的に当日参加を含め4,642名であった（2020.12.7/年会事務局集計）

（ⅱ）発表演題数：2,246演題（一般演題1,542、指定演題704)

（ⅲ）協賛収入：展示（NBRP等）93枠、広告20（プログラム集6頁、ＨＰバナーが14社）、バイテクセミナー枠、その他シンポジウム前動画広告4社、特設サイトバナー9社の協力を得ることが出来た。協賛収入金額は計2,672万円となった。オンライン開催形式のなか、協力頂いた各企業に感謝したい。

（ⅳ）プログラムは以下のとおりである。

シンポジウム19テーマ、ワークショップ91テーマ、フォーラム29テーマ、ポスター1,542題（一般演題1,306題、LBA236題）、高校生研究発表18題（口頭＋ポスター11題、ポスターのみ7題）、ショーケース発表件数10件（※ライフサイエンス・バイオサイエンスの研究者が持つ優れた研究シーズについて、共同研究、ベンチャー設立援助など、研究促進や事業化のためのパートナーとの出会いの場を設けた）

（ⅴ）組織委員会において検討を重ねた結果、MBSJ2020 Onlineでは次の方式（プラットフォーム）を採用した。

・シンポジウム・ワークショップ・フォーラム

⇒ Zoom ウェビナーにてライブ配信.
セッション終了後は SpatialChat によるトークルーム“Meet the Speakers”で引き続きディスカッションを行っていただく。
（※シンポジウム・ワークショップの講演 704 題のうち 383 題については、事後のオンデマンド配信を行う）

・ポスター⇒視聴サイト上でポスター PDF を閲覧.
　発表者自身が設定した Zoom ミーティングルームでライブディスカッション.
　視聴サイトの質問掲示板やダイレクトメッセージ機能を用いて発表時間外のディスカッションも可能とした。
・高校生研究発表⇒口頭発表は Zoom ウェビナー．ポスター発表は一般演題と同様.
・附設展示⇒視聴サイトでのコンテンツ視聴（テキスト、画像、動画）＋ Remo によりライブ商談会を行う。
・ショーケース⇒ Zoom ウェビナーによるプレゼンテーション＋ SpatialChat による質疑応答および交流会.

3）第 44 回（2021 年）年会準備状況

塩見美喜子第 44 回年会長より 2021 年の年会準備状況につき報告がなされた。

○会　期：2021 年 12 月 1 日㈬～3 日㈮
○会　場：パシフィコ横浜
○組織委員会：

年会長	塩見美喜子（東京大学）
組織委員長	小林　武彦（東京大学）
プログラム委員長	胡桃坂仁志（東京大学）
組織委員	東山　哲也（東京大学 / 名古屋大学）
組織委員	岩崎　由香（慶應義塾大学）

本日、第 44 回年会のホームページが立ち上がり、公募シンポジウム・ワークショップ企画公募の受付を開始した。プログラムとしては、公募シンポジウムは最大 18 テーマ、公募ワークショップは最大 101 テーマを予定している。また公募ワークショップでは一般演題（ポスター）から複数演題を採択、ポスターセッションにはディスカッサー制を導入予定であることが説明された。その他プログラム全体として以下の内容を予定している。

・高校生発表
・市民公開講座（年会最終日の夕方に開催予定、演者：小林武彦、胡桃坂仁志）
・横浜ヒストリア企画（過去の横浜年会の年会長にインタビューした内容をまとめた小冊子の無料配布、会場には過去横浜で開催した年会のポスターや要旨集の展示コーナーを設置予定）
・富澤基金メモリアル企画（富澤基金若手研究助成事業全体の振り返り、受賞者の成果発表＋メモリアルワークショップ、全 10 年分のポスター掲示など）
・バイオテクノロジーセミナー
・海外若手会員招聘企画

　続いて、公募シンポジウム・ワークショップ企画公募の募集要項等について報告された。会報 11 月号、年会ＨＰでは、2021 年 1 月 29 日締切と記載しているが、COVID-19 の状況を考慮し、締切は 2 月末日に変更したいと考えている。さらに今後の状況をみて、さらなる応募締切延長の可能性もあることが説明された。臨機応変に対応したい。

4）第 45 回（2022 年）年会準備状況

深川竜郎第 45 回年会長より 2022 年の年会準備状況につき報告がなされた。

○会　期：2022 年 11 月 30 日㈬～12 月 2 日㈮
○会　場：幕張メッセ
○組織委員会：

年会長	深川竜郎（大阪大学）
副年会長	永井健治（大阪大学）
組織委員長	原田慶恵（大阪大学）
プログラム委員長	甲斐歳恵（大阪大学）
組織委員	神田元紀（理化学研究所）、須藤雄気（岡山大学）、茂木文夫（National Univ. of Singapore）
プログラム委員	石井　優（大阪大学）、岡田康志（理化学研究所／東京大学）、古寺哲幸（金沢大学）、立花　誠（大阪大学）、林久美子（東北大学）、坂内博子（早稲田大学）、廣瀬哲郎（大阪大学）、谷内江望（東京大学／ Univ. of British Colombia）

○テーマ：『分子生物アゴラ～激論コロッセオ』
「議論できる学会」「生物物理との融合 / 異分野融合」「国際化 / 諸外国の学会との連携（特にアジアとの連携）」という 3 つの柱を念頭に、老若男女、上下の区別なく議論を通じて学問を深める年会を目指したい。
○開催方針・プログラム骨子

オンサイトとオンラインのハイブリッド開催の可能性も視野に入れて開催準備を進め、以下を予定している。

・プレナリーレクチャー：6 講演程度（1 日 2 講演× 3 日間）
・指定企画：20 企画程度（うち 10 企画程度を生物物理学会とのコラボ企画とする）
・公募企画：80 企画程度
・ポスター発表：デジタルポスターブースを 10 ブース程度設けて口頭発表希望者を募り、1 題 3 分、1 日 200 題程度のショートトークの開催を計画している。

○ 日本生物物理学会との連携について

標記について 2019 年 7 月、21 期理事会にて持ち回り審議を行い、学会連携の覚書を交わしていることが深川年会長から説明された。有効期間は 2022 年 1 月から 2023 年 12 月までで、対象事業は 2022 年開催の大会（双方の大会において発表・参加資格を有すること．joint シンポジウムの企画等）と 2023 年開催の「国際生物物理会議（IUPAB 京都）」への学会協力である。

5）第 46 回（2023 年）年会準備状況

林茂生第 46 回年会長より 2023 年の年会準備状況につき報告がなされた。

○会　期：2023 年 12 月 6 日㈬～8 日㈮
○会　場：神戸国際会議場、神戸国際展示場、神戸ポートピアホテル

本年 8 月、開催地を神戸に決定し、事務局経由にて会場仮予約手続きを行った。8 月末に神戸コンベンションビューロー担当者と面談を行い、現状の感染症対策、会場の通信事情等についてヒアリングを行った。2023 年時点の感染症リスクがどうなっているか予測が難しいが、開催形式の第一候補としてハイブリッド形式を考えている。感染リスクを恐れる会員の意向に配慮した年会運営を心掛けたい。

オンサイト開催での安全性、研究機関等の出張ポリシーはどうなっているか、海外からの渡航制限の緩和状況、旅費を払って会場に出向くインセンティブをどう与えるか等々、検討課題が多いことの説明がなされた。年明け、組織委員会の立ち上げに着手し、開催骨子を策定していく予定である。

なお、9 月に開催された第 6 回執行部会議において、パンデミック下における学会行事（年会を含む）すべてを網羅した開催方針策定の必要性について意見交換がなされた。パンデミック下における『年会（学会行事）の運営・開催ポリシー（ガイドライン）』を準備する方向での検討を、次期の 22 期理事会（22 期執行部）への申し送りとしたいことが報告され、本合同理事会にて確認された。

6）理事選挙結果報告

木村庶務幹事より第 22 期理事選挙結果の報告がなされた。2020 年 10 月 30 日に開催された第 22 期新理事会準備会議において、白髭克彦氏が第 22 期理事長に選出された。

7）上村編集幹事より、配布資料に基づき、学会誌『Genes to Cells』の編集報告が行われた。

2003 年から 2020 年までの Online 投稿数の推移表、Online 投稿数と Accept 率（海外地域別円グラフ）が示され、編集状況の説明がなされた。2020 Cover Art が配付され、伝統絵画のなかに生命科学の遊び心を加えた本誌の表紙デザインは、10 年目を迎えた今日でも高い評価を得ていることが報告された。表紙デザインに関するアイディアがあれば、ぜひ編集室または編集幹事までお寄せいただきたい。

関連して出席理事より、Open Access ジャーナル「Plan S」の動向についての情報提供がなされた。本件に関係する Genes to Cells の今後の対応であるが、先ずはすみやかに編集室と学会事務局にて、Wiley 社の「Plan S」への対応・動向につき情報を集めることとしたい。

8）各種学術賞、研究助成候補への学会推薦状況について

正井久雄賞推薦委員長より、2020 年に本学会より推薦した各種学術賞候補者について報告がなされた。会員からの応募に対応し、本年は 7 種の学術賞推薦に関する委員会審査を行った。

引き続き、吉森保研究助成選考委員長より、2020 年の研究助成推薦状況と結果等について報告が行われた。山田科学振興財団研究援助ならびに東レ科学技術研究助成への学会推薦に際し、委員会審査を行った。

9）キャリアパス委員会報告

胡桃坂仁志キャリアパス委員長より、配付資料に基づき委員会の活動内容が報告された。

①本委員会のミッション、委員会活動の流れ、これまでの年会企画、21 期の委員会名簿が配られ、活動概要の説明がなされた。
② 2009 年から 2020 年までの年会における属性調査結果（女性比率の推移）が示された。学会員の男女比率、発表カテゴリー（一般演題、シンポジウム・ワークショップそれぞれのオーガナ

イザー、スピーカー）との関係、各カテゴリーにおける女性比率の比較、等々について説明がなされた。

③ MBSJ2020 Online においては以下 2 企画のランチタイムセミナーを開催するので、理事各位においても積極的に参加いただきたい。

『あなたのその研究テーマ、続けますか？変えますか？』（年会初日 /12 月 2 日）

『海外へ Go ！？』（年会 2 日目 /12 月 3 日）

④本年 9 月､上記セミナー『あなたのその研究テーマ、続けますか？変えますか？』の当日ディスカッションの題材のための事前アンケートを行った｡アンケート結果により貴重なデータ(回答者 548 名)を得たことが報告された｡アンケート結果は学会 HP・キャリアパス委員会年会企画ページで公開している。

10）研究倫理委員会報告

中島欽一研究倫理委員長より、昨年の福岡年会初日に開催した研究倫理フォーラムの概要が紹介された。

本年は COVID-19 の影響で研究遂行そのものが困難になっているという研究室もある。この状況下では研究倫理に特化した議論が難しいことなどから、8 月開催の 21 期臨時理事会において、MBSJ2020 Online での研究倫理フォーラム実施は見合わせることを決定している。状況を判断しつつ､来年以降の研究倫理フォーラムをどうするか､内容・開催方法の検討を 22 期に申し送りたい。

11）富澤基金・基金運営委員会報告

小原雄治基金運営委員長より、富澤基金による第 10 回（2020 年）日本分子生物学会 若手研究助成結果につき報告がなされた。

（ⅰ）第 10 回応募の受付期間：2020 年 1 月 15 日～2 月 4 日

（ⅱ）応募総数：131 名（男性 106 名、女性 25 名 ※性別は名前からの推定による）

（ⅲ）選考：

・第 1 次審査：書類審査

・第 2 次審査：5 月 9 日、12 名のヒアリングを WEB 会議形式で実施

（ⅳ）審査経過と第 10 回助成対象者：

審査経過詳細については、会報 126 号（2020 年 6 月号）に結果報告を掲載済みであるので参照されたい。第 10 回若手研究助成の助成対象者は以下の 6 氏である。

○岡本直樹（筑波大学 TARA センター / 申請時の所属はカリフォルニア大学リバーサイド校昆虫学分野）

神経・内分泌系による発生過程における生得的行動調節機構の解明.

Elucidation of the neuroendocrine control of innate behavior during development.

○古藤日子（産業技術総合研究所生命工学領域生物プロセス研究部門）

アリの社会的な養育行動を介した表現型多型制御メカニズムの解明

Regulatory mechanisms of polyphenism via social nursing behavior in ants

○金　尚宏（東京大学理学系研究科生物科学専攻）

カルシウムクロック：概日時計の普遍原理の追求

Calcium clock: Exploration of universal mechanism of circadian clock

○田渕理史（Department of Neurosciences, Case Western Reserve University School of Medicine）

アルツハイマー病の治療標的探索に向けた睡眠剥奪依存的な神経細胞の過剰興奮機構の解明と制御

Control of Sleep Deprivation-induced Neuronal Hyperexcitability for Alzheimer's Disease Pathogenesis

○藤井壮太（東京大学大学院農学生命科学研究科）

植物の生殖初期過程における同種選択の分子メカニズム

Understanding the molecular mechanism for sexual selection in plants

○星野歩子（東京工業大学生命理工学院 / 申請時の所属は東京大学 IRCN）

がんにおけるエクソソームのプロテオミクス：がん診断バイオマーカーの解析

The exosomal protein in cancer as a biomarker potential

第 1 回からこの間、延べ 1,197 名の応募をいただき、合計 50 名を助成してきたが、人数の制限から助成に至らなかった方、ヒアリングに呼べなかった方にも多くの優れた研究計画があったことが報告された。本助成は今回の第 10 回で終了となるが、本事業の審査基準に合うような個性に裏打ちされた独自性の高い研究を追求されることを、特に若手に期待したい。

第 10 回助成の贈呈式は MBSJ2020 Online 会期 2 日目夜に開催されるのでぜひ参加いただきたい。来年の第 44 回横浜年会会期中に富澤基

金若手研究助成事業全体を振り返るメモリアルイベントを企画中であることが報告された。

12）第 9 回（2021 年）国際会議支援選考結果報告

石川冬木国際会議支援選考委員長代理、荒木弘之委員より、第 9 回目となる国際会議支援についての選考結果について報告された。本年の応募は 6 件で、選考委員会における慎重な審査を経て、理事長承認のもと、以下の会議が採択された。

《会議名称》

（和文）第 10 回 MDM2 国際ワークショップ

（英文）10th MDM2 International Workshop

開催責任者：大木理恵子（国立がん研究センター研究所・独立ユニット長）

会　　期：2021 年 9 月 26 日㈰～29 日㈬

会　　場：国立がん研究センター 新研究棟

助成金額：250 万円

《会議名称》

（和文）第 11 回国際分裂酵母会議

（英文）The 11th International Fission Yeast Meeting（Pombe 2021 Hiroshima）

開催責任者：登田　隆（広島大学大学院統合生命科学研究科・特任教授）

会　　期：2021 年 6 月 6 日㈰～11 日㈮

会　　場：JMS アステールプラザ広島（広島市）

助成金額：250 万円

13）生命科学教育について

胡桃坂仁志担当理事より、配付資料に基づき、高校などへの 2020 年の講師派遣の状況が報告された。本年 2 月以降は、COVID-19 の影響下であることに鑑み講師派遣の実施を控えていたが、徐々に派遣依頼が寄せられるようになったためマッチングを再開している。

年会における高校生研究発表会については、MBSJ2020 Online において最終日夕刻に WEB にて開催する。ポスター発表 18 演題、口頭発表 11 演題、参加校 20 校、参加者 102 名の予定であり、口頭発表は五島剛太委員が座長を務める。理事各位においても積極的に参加いただきたい。

14）その他

（ⅰ）文科省ロードマップ 2020 掲載研究計画「ヒューマングライコームプロジェクト」について生科連が賛同書を発行する件

阿形理事長より、11 月 25 日付にて生科連から標記に関しての賛同書を発行してよいかどうかの諾･否を求められていることが報告された。続いて小林理事（生科連代表）より今回の経緯、研究概要、生科連・運営委員会での検討状況について説明がなされた。

討議の結果、本件については、後日あらためて 21 期理事にて投票（持ち回り審議）を行い、その上で学会対応を決めることとなった。（※投票の結果、賛成多数となり、生科連あて 12 月 9 日付にてその旨の回答を行った。その際、若干名の理事から寄せられた付帯意見もあわせて提出した。）

（ⅱ）木村庶務幹事より、第 43 回通常総会の議事進行と報告担当者の確認、さらに第 10 回富澤基金贈呈式の式次第の確認がなされた。

2．審議事項

1）令和 2 年度（2020 年度）決算承認の件

三浦正幸会計幹事より令和 2 年度活動計算書の収支について詳細説明がなされた。決算処理の結果、本年は 4 年ぶりの 685 万円の赤字決算となったことが報告された。

赤字になったポイントは 3 つあり、1 点は会費収入が前年に比べ 700 万円減であったこと（43 回年会演題の応募減に連動し、本年 8～9 月の新入会者数、会費納入率も減となっている）、2 点目は昨年 10 月からの消費税値上げに伴う経費支出の増、もう 1 点はオンライン年会対応のため、演題募集要項配布のための会報臨時号（2020 年 8 月号）を発行するにあたり約 202 万円（印刷代 93 万円、送料 109 万円）が掛かったことがあげられる。上記のマイナス要因を合計すると 1,300 万円近くになるが、第 42 回福岡年会の大幅黒字によって、結果として赤字幅は 685 万円に収まったといった決算内容である。

経常費用に関しては、事業費・内訳別収支について詳細説明がなされた。さらに富澤基金の決算についても報告が行われた。本決算においては、法人の地方税､消費税で約 301 万円を納めており、税務処理については顧問契約を交わしている税務専門家の指示のもと、収益事業部分の法人確定申告を行った。

本決算は 10 月 26 日に宮城秀敏公認会計士の監査を受け、さらに同年 11 月 6 日に学会事務所において小安重夫監事による監査会を実施、その後資料郵送により 11 月 10 日に町田泰則監事による会計監査を受け、配付資料のとおりの監査報告書が提示されている。

続いて小安監事より 11 月 6 日に会計監査を実施し、監査報告書に記載したとおり、帳簿ならびに会計証憑類は正確に整えられており、各金融機関の通帳と残高証明書を確認し、同決算を認めたことが報告された。なお、現状の内部留保（次期繰越金 2 億 540 万円）から見て直ちに対処を検討

する状況ではないだろうが、コロナ禍での会費収入の動向（会員数の増減）、今後の年会収支等について注視しておく必要があることを事務局に申し伝えたことが報告された。

審議の結果、本決算は理事会で承認され、第43回通常総会に諮られることとなった。

2）令和3年度（2021年度）活動予算書承認の件

三浦会計幹事より、令和3年度活動予算書と同活動予算・事業費の内訳について詳細説明が行われた。

前年決算の実績をふまえて各科目を微調整している。COVID-19により完全オンライン形式となったMBSJ2020 Onlineの年会収支が本2021予算に反映されることが報告された。会費収入等をどこまで回復できるか予測がむずかしい点もあり、パンデミック対応の特別編成予算となっている。新しい項目としては財政再建のため、あらたに学会本体（会報と学会HP）に広告収入（事業収入）150万円を計上した。Genes to Cellsの出版収入は為替レートの予想が難しいが、ほぼ例年どおりの金額を計上している。

以上で試算した1次案は当期収支△1,678万円となっており、同案をもとに種々の意見交換がなされた。印刷物等、支出経費の検討も重要である。続いて三浦会計幹事より、例年500万円を組んでいる「国際会議支援事業」(⇒2021予算対応:「第10回（2022年）国際会議支援」）であるが、COVID-19の状況を考慮しての一時的な休止あるいは減額が提案され、審議された。今後、応募される国際会議企画自体もオンラインが増えてくる可能性もあり、本学会の国際化方針を継続していくためにも、予算を減額しても本事業（オンライン支援を含む）そのものを継続していく意味は大きいとの意見が出席理事より提出された。討議の結果、同事業の予算としては200万円を計上することとなった(それにともない､第10回(2022年)国際会議支援の募集要項を修正することとなる)。また本年のEMBO企画対応（2020.12.5サテライトシンポジウム）は本予算では考慮しないことが確認された。

審議の結果、1次案を一部修正し、法人として当期収支△1,328万円の予算案を決定した。同予算を第43回通常総会に諮ることとした。

関連して、昨年の定例理事会（福岡）で話題となった内部留保の資産運用について確認がなされた。これについては本年1月、福田事務局長が公認会計士に確認を取っており、以下のコメントを預かっていることが説明された。

(1) 資産運用会社などの金融のプロに依頼してもリスク（元本割れ）はある。かつ手数料は高額である。

(2) 損失が出た場合､定款でいうところの役員（つまり理事会）に責任が生じるが、そもそも営利企業の常勤役員と違って、学会（非営利の学術団体）のような組織の理事会（非常勤/無報酬）にはなじまないのではないか。

(3) 資産運用は学会の本来事業ではないこと。

(4) 企業の役員会には相応の任期があり、健全経営（利益）を進めていくことが、課せられているが、学会の理事会は（分子生物学会の理事会は)、任期が2年であり、この任期態勢での資産運用は難しいのではないか。

(5) あくまで学会の場合は、会費収入、学術年会参加費等が主たる収入源であるので、預貯金をファンド等の債券保有に切り替えることは、理事会議決、総会議決が必須となる（会員の同意が必要)。

(* 以上により顧問会計士としては、ファンド等による資産運用には賛成しにくい。宮城公認会計士が特に協調されていたのは(3)(4)であった)

最後、阿形理事長より内部留保の資産運用は考えていないことが報告された。

3）第47回（2024年）年会長について

阿形理事長より、第47回年会については、年会長を東京工業大学科学技術創成研究院・木村宏会員に依頼したいことが諮られ、承認された。

続いて､木村氏(21期理事)より東工大メンバーの協力を得ながら鋭意準備にあたりたいとの挨拶がなされた。

4）第22期理事会の体制、各幹事、各種委員会委員長・委員の委嘱について

白髭克彦第22期理事長より、役員・幹事・各委員会名簿（案）が配付され、調整中であるキャリアパス委員会構成を除いて、原案どおりに承認された。22期のキャリアパス委員会は12月中には決定できる予定である。研究倫理委員会については理事4名のほか、一般会員からの外部委員1名を特別委員として追加したいとの提案がなされ、了承された。集会幹事は、22期理事会任期に合わせ、2021年塩見年会長と2022年深川年会長に入ってもらうこととなった。

5）第22期監事候補の選任

阿形第21期理事長から、第22期の監事候補として荒木弘之会員、石野史敏会員が推薦され、承認された。監事については第43回通常総会で承

認を得た後、正式選任となる。

6）第 22 期副理事長の選任

木村庶務幹事より副理事長選出に関する細則の説明がなされ、その後、22 期出席理事により投票（オンライン会議のため、メール添付形式にて事務局へ投票）が行われ、副理事長として、杉本亜砂子氏と水島昇氏が選任された。

7）事務局の体制について（現事務局長の定年対応等）

阿形理事長より、8 月開催の 21 期臨時理事会にて出席理事より事務局の強化・現事務局長の定年対応（雇用延長の可能性等）について、早めに検討に着手したほうがよいとの意見があったことが報告された。その後 9 月に開催された執行部会議において、執行部では以下の方針を決定し、福田事務局長の内諾を得たことが報告された。

・規程に基づき、福田氏は 2023 年 3 月末で定年退職となる（* 就業規則による定年は満 65 歳に達した最初の 3 月 31 日 / 定年そのものの延長は行なわない）。その後、嘱託職員として再雇用し、2 年程度、事務局業務に当たってもらいたい。（雇用契約期間はあくまで 1 年単位とし、それを 1 回延長して計 2 年間、事務局業務に当たってもらいたいと考えており、要請の結果、本人の内諾を得た）

続いて、阿形理事長より 21 期執行部で策定した「嘱託職員就業規則」（案）の詳細説明がなされた。規則案の 14 条（期間）と 15 条（給与 / 定年退職時の年収の 6 割以下とする）について出席者より意見が提出され、細部の確認作業については、22 期執行部へ申し送られた。同時に早い段階で、事務局は同規則に不備がないか専門家（学会顧問の会計事務所 / 社会保険労務士）の確認を取ることとなった。事務局関係の規則も所管の労働基準監督署に提出されるので法令遵守にて対応したい。

8）21 期から 22 期への申し送り

阿形理事長より 22 期理事会へ以下 5 点について申し送りと退任の挨拶がなされた。

(1) パンデミック下における『年会（学会行事）の運営・開催ポリシー（ガイドライン）』を準備する方向での検討を 22 期理事会（22 期執行部）へ申し送りたい。

(2) サイエンスコミュニティーの中でのボトムアップの役割（学術会議や生科連との関係を含む）

(3) 印刷費等支出経費の検討

(4) 学会国際化の継続

(5) 事務局の強化

続いて、白髭 22 期理事長より、サイエンス全般のこの変革期に本学会がどのように対応していったらよいか尽力したいとの挨拶がなされた。22 期理事会、22 期執行部の方々には協力をいただきたい。

9）その他

・日本生態学会との連携について

杉本亜砂子理事（20 期理事長）より、2018 年に分子生物学会は日本生態学会と学会連携の覚書を交わし、2 年間、双方の大会に両学会会員資格にて発表・参加できるといった学会連携協力を行ってきた。本年 3 月の生態学会名古屋大会は新型コロナウイルス感染拡大防止のため残念ながら開催中止となったが、2 年間、双方の大会で合同企画ワークショップなどを開催し、両学会の人材交流にもつなげることが出来たことが報告された。協力いただいた理事会関係者に御礼を申し上げたい。

上記、第 21 期・第 22 期 合同理事会の議決および確認事項を明確にするため、この議事録を作成し、議事録署名人はここに記名押印する。

2020 年 11 月 30 日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
第 21 期・第 22 期 合同理事会

議　　長　阿 形 清 和　㊞
議事録署名人　塩 見 美喜子　㊞
議事録署名人　深 川 竜 郎　㊞

特定非営利活動法人　日本分子生物学会　令和３年度（第 43 回）通常総会記録

日　　時：令和 2 年 12 月 3 日㈭ 18：30～20：00
場　　所：MBSJ2020 Online（第 43 回日本分子生物学会年会〔オンライン開催〕）チャネル 1
社員数（正会員＋名誉会員＋シニア会員＋次世代教育会員）：8,543 名
出席者数：4,399 名（オンライン会議システム使用による本人出席 80 名、表決委任者 4,319 名）
議事内容：

1．定款第 25 条に基づき、阿形清和理事長より本総会議長として倉永英里奈会員が指名された。さらに定款第 29 条に基づき、議事録署名は、上村匡会員（第 43 回年会長兼）と阿形理事長が担当することが確認された。

2．倉永議長より、定款第 26 条（総会の定足数）に基づき、上記表決委任者（委任状）を含めて出席 4,399 名となり、本総会は成立する旨報告された。

3．経過報告（事業報告）

1）理事長報告

阿形理事長より、事業活動の主な内容として下記 5 点について報告が行われた。

①国際化関連（年会の国際化について）

前期からの将来計画申し送り（年会の開催方針、年会開催ルール細目）を受けて、第 21 期理事会では年会国際化を推進するための「5 カ年計画」を設定した。そして、1 年目（2019 福岡年会）は T 字型プログラム（会期中、常にどこかの会場で英語のシンポジウムを行い、さらに会期 2 日目は全会場で 1 日中英語セッションが行われる「英語デー」とした）に着手し、2 年目（2020 Online）の今年はワークショップの完全英語化、EMBO とのコラボレーション企画を試みた。3 年目（2021 横浜年会）も緩やかな T 字型を継承してもらい、4 年目（2022 幕張年会）は ASCB とのコラボレーション企画が進められている。2019 年から 2022 年までの各年会の経験・フィードバックの蓄積を総括してもらい、5 年目（2023 神戸年会）は林茂生国際化担当幹事に年会を運営していただき、その後に学会として国際化についてあらためて議論することとした。

第 21 期理事会が推進する「年会国際化」には「年会の国際化」と「分子生物学会のグローバル化」という 2 つの意味合いがある。すなわち、「年会の国際化」を通して、「日本の分子生物学研究の世界での認知度を高めるとともに、学会全体のレベルを上げていく」ことを目標としている。そして、「分子生物学会のグローバル化」を達成するためには、海外のコミュニティとの相互理解と連携を進めていくことが不可欠と認識している。

②国際化関連（海外との連携状況）

・「5 カ年計画」1・2 年目の 21 期では、EMBO との交流に尽力した。日本が対象となった EMBO の Fellowship に関する周知協力や、2020 年 2 月には EMBO と共同で EU 大使館にて日本の政府機関（Funding Agency）なども招いての Expert Meeting を行ったほか、本年会においては、サテライトシンポジウム International Symposium for Female Researchers in Chromatin Biology (ISFRCB) 2020 や、フォーラムで EMBO Journal の Chief Editor を招いてのハンズオントレーニングなどの関連プログラムが企画されている。EMBO とは来年以降も協力関係を続けてほしい。

・KSMCB（韓国分子細胞生物学会）については、2019 年夏に先方からコンタクトがあり、福岡年会会期中の 2019 年 12 月 5 日に KSMCB 代表が年会会場を視察、理事会執行部と会合を持った。2020 年 3 月、KSMCB からの MOU 締結の申し入れがあり、KSMCB2020 大会訪問後に検討することとしていたが、COVID-19 の状況もあり取扱い保留となっている。10 月 5 日 -7 日の KSMCB2020 大会は韓国・済州島（Jeju）開催予定であったがオンライン開催に変更され、理事会執行部より阿形理事長はじめ 3 名が招待参加となった。MBSJ2020 Online には KSMCB メンバー 3 名を招待した。

・ASCB（The American Society for Cell Biology）については深川竜郎 2022 年会長が Iain Cheeseman 氏と Cell Bio における連携企画を検討している。当初は Cell Bio 2021（2021/12/11-15 @ San Diego）前日の Door Step Meeting での連携を想定していたが、COVID-19 の影響で前年に開催予定だった同プログラムがずれ込んだ関係で、現在はそれに代わる連携企画を検討中である。学会としては ASCB とのコラボレーションに向けて経済的サポートすることを承認している。

③日本学術会議の会員任命問題

2020 年 10 月、日本学術会議の会員任命問題に関連して本学会が生物科学学会連合関係の声明に賛同したことについて、すべての会員が賛同したようにとらえられることへの異議が複数寄せられた。経緯説明として、当時世間では「政府が理由を付さずに学術会議会員による決定に介入し、一部会員の任命を拒否したという問題」と「日本学術会議のあり方そのものに関する問題」とが混同して議論されている状況であったが、理事会で急ぎ審議した結果、生科連の声明はあくまで前者を意識したものと受け止め、「政治の介入に対しての声明には賛同するが、現在の日本学術会議の在り方を肯定したものではない」との付帯意見を付けて回答した次第である。多くの会員に不信感を与えたことをお詫び申し上げるとともに、日本学術会議のような科学アカデミーのあり方、サイエンスコミュニティのボトムアップシステムの構築については、今後も議論していきたい。

④今後の学会事務局体制の強化について、引き続き議論していくことを次期への申し送り事項とする。

⑤ 11 月 30 日開催の第 21 期・第 22 期合同理事会において、第 47 回（2024 年）年会長を木村宏会員（東京工業大学科学技術創成研究院）にお願いすることが決定した。「5 カ年計画」の翌年にあたる第 47 回年会においては、「5 カ年計画」の総括を受けての年会運営となる。

※理事長報告①～④に関する詳細は 11 月 30 日開催の第 21 期・第 22 期合同理事会記録を参照のこと.

2）庶務報告

木村宏庶務幹事より以下の報告が行われた。

①会員現況：〔2020 年 11 月 5 日現在〕正会員 8,444 名、シニア会員 83 名、次世代教育会員 16 名、学生会員 3,677 名、賛助会員 21 社、総計 12,241 名（前年 11 月対比、－739）

②第 22 期理事選挙：選挙管理委員会のもとで 2020 年 6～7 月の間で会員による投票が行われ、第 22 期理事が選出された。10 月には新理事会準備会議が開かれ、白髭克彦氏が第 22 期理事長に選出された。

③生物科学学会連合：次期（2021 年 1 月より 2 年間）の代表について、11 月 13 日に開催された生科連定例会議において、本学会からも推薦状を提出していた小林武彦会員が再選された。また 12 月 12 日に生科連シンポジウム「生物多様性が人類にとって必須である理由」がオンライン開催予定である。

3）編集報告

上村匡編集幹事より『Genes to Cells』について報告が行われた。

今年は COVID-19 の影響で研究の継続もままならない環境の中、昨年とほぼ同等の投稿数があったことに感謝申し上げたい。西田編集長が常々発信している通り、Genes to Cells は投稿者である生命科学系研究者・学生の皆様に寄り添うジャーナルを目指している。可能な限り著者の立場に立って投稿受理までの手伝いをしたい。Genes to Cells にぜひ積極的に投稿していただくと同時に、投稿された方には次の論文でご自身の Genes to Cells 掲載論文を引用くださることもお願いしたい。

4．議　事

1）令和 2 年度（2020 年度）決算承認の件

三浦正幸会計幹事より総会資料に基づき、令和 2 年度活動計算書の収支について詳細報告が行われた。2020 年 10 月 26 日、公認会計士宮城秀敏氏の会計監査を受け（総会資料の独立監査人の監査報告書を参照）、さらに同年 11 月 6 日に学会事務所において小安重夫監事による監査会を実施したこと、その後資料郵送により 11 月 10 日に町田泰則監事による会計監査が行われたことが報告された。

続いて小安監事より 11 月 6 日に会計監査を実施し、監査報告書に記載したとおり、帳簿ならびに会計証憑類は正確に整えられており、各金融機関の通帳と残高証明書を確認し、同決算を認めたことが報告された。なお、コロナ禍での会費収入の動向（会員数の増減）、今後の年会収支等について注視しておく必要があることを事務局に申し伝えたことが報告された。

審議の結果、本決算は異議なく承認された。

2）令和 3 年度（2021 年度）活動予算書承認の件

三浦会計幹事より総会資料に基づき、令和 3 年度活動予算書について説明が行われた。審議の結果、同活動予算書は異議なく承認された。

3）第 22 期監事選任の件

定款第 14 条に基づき、阿形理事長より第 22 期監事として荒木弘之会員、石野史敏会員が推薦され、承認（選任確認）された。

5．第 43 回（2020 年）年会長挨拶

上村匡第 43 回年会長より年会開催状況について報告が行われた。

MBSJ2020 Online として完全オンライン開催とい

う初の試みとなった本年会は、京都大学の近くに会議室を借りて基地局（年会本部）を設置し、運営に当たっている。最大19会場（チャネル）で同時にセッションが行われるため、基地局では2名ずつの担当者を19会場分に割り当て、密を避けるよう間隔を取って人員と機材を配置し対応している。初日ののべアクセス数は4,100を超えた。初日のポスターセッションの時間帯に繋がりにくくなったことがあったが現在は解消しており、その後は視聴サイトの細かなエラーに対処しているものの、大きなトラブルもなく概ね順調に進んでいる。

本年会はオーガナイザー、スピーカー、そして参加者の皆様にご尽力いただき進められている。どなたも新しい経験をされているものと思うが、密度の濃いサイエンスの議論を進めていただき、最後までご参加をお願いしたい。

本年会にはCOVID-19感染拡大の影響で研究活動の継続もままならない研究者が多数おられるのと同様、企業でも厳しい状況が続いている中、協賛の協力をいただくことができた。オンライン年会における協賛企業と参加者との交流の仕方も検討したので、参加者の皆様にはオンライン面談の機会をご活用いただきたい。

また最終日の夜には、Developmental Cell誌の編集者Spyros Goulas氏を招いて年会長企画の特別フォーラムを行う予定である。Goulas氏は日本の大学で6年間ポスドクをしていた経験があり、日本の基礎研究コミュニティ事情にも詳しい。ぜひご参加いただきたい。

6．第44回（2021年）年会長挨拶

塩見美喜子第44回年会長より2021年の年会準備状況について報告が行われた。

・会期：2021年12月1日㈬〜3日㈮の3日間
・会場：パシフィコ横浜

現状ではオンサイトでの開催を希望している。今後COVID-19の状況によっては、一部オンラインの併用や海外指定演者招聘に関すること、各種締切の設定など、柔軟に対応する必要があると感じている。

一般演題（ポスター）の小項目を編成して41項目とし、41名のプログラム委員に1項目ずつ担当をお願いする。うち女性委員は25%である。

このほど第44回年会のホームページを開設し、公募企画の受付を開始した（締切:2月末日予定）。公募シンポジウムは最大18テーマ、公募ワークショップは最大101テーマを予定している。また公募ワークショップでは一般演題（ポスター）から複数演題を採択、ポスターセッションにはディスカッサー制を導入予定である。指定シンポジウムは6テーマ。

その他のプログラムとして、高校生発表、市民公開講座、バイオテクノロジーセミナー、海外若手会員の招聘企画、横浜ヒストリア企画（横浜年会長インタビュー小冊子の配布、歴代横浜年会ポスター・要旨集の展示コーナー設置など）、富澤基金メモリアル企画（2020年で終了した富澤基金若手研究助成事業全体の振り返り、受賞者の成果発表＋メモリアルワークショップ、全10年分のポスター掲示など）が予定されている。

7．第45回（2022年）年会長挨拶

深川竜郎第45回年会長より2022年の年会開催企画案と準備状況について報告が行われた。

・会　期：2022年11月30日㈬〜12月2日㈮の3日間
・会　場：幕張メッセ

テーマは『分子生物アゴラ〜激論コロッセオ』とし、以下の3つの柱を念頭に置いている。

「議論できる学会」：大きな会場を借りることができたので、議論を盛り上げられるよう、広いポスター会場内に小さな会場を区分けして作るレイアウトを考えている。

「生物物理との融合 / 異分野融合」：本年会は日本生物物理学会と協力・連携して開催する予定であり、正式に覚書を交わしている。両学会の年会における会員の相互乗り入れのような形をイメージしている。指定企画では両学会のコラボレーション企画も予定している。

「国際化 / 諸外国の学会との連携」：特にアジアとの連携を重視しており、COVID-19の状況をみながらアジアの若手PIを招聘することを検討している。

組織委員会には生物物理学会の先生方や若手の方にも参画していただいており、その力も借りて面白い企画を考えていきたい。開催形式については、COVID-19の状況に関わらず、今年行われたオンライン学術集会での経験を活かしたハイブリッド開催の可能性も視野に入れて準備を進めている。例えばプレナリーレクチャーを海外の方にオンラインでお願いすることなどを検討している。

指定企画は20企画程度、公募企画は80企画程度を予定している。ポスター発表ではデジタルポスターブースを設けて口頭発表希望者を募ることも計画している。

8．第46回（2023年）年会長挨拶

林茂生第46回年会長より2023年の年会準備状況

について報告が行われた。

・会　期：2023 年 12 月 6 日㈬～8 日㈮
・会　場：神戸国際会議場、神戸国際展示場、神戸ポートピアホテル

現状ではハイブリッド形式の年会を基本として考えているが、今後の COVID-19 の状況や現在開催中の MBSJ2020 Online での経験、また会員の皆様のご意見などを考慮して、来年具体的なことを検討していきたい。

9．次期理事長挨拶

白髭克彦次期理事長より挨拶があった。阿形理事長の方向性と課題を継承しつつ、研究の交流の場、学問の発展の場としての学会ということを第一の目的とし、特に若手が主役になれる環境づくりに注力したい。コロナ禍という特殊事情の中、この時代にふさわしい学会運営、学会の国際化・国際展開、学会運営のスリム化、新しい年会のあり方などを模索していきたい。また政治と科学者の関わり方についても、会員の皆様と議論を深めた上で、建設的な議論を積極的に発信していけるとよいのではないかと考えている。

10. 倉永議長より閉会の挨拶があり、第 43 回総会が終了した。

上記、令和 3 年度通常総会の議決および確認事項を明確にするため、この議事録を作成し、議事録署名人はここに記名押印する。

令和 2 年 12 月 3 日

特定非営利活動法人　日本分子生物学会
令和 3 年度通常総会
議　　長　倉　永　英里奈　㊞
議事録署名人　阿　形　清　和　㊞
議事録署名人　上　村　　匡　㊞

令和２年度（2020年度） 決算報告

令和２年度（2020年度） 活動計算書

令和１年10月１日から令和２年９月30日まで

特定非営利活動法人　日本分子生物学会

科　目	金　額		
Ⅰ　経常収益			
1　受取入会金			
正会員受取入会金	285,000		
学生会員受取入会金	563,000	848,000	
2　受取会費			
正会員受取会費	48,741,500		
学生会員受取会費	6,434,000		
賛助会員受取会費	960,000		
シニア会員受取会費	237,000		
次世代教育会員会費	58,500	56,431,000	
3　受取寄付金	5,000,000	5,000,000	
4　受取助成金	3,308,940	3,308,940	
5　事業収入			
⑴学術集会、研究発表会、講演会の開催等による分子生物学に関する学術研究事業	189,623,510		
⑵分子生物学に関する機関誌及び論文図書等の発行事業	16,273,687		
⑶その他目的を達成するために必要な事業	0	205,897,197	
6　その他収益			
受取利息	9,931		
雑収入	79,000	88,931	
経常収益計			271,574,068
Ⅱ　経常費用			
1　事業費			
⑴人件費			
給与手当	11,463,709		
法定福利費	1,881,049		
福利厚生費	10,696		
人件費計	13,355,454		
⑵その他経費			
業務委託費	84,998,677		
編集業務費	4,888,583		
印刷費	31,714,277		
通信運搬費	8,107,185		
旅費交通費	25,582,442		
会議費	919,631		
支払手数料	1,746,660		
消耗品費	312,611		
会場費	32,109,116		
機材費	26,401,386		
諸会費	60,000		
広報費	3,080		
補助金	5,000,000		
租税公課	763,684		
その他経費計	222,607,332		
事業費計		235,962,786	
2　管理費			
⑴人件費			
給与手当	17,002,068		
法定福利費	2,809,856		
福利厚生費	15,984		
人件費計	19,827,908		
⑵その他経費			
事務所家賃	3,782,138		
業務委託費	1,941,060		
会員管理システム運用管理費	2,508,000		
印刷費	1,878,125		
通信運搬費	2,848,587		
旅費交通費	1,584,810		
会議費	263,969		
支払手数料	1,322,598		
消耗品費	707,660		
雑費	938,448		
租税公課	3,013,900		
退職給付引当金繰入	1,840,200		
その他経費計	22,629,495		
管理費計		42,457,403	
経常費用計			278,420,189
当期正味財産増加額			△ 6,846,121
前期繰越正味財産額			212,270,132
次期繰越正味財産額			205,424,011

（単位：円）

令和２年度（2020 年度） 貸借対照表

令和２年９月 30 日現在

特定非営利活動法人　日本分子生物学会

科　　目	金　　額		
Ⅰ　資産の部			
1　流動資産			
現金預金	200,347,751		
前払費用	15,346,159		
立替金	8,958,295		
流動資産合計		224,652,205	
2　固定資産			
工具器具備品	1		
敷金	1,802,000		
固定資産合計		1,802,001	
資産合計			226,454,206
Ⅱ　負債の部			
1　流動負債			
未払金	162,857		
未払法人税等	70,000		
未払消費税	1,898,400		
前受会費	370,500		
前受金	1,000,000		
預り金	307,638		
流動負債合計		3,809,395	
2　固定負債			
退職給付引当金	17,220,800		
固定負債合計		17,220,800	
負債合計			21,030,195
Ⅲ　正味財産の部			
前期繰越正味財産		212,270,132	
当期正味財産増加額		△ 6,846,121	
正味財産合計			205,424,011
負債及び正味財産合計			226,454,206

（単位：円）

令和２年度（2020 年度） 財産目録

令和 2 年 9 月 30 日現在

特定非営利活動法人　日本分子生物学会

科　　目	金　　額		
Ⅰ　資産の部			
1　流動資産			
現金預金			
現金	11,545		
郵便振替　00110-1-901302	24,412,641		
普通預金　三菱 UFJ 銀行　春日町支店	2,481,934		
普通預金　三菱 UFJ 銀行　所沢支店	1,503,493		
普通預金　三菱 UFJ 信託銀行　上野支店	225,890		
普通預金　三井住友銀行　飯田橋支店	55,119,270		
普通預金　三井住友信託銀行　芝営業部	352,769		
普通預金　みずほ銀行　本郷支店	102,771		
普通預金　静岡銀行　東京営業部	137,438		
定期預金　三菱 UFJ 銀行　春日町支店	30,000,000		
定期預金　三井住友銀行　飯田橋支店	30,000,000		
定期預金　三菱 UFJ 信託銀行　上野支店	10,000,000		
定期預金　三井住友信託銀行　芝営業部	36,000,000		
定期預金　みずほ銀行　本郷支店	10,000,000		
前払費用　事務所家賃 10 月分	647,751		
前払費用　事務所火災保険 2020.10 － 2022.8	23,958		
前払費用　2020 年分 Genes to Cells オンライン用	4,674,450		
前払費用　第 43 回年会開催補助金	10,000,000		
立替金　　編集経費（2020 年 1 月分以降）	8,958,295		
流動資産合計		224,652,205	
2　固定資産			
工具器具備品 電話取付一式	1		
敷金　学会事務所・編集室	1,802,000		
固定資産合計		1,802,001	
資産合計			226,454,206
Ⅱ　負債の部			
1　流動負債			
未払金　通信運搬費（宅急便代、NTT、メールサーバ）	58,756		
未払金　印刷費（コピーカウンター料）	26,105		
未払金　雑費（外部倉庫、PC サポート）	64,996		
未払金　過入金分	13,000		
未払法人税等	70,000		
未払消費税	1,898,400		
前受会費　令和３年度以降会費	370,500		
前受金　GTC 編集費・出版社補助金	1,000,000		
預り金　富澤基金	137,438		
預り金　源泉所得税	170,200		
流動負債合計		3,809,395	
2　固定負債			
退職給付引当金	17,220,800		
固定負債合計		17,220,800	
負債合計			21,030,195
Ⅲ　正味財産の部			
前期繰越正味財産		212,270,132	
当期正味財産増加額		△ 6,846,121	
正味財産合計			205,424,011
負債及び正味財産合計			226,454,206

（単位：円）

「日本分子生物学会 若手研究助成 富澤純一・桂子基金」
令和２年度（2020 年度）会計報告

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

●令和２年度（2020 年度）富澤基金 決算報告書

令和１年 10 月１日から令和２年９月 30 日まで

科　　目	決　算　額	備　　考
収入の部		
預金利息	1,237	
当期収入合計	1,237	
前期繰越金	18,146,421	
合　　計	18,147,658	
支出の部		
研究助成金	18,000,000	第 10 回研究助成者は６名（1 人 300 万円）
事務・雑費	10,220	貸金庫使用料（静岡銀行）4,400 円、 送金手数料等 5,820 円
当期支出合計	18,010,220	
当基金事業終了残高	137,438	（※次年度会計にて法人本体へ繰入れ予定）
合　　計	18,147,658	

●令和２年度（2020 年度）富澤基金 貸借対照表

令和２年９月 30 日現在

借　　方		貸　　方	
科　　目	金　　額	科　　目	金　　額
資産の部		負債の部	
普通預金	137,438	流動負債	0
		基金会計（期首）	18,146,421
		今年度収支差額	－18,008,983
		基金正味財産	137,438
合　　計	137,438	合　計	137,438

●令和２年度（2020 年度）富澤基金 財産目録

令和２年９月 30 日現在

科　　目	摘　　要	金　　額
普通預金	静岡銀行 東京営業部	137,438
合　　計		137,438

令和２年度（2020 年度） 計算書類の注記

特定非営利活動法人　日本分子生物学会

１．重要な会計方針

計算書類の作成は、NPO 法人会計基準（2010 年 7 月 20 日　2011 年 11 月 20 日一部改正　NPO 法人会計基準協議会）によっております。

⑴　固定資産の減価償却の方法

有形固定資産の減価償却は定率法を採用しております。

⑵　引当金の計上基準

退職給付引当金は従業員の退職給付に備えるため、当期末における退職給付債務に基づき当期末に発生していると認められる金額を計上しております。

なお、退職給付債務は期末自己都合要支給額に基づいて計算しております。

⑶　消費税等の会計処理

消費税等の会計処理は、税込方式を採用しております。

２．事業費の内訳

別紙（48 頁参照）

３．固定資産の増減内訳

（単位：円）

科目	期首取得価額	取得	減少	期末取得価額	減価償却累計額	期末帳簿価額
工具器具備品	955,847	0	0	955,847	△ 955,846	1
敷金	1,802,000	0	0	1,802,000	0	1,802,000
合計	2,757,847	0	0	2,757,847	△ 955,846	1,802,001

【監査報告】

令和 2 年度（2020 年度）決算に関して、令和 2 年 10 月 26 日、独立監査人 宮城秀敏公認会計士の監査を受けました。その計算書類が、我が国において一般に公正妥当と認められる会計基準に準拠して、令和 2 年度の収支、正味財産増減の状況及び同年度末日現在の財政状態をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める．との監査報告書の提出を受けました。その後、同年 11 月 6 日に小安重夫監事、11 月 10 日に町田泰則監事による監査を終了しました。（両監事による会計監査は、帳簿並びに関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きにより行われた）ここにご報告いたします。

特定非営利活動法人　日本分子生物学会
第 21 期理事長　阿　形　清　和
理事（会計幹事）三　浦　正　幸

2020年度事業費の内訳

特定非営利活動法人　日本分子生物学会
（単位：円）

科　目	(1)学術集会、研究発表会、講演会の開催等による分子生物学に関する学術研究事業				(2)分子生物学に関する機関誌及び論文図書等の発行事業				(3)その他目的を達成するために必要な事業			合　計		
	第42回年会	第42回年会開催補助・追加支出（国際化支援）	年会その他	国際会議支援	会報発行	Genes to Cells 編集	Genes to Cells オンライン	ホームページ関係	社会貢献・教育活動	各種委員会（キャリアパス・男女共同参画・その他）	事業費その他（研究倫理・その他）	事業費計	管理部門	合計
Ⅰ　経常収益														
1.　受取入会金	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	848,000	848,000
2.　受取会費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	56,431,000	56,431,000
3.　受取寄付金	5,000,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5,000,000	0	5,000,000
4.　受取助成金	3,308,940	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3,308,940	0	3,308,940
5.　事業収入												0		
(1)学術集会、研究発表会、講演会の開催等による分子生物学に関する学術研究事業	189,623,510	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	189,623,510	0	189,623,510
(2)分子生物学に関する機関誌及び論文図書等の発行事業		0	0	0	0	16,273,687	0	0	0	0	0	16,273,687	0	16,273,687
(3)その他目的を達成するために必要な事業	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
事業収入計	189,623,510	0	0	0	0	16,273,687	0	0	0	0	0	205,897,197	0	205,897,197
6.　その他収益	0	0		0	0	0	0	0	0	0	0	0	88,931	88,931
経常収益計	197,932,450	0	0	0	0	16,273,687	0	0	0	0	0	214,206,137	57,367,931	271,574,068
Ⅱ　経常費用														
(1)　人件費														
給与手当	3,443,172	0	0	0	774,840	774,840	0	1,275,796	1,412,738	3,463,374	318,949	11,463,709	17,002,068	28,465,777
法定福利費	567,599	0	0	0	126,654	126,654	0	211,090	229,854	567,599	51,599	1,881,049	2,809,856	4,690,905
福利厚生費	3,228	0	0	0	720	720	0	1,200	1,307	3,228	293	10,696	15,984	26,680
人件費計	4,013,999	0	0	0	902,214	902,214	0	1,488,086	1,643,899	4,034,201	370,841	13,355,454	19,827,908	33,183,362
(2)　その他経費														
事務所家賃	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3,782,138	3,782,138
業務委託費	77,283,817	0	333,300	0	0	0	5,006,820	1,760,000	0	589,780	24,960	84,998,677	1,941,060	86,939,737
編集業務費	0	0	0	0	0	4,888,583	0	0	0	0	0	4,888,583	0	4,888,583
会員管理システム運用管理費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2,508,000	2,508,000
印刷費	27,437,917	0	0	0	4,079,790	0	0	0	0	196,570	0	31,714,277	1,878,125	33,592,402
通信運搬費	2,903,840	0	0	0	5,129,521	0	0	0	38,976	34,848	0	8,107,185	2,848,587	10,955,772
旅費交通費	19,483,242	5,350,000	75,400	0	0	0	0	0	0	631,100	42,700	25,582,442	1,584,810	27,167,252
会議費	21,744	0	5,939	0	0	5,062	0	0	0	640,581	246,305	919,631	263,969	1,183,600
支払手数料	1,735,002	0	1,870	1,760	3,630	0	0	0	0	3,408	990	1,746,660	1,322,598	3,069,258
消耗品費	0	0	0	0	312,611	0	0	0	0	0	0	312,611	707,660	1,020,271
会場費	31,075,646	0	1,033,470	0	0	0	0	0	0	0	0	32,109,116	0	32,109,116
機材費	26,401,386	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	26,401,386	0	26,401,386
諸会費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10,000	50,000	60,000	0	60,000
広報費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3,080	3,080	0	3,080
補助金	0	0	0	5,000,000	0	0	0	0	0	0	0	5,000,000	0	5,000,000
雑費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	938,448	938,448
租税公課	0	0	0	0	0	763,684	0	0	0	0	0	763,684	3,013,900	3,777,584
寄付金支出	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
特定預金支出（退職給付引当金）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,840,200	1,840,200
その他経費計	186,342,594	5,350,000	1,449,979	5,001,760	9,525,552	5,657,329	5,006,820	1,760,000	38,976	2,106,287	368,035	222,607,332	22,629,495	245,236,827
経常費用計	190,356,593	5,350,000	1,449,979	5,001,760	10,427,766	6,559,543	5,006,820	3,248,086	1,682,875	6,140,488	738,876	235,962,786	42,457,403	278,420,189
増減額	7,575,857	△ 5,350,000	△ 1,449,979	△ 5,001,760	△ 10,427,766	9,714,144	△ 5,006,820	△ 3,248,086	△ 1,682,875	△ 6,140,488	△ 738,876	△ 21,756,649	14,910,528	△ 6,846,121

※ 事務局の人件費（給与手当等）は担当業務量に合わせ、事業費の各科目に按分計上しています．
※ 別紙、第42回年会決算の収支は、NPO法人会計基準に基づき本事業内訳書にて科目振分けがなされています．

【補足資料】第 42 回日本分子生物学会年会　収支決算書

【収入の部】

（単位：円）

項　　目	内　　訳	金　　額	備　　考
Ⅰ　参加費収入		47,888,500	
1　正会員 事前	9,000×2,681名	24,129,000	
2　学生会員 事前	3,000×1,819名	5,457,000	
3　学部学生 事前	0×　36名	—	
4　非会員 事前	12,500×　249名	3,112,500	
	（4,785名）		
5　正会員 当日	11,000×　463名	5,093,000	
6　学生会員 当日	4,000×　101名	404,000	
7　学部学生 当日	0×　267名	—	
8　学非会員 当日	14,500×　666名	9,657,000	
	（1,497名）		
9　展示会参加者	2,000×　18名	36,000	
Ⅱ　主催団体補助金		10,350,000	
1　日本分子生物学会本部（開催補助金）	1式	5,000,000	
2　日本分子生物学会本部（国際化支援金）	1式	5,350,000	Foreign Travel Award 採択充当分35万円を含む。
Ⅲ　プログラム販売		1,078,000	
1　プログラム集	3,000×　343冊	1,029,000	事前 126+ 当日 215+ 販売 2
2　オンライン要旨 ID/PW（非会員）	10,000×　4件	40,000	
3　オンライン要旨 ID/PW（会員）	3,000×　3件	9,000	
Ⅳ　助成金		3,922,740	
1　福岡観光コンベンションビューロー		830,000	
2　シンポジウム・ワークショップ・フォーラム後援・共催費	100,000×　20件	2,000,000	S/WS 17＋F 3
3　JST サテライトシンポジウム開催補助金	1式	478,940	
4　旅行会社協賛金	1式	613,800	
Ⅴ　広告関係費		3,606,400	
1　プログラム広告	8.5枠	1,507,000	
2　HP バナー	6枠	900,400	
3　シンポジウム協賛プレゼンテーション	10枠	550,000	
4　スクリーン広告	13枠	440,000	
5　チェスピンカップスポンサー	2枠	110,000	
6　スタンプラリースポンサー	3枠	99,000	
Ⅵ　商業展示出展料		118,679,000	
1　A タイプ	265小間	104,390,000	
2　B タイプ	22小間	2,849,000	
3　AC タイプ	17小間	3,740,000	
4　NBRP コーナー	40小間	5,500,000	
5　BioDB コーナー	12小間	1,650,000	
6　最先端技術支援コーナー	4小間	550,000	
Ⅶ　バイオテクノロジーセミナー		17,435,000	
1　バイオテクノロジーセミナー共催費	16枠	17,435,000	
Ⅷ　寄付金		5,000,000	
1　日本製薬団体連合会		5,000,000	
Ⅸ　雑収入		322,810	
1　会議室借用料	1式	112,310	
2　託児料金	1式	210,500	託児弁当は軽減税率対象
合　　計		208,282,450	

●上記Ⅱ（本部補助金）を除く収入の合計 197,932,450 円⇒本体会計の事業費内訳「第 42 回年会」経常収益計へ

【支出の部】

（単位：円）

項　　目	金　　額	備　　考
Ⅰ　事前準備関係費	45,337,283	
1　旅費・交通費	899,340	
2　庁費		
（1）　印刷費・制作費	27,437,917	
（2）　通信・運搬費	2,903,840	
（3）　会合費・事務局経費	455,744	
（4）　事務費	13,640,442	
Ⅱ　当日運営関係費	145,002,631	
1　会場関係費	31,075,646	
2　人件費	13,865,216	
3　旅費・交通費	482,220	
4　機材・備品費	26,401,386	
5　看板装飾費	8,773,985	
6　附設展示会設営費	22,728,384	
7　招請関係費	23,649,902	
8　業務委託費	18,025,892	
Ⅲ　事後処理費	1,352,680	
1　会計監査費	330,000	
2　税理・会計事務経費	1,022,680	
Ⅳ　残額（本体会計への精算）	16,589,856	
合　　計	208,282,450	

●上記支出Ⅰ～Ⅲの合算 191,692,594 円－追加支援分 5,350,000 円＝186,342,594 円
⇒本体会計の事業費内訳「第 42 回年会」経常費用の「その他経費計」へ

監査報告書

特定非営利活動法人　日本分子生物学会
理事長　　阿形　清和　　殿

令和２年　11月　6日

特定非営利活動法人　日本分子生物学会

監事　小安重夫

令和２年　11月　10日

特定非営利活動法人　日本分子生物学会

監事　町田泰則

私たちは、日本分子生物学会の令和２年度における財産並びに収支の状況について監査を行った。帳簿並びに関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きを用いて計算書類の正確性を検討した結果、計算書類は、財産並びに収支の状況を正しく示していると認める。

以　上

独立監査人の監査報告書

令和２年１０月２６日

特定非営利活動法人　日本分子生物学会
理事長　　阿形　清和　殿

宮城公認会計士事務所

公認会計士　宮城雅史

私は、特定非営利活動法人 日本分子生物学会 の　令和１年１０月１日から令和２年９月３０日までの令和２年度の計算書類、すなわち、活動計算書、貸借対照表及び財産目録並びに令和１年１０月１日から令和２年９月３０日までの令和２年度の富澤基金 会計報告、すなわち、富澤基金 決算報告書、貸借対照表及び財産目録について監査を行った。この計算書類及び会計報告の作成責任は理事者にあり、私の責任は独立の立場から計算書類及び会計報告に対する意見を表明することにある。

私は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、私に計算書類及び会計報告に重要な虚偽の表示がないかどうかの合理的な保証を得ることを求めている。監査は、試査を基礎として行われ、理事者が採用した会計方針及びその適用方法並びに理事者によって行われた見積もりの評価も含め全体としての計算書類及び会計報告の表示を検討することを含んでいる。私は、監査の結果として意見表明のための合理的な基礎を得たと判断している。

私は、上記の計算書類及び会計報告が、我が国において一般に公正妥当と認められる会計基準に準拠して、特定非営利活動法人 日本分子生物学会 の令和２年度の収支、正味財産増減の状況及び同年度末日現在の財政状態並びに 富澤基金 の令和２年度の収支及び同年度末日現在の財政状態をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

特定非営利活動法人 日本分子生物学会 と私との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以　上

令和３年度（2021年度）活動予算書

令和３年度（2021年度）活動予算書

2020年10月1日から2021年9月30日まで

特定非営利活動法人　日本分子生物学会

科　目	金　額		
Ⅰ 経常収益			
1 受取入会金			
正会員受取入会金	300,000		
学生会員受取入会金	1,000,000	1,300,000	
2 受取会費			
正会員受取会費	49,730,000		
学生会員受取会費	8,640,000		
シニア会員受取会費	250,000		
次世代教育会員受取会費	50,000		
賛助会員受取会費	1,000,000	59,670,000	
3 受取寄付金	3,500,000	3,500,000	
4 受取助成金	1,400,000	1,400,000	
5 事業収入			
⑴学術集会、研究発表会、講演会の開催等による分子生物学に関する学術研究事業	48,500,000		
⑵分子生物学に関する機関誌及び論文図書等の発行事業	16,500,000		
⑶その他目的を達成するために必要な事業	1,500,000	66,500,000	
6 その他収益			
受取利息	10,000		
雑収入	230,000	240,000	
経常収益計			132,610,000
Ⅱ 経常費用			
1 事業費			
⑴人件費			
給与手当	9,950,000		
法定福利費	1,630,000		
福利厚生費	10,000		
人件費計	11,590,000		
⑵その他経費			
業務委託費	50,600,000		
編集業務費	4,500,000		
印刷費	22,300,000		
通信運搬費	5,550,000		
旅費交通費	1,260,000		
会議費	200,000		
支払手数料	1,900,000		
消耗品費	560,000		
会場費	1,000,000		
機材費	400,000		
諸会費	60,000		
広報費	10,000		
補助金	2,000,000		
雑費	690,000		
租税公課	750,000		
その他経費計	91,780,000		
事業費計		103,370,000	
2 管理費			
⑴人件費			
給与手当	18,550,000		
法定福利費	2,800,000		
福利厚生費	20,000		
人件費計	21,370,000		
⑵その他経費			
事務所家賃	3,750,000		
業務委託費	1,950,000		
会員管理システム運用管理費	2,500,000		
印刷費	1,600,000		
通信運搬費	2,800,000		
旅費交通費	1,500,000		
会議費	250,000		
支払手数料	1,200,000		
消耗品費	700,000		
雑費	800,000		
租税公課	2,200,000		
退職給付引当金繰入	1,900,000		
その他経費計	21,150,000		
管理費計		42,520,000	
経常費用計			145,890,000
当期正味財産増加額			△13,280,000
前期繰越正味財産額			205,420,000
次期繰越正味財産額			192,140,000

（単位：円）

令和３年度（2021年度）活動予算 事業費の内訳

特定非営利活動法人　日本分子生物学会
（単位：円）

科　目	(1)学術集会、研究発表会、講演会の開催等による分子生物学に関する学術研究事業				(2)分子生物学に関する機関誌及び論文図書等の発行事業				(3)その他目的を達成するために必要な事業			合計		
	第43回年会	第43回年会開催補助・追加支出（国際化支援）	年会その他	国際会議支援	会報発行	Genes to Cells 編集	Genes to Cells オンライン	ホームページ関係	社会貢献・教育活動	各種委員会（キャリアパス・男女共同参画・その他）	事業費その他（研究倫理・その他）	事業費計	管理部門	合計
Ⅰ　経常収益														
1．受取入会金	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,300,000	1,300,000
2．受取会費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	59,670,000	59,670,000
3．受取寄付金	3,500,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3,500,000	0	3,500,000
4．受取助成金	1,400,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,400,000	0	1,400,000
5．事業収入												0		
(1)学術集会、研究発表会、講演会の開催等による分子生物学に関する学術研究事業	48,500,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	48,500,000	0	48,500,000
(2)分子生物学に関する機関誌及び論文図書等の発行事業	0	0	0	0	0	16,500,000	0	0	0	0	0	16,500,000	0	16,500,000
(3)その他目的を達成するために必要な事業	0	0	0	0	500,000	0	0	1,000,000	0	0	0	1,500,000	0	1,500,000
事業収入計	48,500,000	0	0	0	500,000	16,500,000	0	1,000,000	0	0	0	66,500,000	0	66,500,000
6．その他収益	0			0	0	0	0	0	0	0	0	0	240,000	240,000
経常収益計	53,400,000	0	0	0	500,000	16,500,000	0	1,000,000	0	0	0	71,400,000	61,210,000	132,610,000
Ⅱ　経常費用														
(1)　人件費														
給与手当	2,000,000	0	0	0	800,000	800,000	0	1,250,000	1,400,000	3,400,000	300,000	9,950,000	18,550,000	28,500,000
法定福利費	300,000	0	0	0	130,000	130,000	0	220,000	230,000	570,000	50,000	1,630,000	2,800,000	4,430,000
福利厚生費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10,000	0	10,000	20,000	30,000
人件費計	2,300,000	0	0	0	930,000	930,000	0	1,470,000	1,630,000	3,980,000	350,000	11,590,000	21,370,000	32,960,000
(2)　その他経費														
事務所家賃	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3,750,000	3,750,000
業務委託費	39,000,000	5,000,000	300,000	0	0	0	4,500,000	1,700,000	0	100,000	0	50,600,000	1,950,000	52,550,000
編集業務費	0	0	0	0	0	4,500,000	0	0	0	0	0	4,500,000	0	4,500,000
会員管理システム運用管理費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2,500,000	2,500,000
印刷費	18,600,000	0	0	0	3,500,000	0	0	0	50,000	150,000	0	22,300,000	1,600,000	23,900,000
通信運搬費	1,500,000	0	0	0	4,000,000	0	0	0	50,000	0	0	5,550,000	2,800,000	8,350,000
旅費交通費	800,000		50,000	0	0	0	0	0	100,000	300,000	10,000	1,260,000	1,500,000	2,760,000
会議費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	200,000	0	200,000	250,000	450,000
支払手数料（年会演者謝礼含む）	1,900,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,900,000	1,200,000	3,100,000
消耗品費	300,000	0	0	0	250,000	0	0	0	10,000	0	0	560,000	700,000	1,260,000
会場費	1,000,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,000,000	0	1,000,000
機材費	400,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	400,000	0	400,000
諸会費	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10,000	50,000	60,000	0	60,000
広報費	0	0	0	0	0	0	0	0	10,000	0	0	10,000	0	10,000
補助金	0	0	0	2,000,000	0	0	0	0	0	0	0	2,000,000	0	2,000,000
雑費	640,000	0	0	0	0	0	0	0	50,000	0	0	690,000	800,000	1,490,000
租税公課	0	0	0	0	0	750,000	0	0	0	0	0	750,000	2,200,000	2,950,000
特定預金支出（退職給付引当金）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,900,000	1,900,000
その他経費計	64,140,000	5,000,000	350,000	2,000,000	7,750,000	5,250,000	4,500,000	1,700,000	270,000	760,000	60,000	91,780,000	21,150,000	112,930,000
経常費用計	66,440,000	5,000,000	350,000	2,000,000	8,680,000	6,180,000	4,500,000	3,170,000	1,900,000	4,740,000	410,000	103,370,000	42,520,000	145,890,000
増減額	－13,040,000	－5,000,000	－350,000	－2,000,000	－8,180,000	10,320,000	－4,500,000	－2,170,000	－1,900,000	－4,740,000	－410,000	－31,970,000	18,690,000	－13,280,000

↑
※「43回年会・追加支援」500万円

学術賞、研究助成の本学会推薦について

本学会に推薦依頼あるいは案内のある学術賞、研究助成は、本号に一覧として掲載しております。そのうち、応募にあたり学会等の推薦が必要なものについての本学会からの推薦は、賞推薦委員会または研究助成選考委員会の審査に従って行います。応募希望の方は、直接助成先に問合わせ、申請書類を各自お取寄せのうえ、ふるってご応募下さい。

本学会への推薦依頼の手続きは次の通りです。

1. 提出物

1)本申請に必要な書類（オリジナルおよび募集要項に記載されている部数のコピー）

2)本学会の選考委員会審査用に、上記申請書類のコピー計6部

3)論文（別刷は各種財団等応募先の必要部数をご用意下さい。委員会用の論文は不要です）

4)上記1）2）3）の送付とは別に、学会用控として申請書の電子データ(論文は不要)を学会事務局〈info@mbsj.jp〉まで送信して下さい。
電子データはWord、PDFファイルのいずれでも結構です。
＊必ず学会の締切日までに郵送資料と電子データの両方が到着するようにご手配下さい。

2. 提出先

※賞推薦についての送付先

日本分子生物学会・賞推薦委員長　泊　幸秀
〒102-0072　千代田区飯田橋2-11-5
人材開発ビル4階
日本分子生物学会事務局気付

※研究助成についての送付先

日本分子生物学会・研究助成選考委員長　一條　秀憲
〒102-0072　千代田区飯田橋2-11-5
人材開発ビル4階
日本分子生物学会事務局気付

3. 提出期限

財団等の締切りの1カ月前まで。提出期限後に受取った場合や、提出書類が不備な場合は、選考の対象にならないことがあります。推薦手続きのことでご不明な点がありましたら、学会事務局までお問合わせ下さい。

※研究助成（学会推薦）に関する留意事項

学会推薦した会員が財団等の研究助成対象者となった場合には、その研究成果を将来、学会誌「Genes to Cells」に論文あるいは総説として発表して頂くように要請いたします。

応募に際しては、その旨をご了解くださるようお願いします。

※各種学術賞（学会推薦）に関する留意事項

- 委員会の内規により、外部財団等の各種学術賞への推薦は、原則として一人につき年度あたり1件となっておりますので、ご了解ください。
（本学会の事業年度は10月1日から翌年9月30日までです）
- 重複申請があった場合、すでにある賞等の推薦が決定されている候補者は、それ以降審査する他の賞等の推薦候補者として原則的に考慮いたしません。応募に際し、ご留意くださるようお願いします。

学術賞、研究助成一覧

名　称	連　絡　先	件　数	締　切	助成内容等	概　要
第 52 回三菱財団 自然科学研究助成	(公財)三菱財団 〒 100-0005 千代田区丸の内 2-3-1 TEL：(03) 3214-5754	総額 3 億 3,000 万円	2021 年 2 月 3 日	1 件当たり 2,000 万円まで	自然科学のすべての分野にかかわる独創的かつ先駆的研究を支援。
山田科学振興財団 2021 年度研究援助	(公財)山田科学振興財団 〒 544-8666 大阪市生野区巽西 1-8-1 TEL：(06) 6758-3745	15 件程度 (本学会の推薦枠は 5 件)	2021 年 2 月 28 日	1 件当たり 100～500 万円、 総額 4,000 万円	自然科学の基礎的研究に対しての研究費援助。 〔推薦書は山田財団HPよりダウンロード http://www.yamadazaidan.jp/〕
山田科学振興財団 国際学術集会開催助成 (2023 年開催)		総額 800 万円以内	2020 年 4 月 1 日～ 2021 年 2 月 28 日 (募集期間)	総額 800 万円以内	以下の要件を満たす学術集会を山田コンファレンスもしくは山田シンポジウムと称し、これらの開催を援助する。 ①基礎科学の適切なテーマについて、国際的視野で最高レベルの研究を総括する。 ②研究者の世代間の対話によって、若い世代の研究の発展の基礎を構築する。 ③異分野間の交流を図り、cross-disciplinary な討論を通じて新しい発展を模索する。 詳細　山田財団 HP 参照。
第 37 回国際生物学賞	国際生物学賞委員会 〒 102-0083 千代田区麹町 5-3-1 日本学術振興会内 TEL：(03) 3263-1724	1 件 (1 件)	2021 年 4 月 9 日	賞状、賞牌、 1,000 万円	生物学の研究において世界的に優れた業績を挙げ、世界の学術進歩に大きな貢献をした研究者。授賞分野は、国際生物学賞委員会が毎年決定する。授賞分野は、国際生物学賞委員会が毎年決定する。第 37 回の授賞分野は「ヒト進化の生物学（Biology of Human Evolution)」。
2021 年度 持田記念学術賞	(公財)持田記念医学薬学振興財団 〒 160-0003 新宿区四谷本塩町 3-1 四谷ワイズビル TEL：(03) 3357-1282	2 件以内 (1 件)	2021 年＊ 5 月 20 日	1 件 1,000 万円	学術賞は次の 6 項目の研究分野で、研究の進歩発展のため顕著な功績のあった研究者に贈呈。 ⑴バイオ技術を基盤とする先端医療に関する研究 ⑵バイオ技術を基盤とするゲノム機能 / 病態解析に関する研究 ⑶免疫 / アレルギー / 炎症の治療ならびに制御に関する研究 ⑷循環器 / 血液疾患の病態解析 / 治療制御に関する研究 ⑸創薬・創剤の基盤に関する研究 ⑹創薬の臨床応用に関する研究
2021 年度 研究助成		総額 3 億 4,500 万円 115 件	2021 年＊ 5 月 7 日	1 件 300 万円	
2021 年度留学補助金		総額 1,000 万円 20 件	2021 年＊ 5 月 14 日	1 件 50 万円	
2022 年度笹川科学 研究助成	(公財)日本科学協会 〒 107-0052 港区赤坂 1-2-2 日本財団ビル TEL：(03) 6229-5365	生物系で154件 (2020年度実績)	募集期間 2021 年＊ 9 月 15 日～ 10 月 15 日	1 件当たり 100 万円まで	人文・社会科学および自然科学(医学を除く）の独創性・萌芽性をもつ研究に関するもの。4 月 1 日現在、35 歳以下の若手研究者へ助成。
上　原　賞	(公財)上原記念生命科学財団 〒 171-0033 豊島区高田 3-26-3 TEL：(03) 3985-3500	2 件以内 (1 件)	2021 年＊ 9 月 3 日	金牌、 3,000 万円	生命科学の東洋医学、体力医学、社会医学、栄養学、薬学一般および基礎医学、臨床医学で顕著な業績を挙げ、引き続き活躍中の研究者。 〔推薦書は上原財団webシステムにあり、事前に分生事務局に連絡要。〕
第 38 回井上学術賞	(公財)井上科学振興財団 〒 150-0036 渋谷区南平台町 15-15-601 TEL：(03) 3477-2738	5 件以内 (2 件)	2020 年＊ 9 月 17 日	賞状、金メダル、 200 万円	自然科学の基礎的研究で特に顕著な業績を挙げた者（ただし締切日現在、50 歳未満の者)。
第 38 回井上研究奨励賞		40 件	2020 年＊ 9 月 17 日	賞状及び銅メダル、 50 万円	過去 3 年間に、理学・工学・医学・薬学・農学等の自然科学の基礎的研究において、新しい領域を開拓する可能性のある優れた博士論文を提出し博士の学位を取得した研究者で、37 歳未満の者。
第 14 回井上リサーチアウォード		4 名以内 (うち 1 名以上女性研究者)	2020 年＊ 7 月 30 日	1 人当たり 500 万円	開拓的発展を目指す若手研究者の独創性と自立を支援する目的で、研究を助成。研究期間は 2 年。

名　称	連　絡　先	件　数	締　切	助成内容等	概　要
第30回木原記念財団学術賞	(公財)木原記念横浜生命科学振興財団 〒230-0045 横浜市鶴見区末広町1-6 TEL：(045) 502-4810	1件 (1件)	2021年＊ 9月30日	賞状、 200万円	生命科学の分野で優れた独創的研究を行っている国内の研究者であり、今後のさらなる発展が大きく期待できる者。原則として締切日現在50歳以下を対象とする。
第5回バイオインダストリー大賞	(一財)バイオインダストリー協会 〒104-0032 中央区八丁堀2-26-9 グランデビル8F TEL：(03) 5541-2731	1件	2021年＊ 4月20日	賞状、賞牌、 副賞300万円	バイオサイエンス、バイオテクノロジーおよびバイオインダストリーの分野の発展に大きく貢献した、または今後の発展に大きく貢献すると期待される業績を上げた個人、少人数のグループまたは組織に授与される。
第5回バイオインダストリー奨励賞		10件以内	2021年＊ 4月20日	賞状および 副賞30万円	バイオサイエンス、バイオテクノロジーに関連する応用を指向した研究で、 Ⓐ医薬・ヘルスケア Ⓑ食品・第一次産業 Ⓒ化学・材料・環境・エネルギー などの分野で産業を生み出す研究であり、これらの分野に携わる有望な若手研究者を対象とする。年齢45歳未満。
住友財団2021年度基礎科学研究助成	(公財)住友財団 〒105-0012 港区芝大門1-12-6 住友芝大門ビル2号館 TEL：(03) 5473-0161	総額 1億5,000万円 90件程度	2021年＊ 6月30日 (データ送信の締切日：6月4日)	1件当たり500万円まで	理学(数学、物理学、化学、生物学)の各分野及びこれらの複数にまたがる分野の基礎研究で萌芽的なもの。若手研究者（個人またはグループ）を対象とする。
第63回藤原賞	(公財)藤原科学財団 〒104-0061 中央区銀座3-7-12 TEL：(03) 3561-7736	2件 (2件)	2021年＊ 12月15日	副賞1,000万円	推薦の対象は自然科学分野に属するもの。わが国に国籍を有し、科学技術の発展に卓越した貢献をした者。
科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞および若手科学者賞	文部科学省 研究振興局振興企画課奨励室 〒100-8959 千代田区霞が関3-2-2 TEL：(03) 6734-4071	科学技術賞96件(年)のうち、研究部門は50件（令和2年度） 若手科学者賞は100名程度 (学会推薦枠は定まっていないが推薦は若干名まで)	2021年＊ 7月23日	表彰状及び副賞	我が国の科学技術の発展等に寄与する可能性の高い独創的な研究又は発明を行った個人又はグループを表彰。 萌芽的な研究、独創的視点に立った研究等、高度な研究開発能力を示す顕著な研究業績を誉げた40歳未満の若手研究個人。
2021年度島津賞	(公財)島津科学技術振興財団 〒604-8445 京都市中京区 西ノ京徳大寺町1 TEL：(075) 823-3240	1件 (推薦件数に制限なし)	2021年＊ 7月30日	賞状、賞牌、 副賞500万円	科学技術、主として科学計測に係る領域で、基礎的研究および応用・実用化研究において、著しい成果をあげた功労者を対象とする。
2021年度島津奨励賞		3件 (推薦件数に制限なし)	2021年＊ 7月30日	賞状、トロフィー、 副賞100万円	わが国の科学技術振興を目的として、科学技術、主として科学計測に係る領域で、基礎的研究および応用・実用化研究において独創的成果をあげ、かつその研究の発展が期待される研究者を表彰する。対象者は45歳以下。
島津科学技術振興財団研究開発助成		総額 2,300万円	2021年＊ 7月30日	1件100万円	科学技術、主として科学計測に係る領域で、基礎的研究を対象とする。国内の研究機関に所属する45歳以下の新進気鋭の研究者。国籍不問。
東レ科学技術賞	(公財)東レ科学振興会 〒103-0021 中央区日本橋本石町3-3-16 (日本橋室町ビル) TEL：(03) 6262-1655	2件以内 (2件)	2021年＊ 10月8日	1件につき 賞状、金メダル、 500万円	理学・工学・農学・薬学・医学（除・臨床医学）の分野で、学術上の業績顕著な者、学術上重要な発見をした者、効果が大きい重要な発明をした者、技術上の重要問題を解決し貢献が大きい者。
東レ科学技術研究助成		総額 1億3,000万円 10件程度 (2件)	2021年＊ 10月8日	特に定めず最大3,000万円程度まで	今後の研究の成果が科学技術の進歩・発展に貢献するところが大きいと考えられる、独創的、萌芽的な研究を活発に行っている若手研究者（原則として45歳以下）。
ノバルティス研究奨励金	(公財)ノバルティス科学振興財団 〒106-6333 港区虎ノ門1-23-1 虎ノ門ヒルズ森タワー31F TEL：(03) 6899-2100	約35件 指定機関からの推薦必要	2021年＊ 9月10日	1件100万円	生物・生命科学、関連する化学および情報科学の領域における創造的な研究に対して助成。

名　称	連　絡　先	件　数	締　切	助成内容等	概　要
第 53 回内藤記念科学振興賞	(公財)内藤記念科学振興財団 〒 113-0033 文京区本郷 3-42-6 NKD ビル 8F TEL：(03) 3813-3861	1 件 (1 件)	2021 年＊ 9 月 24 日	金メダル、 1000 万円	人類の健康の増進に寄与する自然科学の基礎的研究において、独創的テーマに取り組み、その進歩発展に顕著な功績を挙げた研究者。
第 53 回海外学者招へい助成金		前期・後期 各 10 件以内 (前期・後期 各々 1 件)	2021 年＊ 6 月 1 日・ 9 月 24 日	1 件 20～80 万円 まで (エリアによる)	同上のテーマに取り組み、国際的に高い評価を得ている外国の研究者を招へいする受入れ責任者（当該学術集会の組織委員長）に助成。
ブレインサイエンス財団研究助成	(公財)ブレインサイエンス振興財団 〒 104-0028 中央区八重洲 2-6-20 TEL：(03) 3273-2565	15 件以内	2021 年＊ 10 月 8 日	1 件 80～100 万円	脳科学の広い分野における独創的な研究計画への助成。
塚原仲晃記念賞		1 件		賞牌ならびに 副賞 100 万円	生命科学の分野において優れた独創的研究を行っている 50 歳以下の研究者。
海外派遣研究助成		若干件	2022 年＊ 1 月 10 日	1 件 30 万円まで	我が国における脳科学の研究の促進を図るため、国際学会、シンポジウム等への参加、あるいは短期間の研究者の海外派遣を助成。
海外研究者招聘助成		若干件		1 件 30 万円まで	脳科学研究分野において独創的テーマに意欲的に取り組んでいる外国人研究者の短期間の招聘を助成。
2021 年 コスモス国際賞	(公財)国際花と緑の博覧会記念協会 〒 538-0036 大阪市鶴見区緑地公園 2-136 TEL：(06) 6915-4513	1 件 (1 件)	2021 年＊ 4 月 9 日	賞状、メダル、 副賞 4,000 万円	花と緑に象徴されるすべての生命現象に関し、地球的視点における生命体相互の関係性、統合成の本質を解明しようとする研究や業績を対象とする。
2022 年度研究助成	(公財)長瀬科学技術振興財団 〒 550-8668 大阪市西区新町 1-1-17 TEL：(06) 6535-2117	20 件程度	2021 年＊ 11 月 1 日	1 件 250 万円	有機化学（材料化学を含む）及び生化学並びに関連分野における研究が助成対象。
第 18 回日本学術振興会賞	(独)日本学術振興会 研究者養成課 「日本学術振興会賞」担当 〒 102-0083 千代田区麹町 5-3-1 TEL：(03) 3263-0912	25 件程度 (機関長推薦扱いとして学会推薦枠も若干件あり)	2021 年＊ 4 月上旬 (受付日)	賞状、賞碑、 研究奨励金 110 万円	人文、社会科学及び自然科学にわたる全分野が対象。博士の学位を取得しており、国内外の学術誌等に公表された論文、著書、その他の研究業績により学術上特に優れた成果を上げたと認められた研究者（45 歳未満）。
第 12 回日本学術振興会育志賞		16 件程度 (1 件)	2021 年＊ 6 月上旬 (受付日)	賞状、賞碑、 学業奨励金 110 万円	我が国の学術研究の発展に寄与することが期待される優秀な大学院博士課程の学生を顕彰（34 歳未満）。
(一財) 材料科学技術振興財団 山崎貞一賞	(一財)材料科学技術振興財団 〒 157-0067 世田谷区喜多見 1-18-6 TEL：(03) 3415-2200	各分野 1 件	2021 年＊ 4 月 30 日	賞状、金メダル、 300 万円	授賞対象は、「材料」、「半導体及び AI・システム・ソフトウェア」、「計測評価」、「バイオサイエンス・バイオテクノロジー」の 4 分野からなり、うち 2 分野が毎年の授賞対象とされる。論文の発表、特許の取得、方法・技術の開発等を通じて、実用化につながる優れた業績をあげている者。
令和 3 年度研究助成	(公財)光科学技術研究振興財団 〒 430-0926 浜松市中区砂山町 325-6 TEL：(053) 454-0598	25～35 件 総額 5,000 万円	2021 年＊ 6 月 30 日	助成金総額 約 5,000 万円	光科学に関係する研究に対して助成。対象課題有り。
令和 3 年度 晝馬輝夫　光科学賞		1 件	2021 年＊ 6 月 30 日	副賞 500 万円	日本の光科学の基礎研究や光科学技術の発展に貢献する研究において、独自に独創的な研究業績を挙げた研究者個人。(応募締切時点で 45 歳未満) 外国籍の場合は、日本の大学等公的機関に 5 年以上在籍し、その間に対象となる研究成果の中核を形成された方。
2021 年度朝日賞	朝日新聞社 CSR 推進部 「朝日賞」事務局 〒 104-8011 中央区築地 5-3-2 TEL：(03) 5540-7453	ここ最近は 4～5 件 (1 件)	2021 年＊ 8 月 25 日	正賞(ブロンズ像) と副賞 500 万円	学術、芸術などの分野で傑出した業績をあげ、わが国の文化、社会の発展、向上に多大の貢献をされた個人または団体に贈られる。
第 33 回加藤記念研究助成	(公財)加藤記念バイオサイエンス研究振興財団 〒 194-8533 町田市旭町 3-6-6 TEL：(042) 725-2576	総額 5,000 万円	2021 年＊ 9 月 30 日	1 件 200 万円	バイオサイエンスの基礎分野において、独創的かつ先駆的研究をめざす国内の若手研究者（40 歳以下）を支援する。

名　称	連　絡　先	件　数	締　切	助成内容等	概　要
第 11 回（2022 年度） 三島海雲学術賞	(公財)三島海雲記念財団 〒 150-0012 渋谷区広尾 1-6-10 ジラッファビル TEL：(03) 5422-9898	自然科学部門で 2 件以内 (2 件)	2021 年＊ 9 月 30 日	賞状、 副賞 200 万円	自然科学部門は、食の科学に関する研究が対象。国内外の学術誌等に公表された論文、著書、その他の研究業績により独創的で発展性のある顕著な業績を挙げている 45 歳未満の若手研究者。
2021 年度 三島海雲学術研究奨励金（研究助成）		全部門計 60 件程度	2021 年 1 月 12 日 ～2 月 26 日	個人研究奨励金は 1 件 100 万円	食の科学に関する学術研究。若手研究者および女性研究者の積極的応募を期待する。
第 9 回ヤマト科学賞	ヤマト科学㈱内 ヤマト科学賞選考委員会事務局 〒 135-0047 江東区富岡 2-11-6 HASEMAN ビル TEL：(03) 5639-7070	1 件	2021 年＊ 11 月 30 日	賞状、賞牌、 副賞 100 万円	独創性、創造性に富む、気鋭の研究者を顕彰。対象分野はライフサイエンス、マテリアルサイエンス、インフォメーションサイエンス等の自然科学、技術分野およびその融合領域分野。
2021 年度 小野医学研究助成	(公財) 小野医学研究財団 〒 541-8526 大阪市中央区道修町 2-1-5 TEL：(06) 6232-1960	12 件以内	2021 年＊ 6 月 1 日 ～7 月 30 日 (受付日)	1 件 200 万円	助成テーマは脂質代謝異常に伴う疾患の病態生理に関する研究(2020 年度)。①基礎医学②臨床医学③疫学④薬学⑤その他の領域 研究奨励助成は満 40 歳以下に限る。
2021 年度 小野医学研究奨励助成		16 件以内		1 件 100 万円	
第 5 回早石修記念賞		1 件 (1 件)	2021 年＊ 8 月 31 日	正賞（楯）、 副賞 500 万円	脂質研究において、独創的な研究による新しい分野の確立等、その進展に著名な功績をあげた研究者。
第 26 回慶應医学賞	慶應義塾医学振興基金事務室 〒 160-8582 新宿区信濃町 35 TEL：(03) 5363-3609	2 件[国内 1 名、国外 1 名] (若干名)	2021 年＊ 3 月 5 日	メダル、 副賞 1,000 万円	基礎医学・臨床医学ならびに医学に密接に関連した生命科学の諸領域で活躍されている方が対象。
大隅基礎科学創成 財団第 5 期研究助成	(公財) 大隅基礎科学創成財団事務局 〒 226-8503 横浜市緑区長津田町 4259 S2-16 TEL：(045) 459-6975	基礎科学 (一般) で 6～10 件	2021 年＊ 6 月 30 日	1 件 1,200 万円まで	細胞・組織・個体の新しい生理現象の発見とその分子機構の解明をテーマとする基礎研究を支援。
		基礎科学 (酵母) で 3 件程度		1 件 500 万円まで	新しい生理現象の発見やその分子機構の解明等、人類と深い関わりのある酵母を対象としたこの生物種ならではの基礎研究をテーマとして支援。
第 3 回小林賞	(公財) 小林財団東京事務所 〒 106-0032 港区六本木 1-7-27 全特六本木ビル East TEL：(03) 5575-7525	1 件 (1 件)	2021 年＊ 9 月 17 日	賞状、賞牌、 副賞 3,000 万円	医学、薬学、農学、工学、理学などの生命科学に関する分野において、独創的な研究を行い、顕著な成果を挙げ、さらにその後も当該研究分野の発展が期待される国内の研究者を対象とする。
2021 年度 地神芳文記念 研究助成金	理化学研究所 環境資源科学研究センター内 (特非) 酵母細胞研究会 〒 351-0198 和光市広沢 2-1 TEL：(048) 462-1335	2～3 件	2021 年 4 月 16 日	1 件 50 万円以内	酵母あるいは糖鎖に関する研究を助成。基礎あるいは応用の別を問わない。39 歳以下を対象者とする。
2022 年度 一般研究助成	(公財) 発酵研究所 〒 532-8686 大阪市淀川区十三本町 2-17-85 TEL：(06) 6300-6555	全研究課題で 41 件	2021 年＊ 7 月 30 日	1 件 300 万円	研究課題あり。 (1)微生物の分類に関する研究(分離、分類、保存) (2)微生物の基礎研究（生化学、構造、遺伝、生理、生態、進化など） (3)微生物の応用研究（発酵、生理活性物質、プロバイオティクス、環境保全、バイオエネルギーなど）
2022 年度 大型研究助成		若干件	2021 年＊ 7 月 30 日	1 件 1,000 万円	
2022 年度 若手研究者助成		若干件	2021 年＊ 7 月 30 日	1 件 300 万円	35 歳以下を対象とし、以下の研究課題あり。 (1)微生物の分類に関する研究(分離、分類、保存) (2)微生物の基礎研究（生化学、構造、遺伝、生理、生態、進化など）

●件数の（　　）内は、応募に当たり学協会等からの推薦が必要な場合、本学会の推薦枠を示しています。

＊は、本年度の案内を受取っておらず、昨年の締切日を参考に示してあります。
締切日を過ぎているものは、本年度応募は終了していますが、参考資料として掲載しました。

日本分子生物学会　賛助会員一覧

（2021 年 2 月現在）

アサヒグループホールディングス株式会社
株式会社エー・イー企画
科研製薬株式会社 薬理部
コスモ・バイオ株式会社
株式会社 seeDNA 法医学研究所
ジェンスクリプトジャパン株式会社
第一三共株式会社 モダリティ研究所
タカラバイオ株式会社 事業開発部
株式会社ダスキン 開発研究所
株式会社東海電子顕微鏡解析
東洋紡株式会社 バイオテクサポート事業部
株式会社トミー精工
ナカライテスク株式会社 開発企画部広報課
日本甜菜製糖株式会社 総合研究所第二グループ
浜松ホトニクス株式会社 システム営業部
富士レビオ株式会社 研究推進部バイオ研究グループ
フナコシ株式会社
三菱ケミカル株式会社
ヤマサ醤油株式会社 R & D 管理室
湧永製薬株式会社 研究管理部研究管理課
ワケンビーテック株式会社 学術部

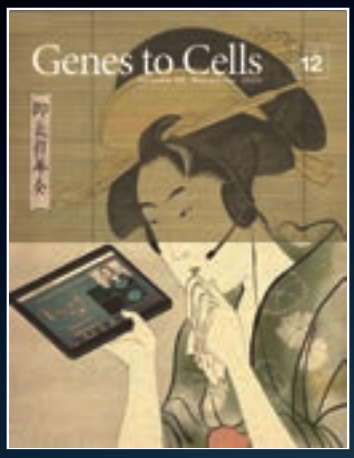
（21 社、50 音順）

■第 44 回（2021 年）日本分子生物学会年会 公式サイト
URL: https://www2.aeplan.co.jp/mbsj2021/

■日本分子生物学会 Facebook 公式アカウント
URL: https://www.facebook.com/mbsj1978/

特定非営利活動法人
日本分子生物学会　事務局

〒 102-0072　東京都千代田区飯田橋 2-11-5
人材開発ビル 4 階
TEL: 03-3556-9600　FAX: 03-3556-9611
E-mail: info@mbsj.jp



Genes to Cells

Published on behalf of the Molecular Biology Society of Japan

Edited by: Eisuke Nishida
Frequency: Monthly | Impact Factor 1.655

日本分子生物学会の学会誌Genes to Cellsは、分子生物学の優れた研究成果を掲載し、
著者にとって有益な学術情報や先見性の高い最新の研究情報を提供しています。
全世界13,000以上の機関で読まれており、年間310,000件以上のダウンロード数を誇ります。
是非Genes to Cellsにご投稿ください。

Genes to Cells　投稿の利点

- わかりやすく便利なオンライン投稿システム
- カラー掲載料無料
- 出版までの過程をお知らせするAuthor Servicesをご利用いただけます
- 早期出版EarlyViewサービスにより、最新号への収載を待たずにオンラインで出版されます
- 出版後6ヵ月経過した全論文が無償公開となり、世界中からアクセス可能になります
- オープンアクセス希望者はオプションで『Online Open』（有料）を選択できます
- 総説は日本分子生物学会のサポートをうけ、出版と同時に無料公開されます

オンライン投稿はこちら　https://mc.manuscriptcentral.com/gtc

2018年 • 2019年出版　引用数TOP論文　*2020年12月現在

The cohesin complex in mammalian meiosis (Volume 24, Issue 1)
Ishiguro, K

Omics research project on prospective cohort studies from the Tohoku Medical Megabank Project (Volume 23, Issue 6)
Koshiba, S; Motoike, I; Saigusa, D; Inoue, J; Shirota, M; Katoh, Y; Katsuoka, F; Danjoh, I; Hozawa, A; Kuriyama, S; Minegishi, N; Nagasaki, M; Takai-Igarashi, T; Ogishima, S; Fuse, N; Kure, S; Tamiya, G; Tanabe, O; Yasuda, J; Kinoshita, K; Yamamoto, M

PAC1-PAC2 proteasome assembly chaperone retains the core α4-α7 assembly intermediates in the cytoplasm (Volume 23, Issue 10)
Wu, W; Sahara, K; Hirayama, S; Zhao, X; Watanabe, A; Hamazaki, J; Yashiroda, H; Murata, S

Involvement of miR-140-3p in Wnt3a and TGFβ3 signaling pathways during osteoblast differentiation in MC3T3-E1 cells (Volume 23, Issue 7)
Fushimi, S; Nohno, T; Nagatsuka, H; Katsuya, H

Estimated number of off-target candidate sites for antisense oligonucleotides in human mRNA sequences (Volume 23, Issue 6)
Yoshida, T; Naito, Y; Sasaki, K; Uchida, E; Sato, Y; Naito, M; Kawanishi, T; Obika, S; Inoue, T

iPhone, iPad 用ジャーナルアプリ
を使って閲覧できます。
←―― 無料ダウンロ ード

ジャーナル閲覧ページ

www.wileyonlinelibrary.com/journal/gtc
日本分子生物学会員は無料でアクセスできます。
初回ユーザー登録は学会事務局まで (info@mbsj.jp)
登録後の問合せはWileyまで (cs-japan@wiley.com)

MBSJ

WILEY

The Molecular Biology Society of Japan NEWS

日本分子生物学会 会報

（年 3 回刊行）

第 129号（2021年2月）

発　行――特定非営利活動法人　日本分子生物学会

代表者――白髭　克彦